

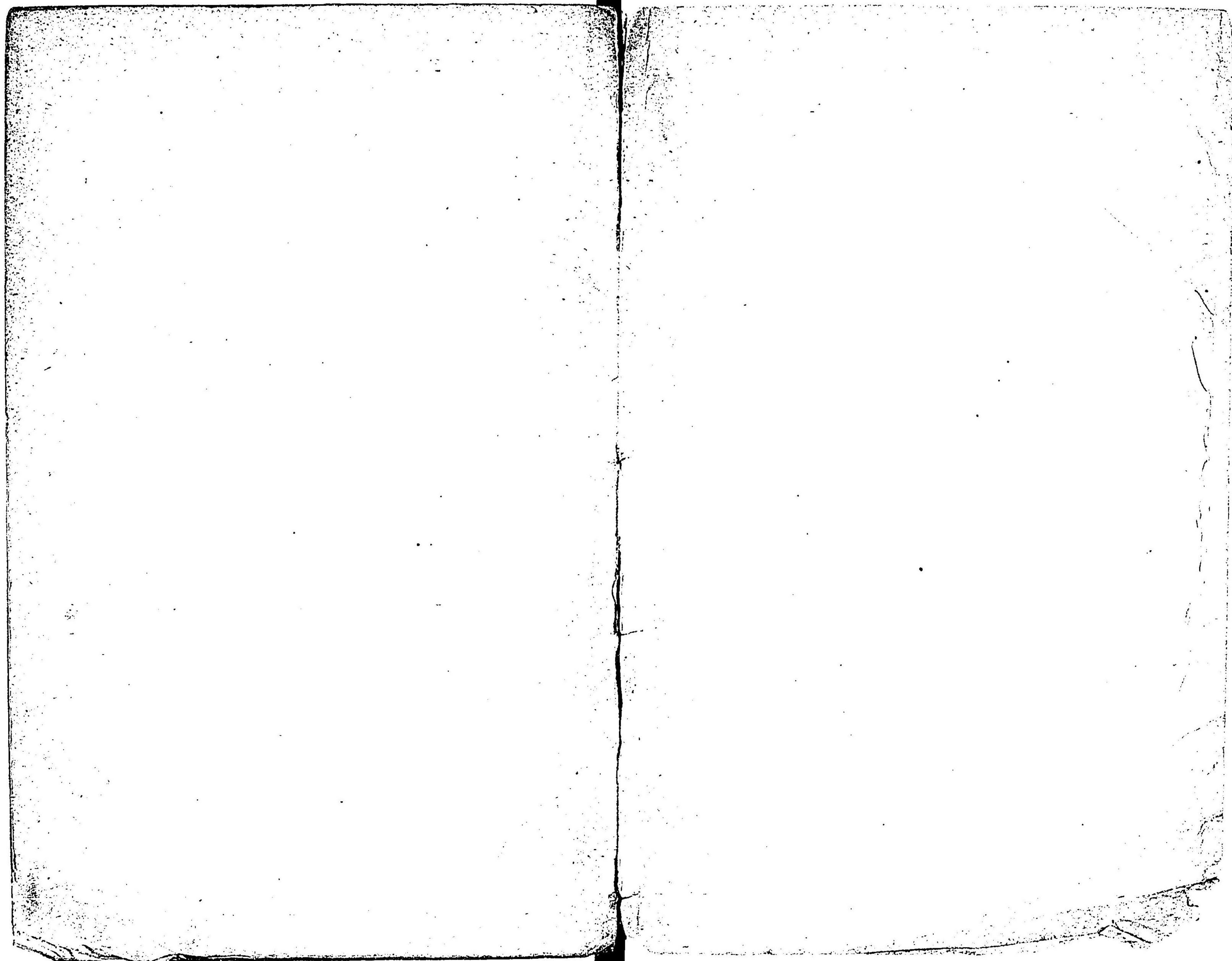
91

43

韓

退

之

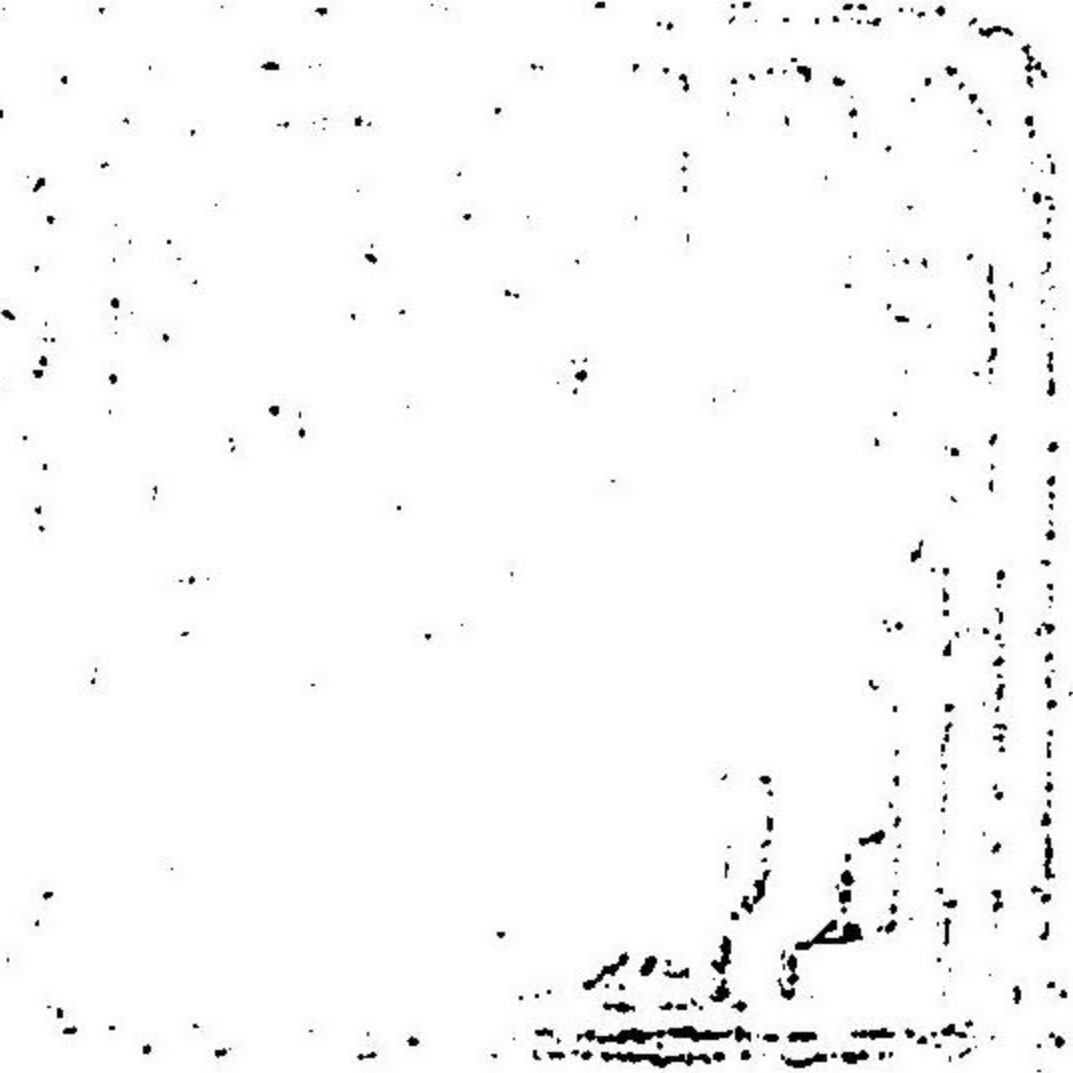


文學士久保天隨著

韓

退之

鍾美堂發行



小序

去歲四月「柳宗元」を刊行せしとき、「韓退之」を續選すべきを大方に約し、梧葉秋聲を報ずる節を以て、其期と爲したり。而して之を過ぐる數月に及びしもの、他の故あるに非ず、著者の身邊、俗務蝟集、筆硯に親しむ能はざりしに由るのみ。

稿を起して二旬、僅に略傳を畢りて、紙數すでに二百頁に上る。仍て之を前編となし、急に刊行して、聊か世の囑望に酬ゆ。凡そ韓愈が事蹟に關し古今人の論述せしもの、盡く取つて參核に資せり、署して著といへども、實は編のみ自ら醜とするを禁せず。若し夫れ後篇に至りては、全く獨特の創見を出し、支那思想界に於ける韓愈の

位置を論定せむとす、慎重の態度、精緻の研究、以て之に臨まざるべからず。然れども已に其半を成せしを以て、續刊の期、豫め之を數月の後に定むるを得む。

「柳宗元」は、余唯だ一片の同情を以て之を書せり、而して「韓退之」に至りては、多少敬慕の念、之に附加せる者あり。筆路の異なるは、固より然るべきところ。

不遇の大才が冷酷の濁世と闘へる活傳記は、之を韓愈に見るべし。余は之が記述を爲し、間に於て、自ら興起する所なき能はざりき。恐るゝ所は、感慨胸に盈ちしとき、事柄の取捨に對して意を注ぐこと専ならず、爲に讀者をして心性上に同一の結果を射映せしめずして止まむかにあり。

著者今茲二十又七、韓愈が生涯の半、二鳥賦を作りし年、亦た近からむとす。才疎にして學淺く、到底哲人の後塵を歩する能はず、唯だ耿耿の孤懷に至りては、自ら劣らざる者あるを確信す。嗚呼、車に脂し、驥に策たば、千里遠しと雖も、孰か敢て至らざらむ。太行の山、巫峽の水、必ずしも險艱を憚るべからず、斃れて已むもの、男兒の事のみ。

明治三十四年三月

目次

第一章 韓愈と時勢……………一頁

第二章 韓愈の幼時……………一九

第三章 京師の貧書生……………三〇

第四章 汴徐二州の幕僚……………五四

第五章 貞元の末政……………八二

第六章 淮西の征討……………一〇八

第七章 佛骨表……………一四〇

第八章 潮袁二州の刺史……………一五四

第九章 成徳軍の宣慰使……………一八〇

第十章 韓愈の末年……………一九九

目次

韓文公略年譜

唐代宗大歷三年戊申、韓愈生る、字は退之、

大歷四年、

大歷五年、三歳、父母を失ひ、孤なり、兄會に養はる。

大歷六年、

大歷七年、

大歷八年、

大歷九年、七歳、兄會に従ひ、洛を去て、秦地に在り、學を好み、他生の習ふ所を記し、言出づれば、文を成す。

大歷十年、

大歷十一年、

大歷十二年、

大歷十三年、十一歳、前年兄起居舍人韓會、元載の爲に官を貶せられ、此

年韶州に至る、愈之に従ふ。

大歷十四年、

德宗建中元年、十三歳文を能くす。

建中二年、

建中三年、

建中四年、

興元元年、

貞元元年、十八歳、中原多故を以て、地を河南に避け、嫂氏と居る。

貞元二年、十九歳、京師に來る。

貞元三年、

貞元四年、

貞元五年、

貞元六年、

貞元七年、

貞元八年、二十五歳陸贄主司として明水賦御溝新柳詩を試む、愈第に春宮に擢でらる。

貞元九年、二十六歳博學宏詞科に試られて第せず。

貞元十年、二十七歳、河陽に還りて墳墓を省す。

貞元十一年、二十八歳、五月潼關を出て、東歸し、二鳥賦を作る。九月東

京に之き、遂、田横の墓下に出づ。

貞元十二年、二十九歳、董晉に擧げられて、秋、汴州觀察推官となる。

貞元十三年、

貞元十四年、

貞元十五年、三十二歳、二月董晉薨す、喪を護して京師に至る、四日にし

て汴州亂れ、留後陸長源殺さる、その秋、徐州に赴き、張建封に依り、節度

推官となる、然れども意を得ず。

貞元十六年、三十三歳、五月徐を去る、その十五日、徐軍亂る、復た難を脱

するを得たり、冬、京師に在り。

貞元十七年

貞元十八年、三十五歳、調して國子四門博士を授けらる。

貞元十九年、三十六歳、監察御史に拜せられ、その冬、抗疏せしを以て罪を得、陽山の令に貶せらる。

順宗永貞元年、三十七歳、江陵法曹參軍に移る。

憲宗元和元年、三十八歳、夏、召して國子博士となる。

元和二年、三十九歳、東都生を分教す。

元和三年

元和四年、四十一歳、都官員外郎に改められ、東都省に守たり。

元和五年、四十二歳、河南縣令となる。

元和六年、四十三歳、尚書職方品行郎を行ふ。

元和七年、四十四歳、復た召されて國子博士となる。

元和八年、四十五歳、進學解を作り、宰臣の知るところとなり、擧げられて尚書比部郎中史館修撰に守たり。

元和九年、四十六歳、考功郎中知制誥となる。

元和十年

元和十一年、四十八歳、中書舍人に遷り、太子右庶子となる。

元和十二年、四十九歳、彰義行軍司馬となり、裴度に淮西に従ひ、其歸るや、功を以て刑部侍郎となる。

元和十三年

元和十四年、五十一歳、佛骨を論じ、潮州刺史に貶せられ、冬、袁州に移る。

穆宗元和十五年、五十二歳、召されて國子祭酒となる。

長慶元年、五十三歳、兵部侍郎に遷る。

長慶二年、五十四歳、使を鎮州に奉じ、王庭湊を叱す。秋、吏部侍郎に遷る。

長慶三年、五十五歳、京兆尹となり、御史太夫を兼ね、冬、復た兵部侍郎と爲り、又吏部侍郎に遷る。

長慶四年、五十六歳、夏より疾を得、官を辭して家居す。冬、没す。年五十七。禮部尚書を贈り、諡して文といふ。



文學士 久保天 隨 著

韓愈と時勢

人を知るに易からず、人に知らるゝも亦た決して易からず、
して世に誤解されし人ほど不幸なる者はなかるべし。誠懲良業事に從
へば迂濶にして事に通せず、却て名を求むる如くに思惟せられ、將に滯
壑に填せむとする處世上の困難よりして、涙を呑み耻を忍んで、聊か他
に乞ふあれば、遂に鄙吝を除き得ざる者として罵らる。眞正の精神本領
は遂に短見なる世俗の知る所とならず、未技餘事、却て僅に名を傳ふ、唐
の贈禮部尚書文公韓愈退之の如きは實に其一人なり。蘇軾が潮州廟碑
に文起八代之衰、而道濟天下之溺、忠犯人主之怒、而勇奪三軍之師といへ
るは、人皆之を知る、而かも其事實の詳細を探くることを欲せず、謝枋得

が文章軌範に收めし二三の文章の外、一も見る所あらず、而かも大膽にも輕卒なる判断を下し、直に斥けて乞食學者といひ、政治界の失敗者と呼ぶ、そのやゝ之を善しとする者にありても、唯だ有名なる詞人、硬骨の争臣となすに過ぎず、淺いかな、その文公を見るや、然り、彼が或意味に於て乞食學者たりき、政治界の失敗者たりき、詞人たりき、争臣たりき、然れども、かくの如きは儘に廬山の半面のみ、余が最も文公に多とする所は、終始劃一主義あり、定見あり、自ら信ずるところは、決して曲げず、言行一致、少くとも唐代に於ける唯一の大人物たるを失はざるにあり、その本領は固より鱗日の如く、八極に融透せり、而して世人は唯だその餘りに明白なるが爲に、却て端なくも眩殺せられ、因て暗中象を摸する如きことを爲すにあらざるか。

文公の一身は、唐代の政治界と思想界との兩天地を掩ひ盡して、宛ら垂天の雲の如き者あり、余をして豫め結論を提起することを許さしめなば、乃ち敢て次の如く言はむ、韓愈は、一大愛世家なり、至忠至誠の人なり、

二

身を貧賤に起し、挫折幾回、遂に屈せず、功業半ば就りて、死せし人なり、自ら國家の重を以て任じ、斃れて後、已まむを期したる人なり、加ふるに、緒餘の事業、文は六朝の陋習を一洗し、詩は一代の別調を確立せしめたる人なり、と更に一言以て之を蔽へば、多面的にして、而かも偉大なる人なり、と。

三

余はこゝに筆を驅りて、韓文公が一世を描盡し、隠れたる事實を闡明して、一層その大なる所以を證明せむとす、而して文公の生涯は、實に代宗、德宗、順宗、憲宗、穆宗、敬宗の六代に跨り、生前には安史の亂あり、死後には藩鎮朋黨の争あり、加ふるに文公の關する所、局面甚だ大なる者あり、故に最も詳密に論究すれば、やがて一部の唐史、否、少くとも唐朝末路史を述作し得べし、とばれ、余が此篇にありては、さばかり精細なる叙述をなすの餘地なきを奈何む、故を以て、文公の身世を中心と爲し、當時の政治、宗教、文學、諸界の事、僅に之に關聯して、挿入さるべきのみ、而して如上の理由は、余をして劈頭第一、その生れし時代の社會的觀察に向はしめぬ。

請ふ先づ安史争亂の前玄宗が開寶平和の治に筆を着けしめよ。

唐の天下は實に太宗李世民の經營せしところにしてその自ら政を聽きし貞觀の清平は下つて玄宗開元の始に至るまで殆んど百二十年の惰勢を以て繼續したりきこの間時に牝鷄司晨の禍を絶たず前には則天武氏あり後には太平公主ありきと雖も一は張柬之輩の力によりて鎮定し一は玄宗が英才を以て討平に歸せりこは皆宮廷内の變亂にして全く當時の天子が治に徃れて亂を忘れ酒色に耽り政治を親らせざりし結果にして未だ根柢より天下を搖亂せしむるに足らず煌々たる太宗の遺烈は長しへ存せりといふも不可なかりき玄宗の位に即くや精を勵まし治を圖り善く人を擇で之に任じ己れを持すること亦た頗る勤儉なりしかば遂に所謂開元初期の治を致せり然れども年古くして器具廢し水腐して群蟲生ず平和久しくて紀綱自ら弛み勝ちなるは最も避け難き歴史上の通弊なり貞觀の英主が名臣と相謀りて定めたる

る一般の制度は月を追ひ日を趁ひて弛廢し來れりその大なる者すべて五余は先づ分項逐條之を左に詳説せむ。

第一は兵備の弛廢是なりそも唐初高祖の時に當ては漸く群雄を討平して僅に隋の亂を定めたる際なりしを以て猶ほ王侯刺史郡守等の兵權を削るに及ばず動もすればその反亂を制する能はざりき太宗嗣で立つに及びて全くその兵權を奪ひ天下十道六百三十又四の折衝府を建て之を京師の諸衛及び東宮の六帥に附屬せしめ任ずるに二個月を隔て京師宿衛の交代を以てしまた夷狄と境を接する所にのみ藩鎮を置きその統帥に兵政の二權を委ね以て外寇に備へしめ刺史郡守等の文官には唯だ政府より下せる命令を折衝府に傳ふる權のみを以て授けたりかくて兵備の主權を中央政府に收むるを得て郡縣制度に附隨するものとしては實に間然する所なき未曾有の良組織を現出したりき然れども打續きたる太平無事はやがてこの制度を腐敗せしめ却つて兵權を擅に横領せむとする刺史郡守を出しまた暴戻にして常

規を守らざる兵士を生じ、京師宿衛輪番交替の境敗を促せり。玄宗の時
に方りては他の必要よりして張説の言に従ひ、兵を農に寓する制を廢
し、壯士を召募して之に當てしより、練兵の如きも自ら疎となり、無賴の
徒を以て満たさるゝに至り、遂に懦弱腐敗の風を生じ、さしも太宗の心
を凝らして規畫せし制度も、一も見るべき跡を留めざる如くなれりき。
第二は政治機關の弛廢是なり。太宗が十八學士を撰んで善く其職に
任せし當初は、其下に隸屬するもの皆人才ならざるなく、政治機關の運
轉、いかにも快滑にして、急捷なりしが、時日の彌久と君主の暗愚とは、遂
に此間に惡弊を生ぜしめ、政治の運轉は、爲に著しき滯滞を爲すに至れ
り。たとへば機關車の如しいかに精巧なるものとはいへ、日々脂を注ぎ、
又時に之を修繕するに非ざれば、久しく其用に堪ふること能はざらむ
のみ。

第三は人物登庸法の腐敗是れなり。太宗は人才の登庸をして至極公
平に、且つ遺漏なからしめむが爲に、弘文館を建て、州縣學を興し、人物を

養成し、其長たるものをして、才俊を薦むることを爲さしめたり。然れど
も是も亦た次第に弊風を生じ、來り情實を以てするもの漸く多きを加
へ、登庸試験の如きも十分に才能を檢定せず、賄賂の多少を以て、上下の
別をなし、に由り、賢才位に進むの路、全く杜絶し、朝廷は便佞無能の小
豎を以て満たさるゝに至れり。

第四は財政の紊亂是なり。太平の天子、朝に在りと雖も、又樞機を親ら
せず、租調も監督不充分なるより、年毎に國庫に入るべき收税金の大半
は中途にして、暴官汚吏の私に竊取するところとなり、帝室費の如きも、
毎歲出入相償はず、遂に幾分の貯蓄をも擧げて、消費するに至り、やがて
國庫の缺乏、民力の疲弊とはなりぬ。

第五は風俗の境敗是なり。積年の平和は、人心をして自然に懦弱なら
しめ、四民は弓馬刀槍の何物なるを知らず、物質的饒富の中にありて、實
感的快樂を恣にし、上下の氣風均しく淫靡に陥れり。是に於てか、兵士を
賤しむの風起り、人は武官を以て任ぜらるゝを愧づるに至り、關中三輔

の如きは殊に甚しく今や自ら進んで兵士とならむとする者なく會ま
之おれば市井の悪少のみ故に大敵一たび顯はれて鼓鼓遠く響けば鞭
を擧げて直に馬を驅り帝都は唾して手中に落つべき運命を有したり
き。

玄宗は登極の初に於て頗る英主に似たる者ありしと雖も長しへに治
平を持すべき明君には非ざりき故を以て開元の清平に徃れて漸く驕
奢となり婦女を愛し長夜の飲をさへ爲さむと欲したり是に於て張九
齡等の忠言は其耳に逆ひ李林甫等の佞辯は其心を迎へぬ而して開元
の中葉に當り一時財政の缺乏を補充せむが爲に宇文融は廣く諸使を
置いて財を聚め府庫を富ましめたり然れども是れ固より策の得たる
者に非ず宋の蘇轍かつて之を論じて曰く

開元之初雖號富庶而戶口未嘗昇降宇文融得其隙而論之請治籍外羨
田逃戶命攝御史分行括實玄宗喜之朝臣莫敢言其非者惟皇甫憺楊暹
以爲籍外取稅百姓困弊得不償失而二人皆坐左遷州縣希旨多張虛數

八

以正田爲羨編戶爲客歲終藉錢數百萬緡其名似是而實失民心淺言之
則失在求詳深言之則失在貪利時帝方以耳目之奉責任於人行之不疑
於是群臣爭爲聚斂以迎侈心天寶之亂始於此矣

九

在廷幾多諂諛の臣は争うて宇文融の所爲に倣ひ萬民の膏血を搾り財
貨を斂めて之を獻せり而して是等は絶えて愛惜する所なく擧げて寵
姫武惠に給せられ兼ねて内廷の饗宴に費されたり賢臣は退けられ廟
堂復た人なく紀綱益す弛廢す而かも玄宗は自ら天下の大亂を引き起
すべきを知らず是時に方り安祿山は正に頭角を見はしつゝありき
安祿山は本と幽州の胡なり内心頗る狡黠善く心情を揣る同里の人史
思明と共に張守珪の幕下にあり數ば戦功を奏し巧に守珪の寵を得て
その女婿となれりすでにして兵權漸次その掌中に歸せしを覺り之に
加ふるに當時の朝廷李林甫の讒によりて張九齡却けられ内治悉くそ
の宜を失ひしを見るや不軌の志を懷き竊かに時の到るを待てりきす
でにして玄宗の驕侈は日を追うて益す甚しく李林甫は獨り大權を專

に、諸臣之に黨し、やがて數多の諫臣は殺され、諸皇子の口を助かす者は死を賜はりき、かくて又暗弱なる壽王を立て、仁孝慈讓なる忠王を廢せむとしたりしが、幸にも宦官の中に高力士のあるありて、纒に之を止むるを得たり、かくの如く朝廷は全く紊亂したるに拘はらず、天下はなほ依然として開元初政の餘澤を受け、米穀絹匹の價頗る安低に、海内富豐行くもの萬里寸兵を持せざるの光景なり、たとへば是れ魚の腐するや、外貌なほ姑らく鮮なる如きのみ。

李林甫の姦は漸くに増し來り、疑獄は屢起されぬ、開元將に盡きなむとして、張九齡は死し、安祿山は營州の都督となれり、祿山は林甫に比して、一層の狡黠を極めし者にして、巧を傾け、善く人に事へ、その譽を得て、以て之を致せるなり、かくて天寶の初年にいたりて、祿山は盧龍軍の節度使となり、また范陽の節度使となれり、二鎮の兵權盡く、その掌握中におり、知るべし、禍機正に一步を進めたるを。

玄宗久しく位に在り、用度日に多くして、宮内左右の藏漸く其財を減じ

たり、韋堅、王鉞等は、帝の頗る之を愛ふるを知り、歲貢額外の錢帛數萬を内庫に貯へ、以て媚を容れぬ、玄宗の喜知るべく、驕奢益す甚し、是より先き、寵妃武惠すでに薨じ、玄宗之を念うて歎まず、其後皇子壽王の妃楊氏を見るに及び、大に之を悦び、遂に命じて後宮に入れ、宴安日を逐うて甚し、而して祿山の寵益す固く、御史大夫を兼ねて京師に來り、禁中に出入し、請うて楊貴妃の子となり、後之と通じ、醜聲頗る外に泄れたり、獨り玄宗は之を知らず、貴妃の宮中、祿山の生日に當り、錦繡を以て大襪褌を作り、三日見を洗ひ、裸にして椒房に獻るといふに至りては、自ら淫靡驕痴を極めたる者なく、むばあらず、中薄の言醜なるもの、吾こゝに之を細説するを欲せず。

かくて祿山の寵は依然として衰へず、後にまた河東の節度使を兼ねるに至り、天下の精兵、その過半は己の指揮の下に動かすを得べく、御史大夫の職を兼ねて、賞罰に干涉し、眇たる一身を以て、當時の政府、司法、軍務の兩面に跨り、勢力異常なるものあり、蓋し是より先、邊鎮の重要なるも

のは、常に皇子もしくは忠厚の譽高き名臣を選びて、之を領せしめしが、李林甫は前朝以來かゝる名臣の其功を以て一轉して宰相となることあり、かくて己の地位を奪はるとあらむを恐れ、任進の路を杜絶せむと欲し、邊鎮の節度は怯懦なる文臣を用ひむよりは、寒族の胡人を用ふるに若かずとなし、奏して胡人を擧げ、その節度たらしめぬ。是に於て、此等胡人の率ひし精兵勇士は、皆邊鎮に群合し、武を賤しむ文臣の統轄せし弱卒懦夫は、引き上げて中央に集り、天下の勢、その平衡を失ひ、著しき偏重をなすに至り、き、祿山慧眼、早く之を察し、京師を辭し、府に歸り、竊に兵備を修めぬ、かくて禍機正に目前に逼り來れり。

祿山の隱謀は、天下何人も知らざりし所、こゝに私かにその舉動に注視し、豫め他日の變に備へむを謀りし者、唯だ一人あり、平原の太守顏真卿是れなり、真卿は顔子四十世の孫にして、身を微賤に起し、遂に現今一方の連帥たる重職に上りし人なり、その少なるや、氣の烈なると、正草を善くすると、父母に孝なるとを以て、夙に一郷に聞え、その進士の第に登る

や、直に制科に擢でられ、進んで監察御史となりしが、楊國忠に忤ひしを以て、出されて平原の守とはなれるなり、平原はもと祿山統治下の一地、真卿は太守たる任務を全うしたると共に、祿山の所爲に對して滿たざる者ありしや、必せり、故を以て、早くその反を爲さむを察知せり、然れども、毫も之を口外することなかりき。

李林甫と安祿山とは、殆んど相下らざる奸物なれども、祿山は却ていたく、林甫を怕れて、その生存中は、未だ敢て發せざりき、すでにして、林甫は死し、輕躁昏愚の驕臣楊國忠は、貴妃の姻戚たるを以て、代て宰相となれり、是に於てか、祿山は毫も顧慮する時なく、愈よその準備を大にしたり、時に劍南の留後李密は、南詔を撃つて敗没し、兵死するもの七萬、國忠は其敗を隱蔽し、中國の兵を發して之を討ちぬ、然れども、連戰連敗、加ふるに、炎南瘴癘深く、前後卒を失ふもの二十餘萬、天下爲に騷然たり、祿山が立つべき時は來れり、さばれ未だ輕しく發せざるなり、飽くまで、横着にかまへて、出來べくば、兵を動かさずして、長安を取らむと欲せり、是に於

てか、獻馬の計は行はれたる、魏幸の謀は企てられたる、然れども遂げられずして止みぬ、楊國忠はもとより、祿山と相容れず、其反を察して之を玄宗に告げぬ、而して玄宗が飽くまで祿山を信じて之を疑はざりければ、國忠はひたすら己の信を取らむが爲に、祿山の亂を挑撥すべき有りぞある手段を盡したり、さなきだに、手足の痒きを忍んでもじくして居たりし祿山は、遂に意を決し、十五萬の精兵を擧げて、叛旗を范陽に翻へせり、廟堂の諸臣は愕けり、天下は爲に騷擾せり、豫め之を注視してありし、顏真卿は戈を揮て起てり。

祿山の反は、玄宗に對して、寐耳に水といふべき非常の驚變なりき、玄宗は一朝不軌の徒あらば、祿山をして制せしめむが爲に、十二分の恩を施し、自ら心を安んじて逸樂に耽りしなりき、而して今や守門の犬に手を咬まれたるに氣付きて、茫然爲すところを知らざりき、その河北皆之に従ふの報を得たりしとき、玄宗はさすがに嘆息を禁ずる能はざりき、曰く、二十四郡がつて一人の義士なきかと、すでにして河北中、先づ兵を起

元

しかく使を走らせて、祿山の反を京師に報せしは、實に顏真卿其人なりきと聞くや、大に喜んで曰く、朕、顏真卿の何の狀をなせるか、知らず、乃ち今かくの如しと、玄宗は全く事の意外なるに驚きしなりき。

顏真卿の兵を平原に起すや、その從兄たる顏杲卿も、亦た兵を常山に起し、相約して兵を連ね、祿山の歸路を斷たむとせり、然れども不幸にして、此計は成らず、常山は守城の兵備未だ全からざるに、已に陥り、さしもの杲卿は捕へられ、大に祿兒を罵つて死し、千古の碧血、むなしく、淋漓の痕を濕はしめぬ、この時、顏氏の死するもの、三十餘家、而して真卿は平原に在りしを以て、十分の準備を爲すを得たり、天は真卿をして、なほ後年に爲すところあらしめむと欲したればなり。

顏杲卿すでに死し、之に屬せむとせし河北の諸軍は、皆潰えぬ、祿山は真卿を後にし、全力を以て、京師を衝けり、哥舒翰の軍、一たび敗れて、潼關乍ち守を失ひ、玄宗は蜀地に、禁歴するの止むを得ざるに至り、祿山は直に長安に入れり、是より後、擾亂長しへに絶えず、すでにして太子位に、靈武

に即き、明年軍を鳳翔に移し、その年兩京を復し、上皇亦た京師に還るを得たりき。凡そ玄宗一代の事蹟は、之を詳説すれば、優に興味ある一部の絶好史傳を爲すべく、余また他日之を紀述するに意あり、故に今は姑らく略説に従ふといふ。

兩京すでに恢復されしと雖も、當時亂賊全く滅び盡せしといふに非ず。安祿山は至徳二歳を以て、その子慶緒の爲に殺されしと雖も、餘黨の凶熾未だ衰えざる者あり。乾元元年、郭子儀以下の九節度兵を合せて之を討ちしも、猶ほ下らず。その明年、賊將史思明、兵を引いて慶緒を救ふに方りて、さしもの九節度の兵も、一旦鄴に潰えて復た振はず。而して思明は却て慶緒を殺し、范陽に還りて、僭號し大燕皇帝と稱したりき。李光弼の郭子儀に代りて、朔方節度使兵馬元帥となるや、號令嚴整、一たび施せば士卒堅壘、旗幟精明、皆變ずと稱せられ、史思明と戰て、數ば之を取るを得たり。上元二年、思明はまた其子朝義の殺すところとなり、後二年、代宗の位に即くに及び、内は奸臣李輔國を誅し、大に紀綱を振はむことを圖り

外は、大に兵を點じ、雍、王、适を以て、天下兵馬元帥となし、諸將及び回紇の援兵を率ひ、史朝義を討ち、大に之を取ら、賊將李懷仙、朝義を斬りて降るに及び、所謂安史の亂も、一先その局を結ぶを得たりき。

廣徳元年閏正月、史朝義の降將薛嵩を以て相衛邢沼貝磁等六州の節度使となし、田承嗣を以て魏博德滄瀛五州の都防禦使となし、李懷仙は故地に仍て幽州盧龍の節度使となり、また張志忠を以て成徳軍に鎮せしめ、姓名を賜うて李寶臣といひぬ。河北の藩鎮はかくの如くして成立せり。

そも節度使の多數は、その初、玄宗の朝、祿山を討ぜむが爲に、邊鎮以外に分置し、一地方に於ける兵政の二權を以て與へたるに濫觴せり。而して河北の賊、終に殲滅する能はず、降を乞ひしを幸として、此に三鎮を與ふ。地は己が早く據りし所に於て、兵は數年來苦樂を同うせる蕃族なり、其勢の強大なるは、自然のことのみ。是に於てか、河北三鎮は、唐朝滅亡の兆をなせり。蓋し、その服従は、僅に靜止のみ、知らずや、暴風の過ぐるるとき、一

たびその中心に當れば、暫時平穩なりと雖も、やがて反對なる方向に於て再び吹き捲くことあるを、三鎮の叛亂、今後異常の者あるべきは固より豫察するに難からず、而してこの暴風の中心點に到達せし瞬間に於て、わが將に傳へむとする大偉人は、呱呱の聲を擧げて初めて地上の空氣を呼吸したるなりき。



第二章 韓愈の幼時

韓愈は何人の血統を傳へしか、余は先づ之に就て語る所なかるべからず。蓋し是より先、玄宗開元の末葉、時勢漸く切迫して、張九齡を起す前、數月の間、剛毅峭直の一士、輔弼の位に上り、しばし中流の柱となりしものあり。この人や善く道を守りて帝を諫め、時政の得失之を言ふて、未だ嘗て盡さざることをあらず、天下をして當代の魏徵とまで言はしめぬ。玄宗は之を稱し、朕は瘦すれども、天下は肥えぬといひ、亦た善く之に聽きぬ。その嘗て苑中に獵し、或は大に樂を張り、稍過ぐるるとき、必ず左右を顧みて曰へり、渠れ知れりや否や、と已にして、疏轍に至るを常とせり。然れども惜いかな、他の宰相と協はざりしが爲に、未だ幾ならずして、位を去るの止むを得ざるに至れり。この人は名を韓休といへり、而して吾が將に傳へむとする韓愈其人は、實に之と系を同うしたる清門の出なり。韓休の家は、漢の弓高侯、潁唐が玄孫、竊より出で、南陽郡中昌黎の棘城に在り。

愈の家は頽唐の裔孫尋より出で、初は同じ地の潁川に住みたり。之を要するに休は昌黎韓氏の本派にして、愈はその別派なり。尋は後漢の時、隴西の太守たり、司空稜を生み、後に安定の武安に徙れり。この後、幾代をか経たる後、魏に至り、常山の太守武安成侯者といふ者あり、遷て九門に居り、尙書令征南大將軍安定桓王茂を生めり。茂、均を生み、均、峻を生み、峻、仁泰を生み、仁泰、叙素を生む。叙素、桂州の刺史となり、四子を生めり。その長子を仲卿といひ、實に愈の父なりき。仲卿、武昌令となり、後官を進めて秘書郎に終りぬ。その人物の如何は、今明かに知るべき由なく、又させる必要もあらざれども、李太白に武昌德政碑及び去思頌ありて、頗る之を美せしを觀れば、縦ひ例もながら、文字誇張の痕はありとするも、猶ほ且つ公義に盡す心と嚴格なる性行とは之を察するに難からず。仲卿は洛陽に死し、尙書右僕射を贈られき。而して是れ愈が生れてより二年、未だ語を學ぶにすら至らざる時なりき。

仲卿の弟、即ち愈が叔父たるもの三人、曰く少卿、曰く雲卿、曰く紳卿、少卿

は李太白の言に由て觀るに、感慨然諾を重んじ、早く節義に死せり。雲卿はやゝ温厚にして、官は尙書禮部侍郎に至り、其子は却つて性情激烈の人なりき。紳卿は又古文に巧にして、直言忌まざる人と評せられき。愈はかくの如き祖先を有し、かくの如き親戚に圍繞されたり。その遺傳的性質と、先天的感化とは、髣髴として之を認知すべきのみ。

愈は仲卿が第四子にして、上に會介弁の三兄あり。鄧州南陽の人にして、自ら昌黎と稱すと雖も、こは當時の例により祖先の地をいふ者にして、その生地は洛陽にありしこと疑ふべからず。仲卿夫妻、晩年血液の餘滴が、やがて將來に於て偉大なる愛國家となるべき此の季の子を凝成せしなれば、疑もなく、雙親が掌中の珠として、鍾愛措かざりし者ありしならむ。さばれ世の大事を爲す人は、少時より浮世の困苦と戦ふの運命を有し、愈が身に於ても、この事最も早く、確に表示せられ、天は程なく、怙恃なき身となし、丁り、幼よりして、あらゆる缺乏と艱難とに馴適せしめむとせり。前にもいひし如く、愈は生れて未だ二歳ならずして、其父を失ひ

又幾ならずして母をも失へり。椿萱摧け去りしとかくの如く速に頑是なき嬰兒が哭聲は縦ひ父母の亡き魂を草葉の蔭より起す能はざりしとす。少くとも之を懐にせし慈悲深き乳母が腸を寸裂せしめしや疑ふべからず。かくて愈が年七歳に及べるとき兄たりし韓會に伴はれて京師に上ることいなれりしが世にも稀れなるやさしき心の乳母は生ひ先長き此兒の孤立依るなきを手離して去るに忍びず。愈が雙親の恩恵は深く彼女を感じしものありしと見えて最早婚嫁すべき年なるをも顧みず一身を捧げて愈が経路の後見に委ねたりき。乳母は李氏徐州の人正真と號せり。彼女は後數十年を経てその手しほにかけて鞠育せし韓愈が進士の第に擧げられ、汴徐の軍に佐たるを歴入朝して御史國子博士尙書部官員外郎河南令となり、婦を娶りて二男五女を擧げしを見るに及び一家の尊敬を受け盡し、時節の慶賀には婦孫相率る列なり拜して壽を進め、多少の幸福を以て償はれ、六十有四の高齡を以て、元和六年三月を以て疾て卒しぬ。愈が手づからその墓誌を作りしも

亦た彼女が厚恩に報るしに外ならず、余輩は韓愈其人の偉業を記すると共に之をして長成せしめしこの一婦人の賢徳を頌賞せずむばあらずこの女にしてあらざりせば憐なる孤兒は育の鞠まりて顛覆するとなしとも限らず。まことに彼女は給金のみを欲しがるかいなでの乳母には非ざりけり。

愈は少にしてその黒髪を撫づるや、さしき手と頬を吻すべき燃ゆる唇とを有せざりしを以て、多少剛愎にして不遜なる性質なきにあらざりしかども、嫂たりし鄭夫人と乳母李氏との温かき恩愛とは絶えて之をして執拗邪曲に陥らしむるとなく、心中には情感の琴線、ことに張りつめて、容易に他の爲に弾ぜられ、いみじき響を發することもありき。彼が本來の特性は、北方人種として飽くまで剛健に、善く人事の蹉跌に堪へ、挫折を経て屈撓せざりしと雖も内心に厚き同情を存し、一半は女性的なりしもの、亦た幼時に於ける二女の感化の著大なるものありしを疑はず。かくして愈は、智情意の三方面に於て、平行的發達をなし、大なる常

識を以て之を統治するを得、一個の人として殆んど間然する所なき者
どなるべき素地を作りたりき。

愈は三歳すでに父母の怙恃を失ひければ、物心覺えし頃よりは穎敏の
資を以て獨立奮起の念を起さざるを得ざりき。その少時異常なる勇氣
を以て勉學に従事せしは言ふまでもなく、その自ら記するところ、生七
年而學聖人之道といひ、雞鳴而起、孜孜焉亦不爲利といへるを見て知る
べし。而して余は、父母に代りて此兒を薰陶せし兄たる韓會の、果して如
何なる人なりしかを知らざるべからず。

韓會を思ふて、先づ念頭に浮び來るものは、江南の四夔なり。會の壯なる
や、正に安史の亂に値ひ、時勢は慷慨の士を驅て、天下の急に赴かしめ、有
爲の士は處々に會合して、盛に經綸の策、帝王の畧を談ぜり。會は盧東美、
張正則、崔造等の三友と相結托し、頗る名聲あり。この四人、學識衆に超え、
才智俗に秀いで、王佐を以て自ら任じ、天下も亦た許すに、後年の宰相を
以てし、時人之を呼で、四夔といへり。蓋し古への夔夔に倣へるを以てな

らむ、而して會は特にその領袖として、標榜せられたりき。會は亦た頗る
文章に長じ、因て幾多の朋友を天下に有したり。詩聖として百代に名あ
る杜甫の如き、唐代古文の先驅として特に稱すべき梁肅、獨孤及の如き、
一時の俊秀は皆彼の友なりき。而して會の末弟たる愈が詩に於て杜甫
を學び、その拓開せざりし餘地を認知し、文に於て梁獨二氏が先蹤を慕
ひ、更に之を廓張したりしは、自ら一段の因縁なくむばあらず。おもふに
少時に於て如上諸人の聲名と價值とを傳聞せしもの、暗々の中に絶大
の影響感化を爲せしことあらざるか。會の野に在りしとき、已にかくの
如し、故に一たび洛陽を去て、京師に來るや、青雲一路、忽ち前に開けて、起
居舍人にまで仕進せり。但しその功名を爲すに急なるや、頼るべき人を
細に選擇するに暇あらず、不知不識の間に、その去就を謬りぬ。會は當時
の重臣元載、王縉等に重んぜられしが、大曆十二年、元載が誅せらるゝに
及びては、王縉と共に左遷せらるゝに至り、蹉跎一たび霜蹄に蹶いて、復
た起たず。滿腹の經綸、乍ち齟齬して、一も爲すなきに至り、溢るゝばかり

の不平を懐いて、十一歳たりし弟韓愈と夫人鄭氏と愈の乳母李氏とを
拉して、はるくど、その貶處たる南疆の地、韶州の曲江へと向ひぬ。
韓愈は疑もなく、一代の英才たりき。たゞ才は却て累を爲し、その依托す
る所を誤り、此禍あるに至らしめき。今や世は其黨を惡むものを以て滿
たされ、曾つて相容れざるの徒、盡く廟堂にあり。後來の宰相とまで囑望
されし人は、南疆の一小州に刺史として、長しへに寂寞たる閑職を守る
べき外なかりき。この間、會は何事を爲して自ら慰めしか、言ふまでもな
く、濟世の大志と滿腔の不平とは、之を驅つて其弟韓愈の黨陶に従事せ
しめしならむ。將來の愛國家は、齡に於ては殆んど父として不可なかる
べく、安史大亂の末に起ちかゝりし好個愛世兒の熱血を以て浴びせか
けられたりき。

然れども愈が後年「吾兄之盛徳」の辭を以て其人と爲りを形容せし親愛
なる家兄が黨陶の期は、不幸にして太だ短かりき。愈が十五歳の時、韶
州に在ること正に五年にして、韓愈は忽ち館舎を捐て、道山に歸れり。父

韓愈の幼時

母を失ひし孤子は、こゝに復た頼るべき兄を失へりき。この時、韓氏の一
族は零落して、頗る振はず。その有力者は多く逝き、存するものは今日の
衣食に逐はるゝほど微なりき。愈の三兄翁は、京師にありしとき、馬燧の
軍に死し、二兄介も前に病歿し、その次子老成は、韓會に子なかりし爲め、
養はれて現に愈とともに在り。韓氏が一塊の肉は、この五歳の幼兒と十
四歳の少年とにして、便る者もなく、路頭に迷ひ兼ねまじき悲境に沈め
り。幸にして、韓會の未亡人鄭氏の剛毅にして、韓氏を再興せむとするあ
り、二子ともに己れの出に非ざるにも拘はらず、一身を粉塵し、愈の乳母
と謀り、之を鞠養したりき。ちもふに、二女は、ほの暗き燈火の下に、夜紡の
手に忙はしく、その膝の邊に、わが將來の巨人が琅琅たる讀書の聲を聞
きつゝ、時に涙を流して、韓家の衰微を説き、之を訓戒したりしならむ。老
成は即ち所謂十二郎なり。祭十二郎の文中、實にこの間の消息を傳ふる
ものあり。曰く、

吾上有三兄、皆不幸早世。承先人後者、在孫惟汝。在子惟吾。兩世一身形單

影○隻○嫂○常○撫○汝○指○吾○而○言○曰○韓○氏○兩○世○惟○此○而○已○汝○時○尤○小○當○不○復○記○憶○吾○時○雖○記○憶○亦○未○知○其○言○之○悲○也○

韶州は會が左遷されし所にして固より久戀の地には非ず。故を以て、鄧夫人は程なく移つて嵩に居れり。この時李懷光の亂あり、戰警日に到り中原の地、妖氣に掩塞せられ、韓氏の家も亦たしばし亂賊の劫すところとなり、乃ち走つて洛に至れり。さなきだに貧しかりし愈の家は益す缺乏を感じ、夫人乳母の手工を以て僅かに其日を送るとなれり。愈がこの苦艱の中にありて、いみじく腦髓を刺激され、韓氏再興の重任、全くその雙肩に懸れるを自覺せしとき、血は如何に沸きしか。非常なる忍耐と堪ふべからざる困苦とを以て、勉學したるは、之を想像するに難からず。

この時に方り、愈は如何なる人に就いて、其業を修めしか。今更詮索すべきやうなし。然れども、十中の八九までは、自修にありしならむ。家兄の教育は、すでに門戸を啓きければ、今や自ら進んで堂奥に入れりき。その愈

自知讀書日記數千百言、比長盡能通六經百家學、とあるは、實なり。かくの如くして、愈の學は漸く一郷に聞こえ、貞元二年、十九歳にして、京師に郷貢せらるゝに至れり。愈は知人と家嫂との手より出でたる若干金を懐にし、短衣弊襦しかも、大志を抱いて、悠々たる長路に、多少の苦を嘗め、やがて程なく京師に入れり。記してこゝに至り、余は愈か少時に對して、同情の涙を濺ぐことを禁せず。さばれ愈が後來は尙ほ多くの艱苦と闘ふべき運命を有したりき。人生の太行屹として、面前に在り、愈は少年の身、唯だ燃ゆるが如き功名の心あり、一舉して業立どころに成るべしと、誤想し、つ且つ兄の戒を思ひ、嫂に報むとする情は、轉た百倍の勇氣を増し、かくは事もなげに郷を出でたりしならむのみ。蓋し愈は生來已に血性的にして、活動的なりき。少時の轆軻は、早く克己忍耐の性を養ひしこと前にもいへり、而して今や是非とも身を立てざるべからざる位地に在り、加ふるに家兄が鼓吹せし愛國の念の之と伴ふあり、愈は實際的にして常識的に傾かざるを得ざりき。

第三章 京師の貧書生

南陽の一少年は、正に京華の客となれり。而して如何に當時の切迫せる時勢が、その明截鋭敏なる頭腦を刺撃したるか。余は前に記せし者に引續いで、その光景を縮寫し、之を讀者の眼前に開展せざるべからず。

安史の亂後、天下は多く藩鎮の有に歸し、廟堂人なく、之を制馭する能はざりしは前にもいへり。藩鎮の諸將、その元帥を殺して自ら代るや、直に之に節度使の符を與へ、ひたすらその歡心を買はむを勉め、朝威の愈よ地に墮つるを悟らず、加ふるに更に懼るべき外寇の禍もありき。

唐初太宗が英邁の資を以て、東は高麗より西は漠外の諸夷に至るまで、之を征服し盡したるは、支那史上有數の大業にして、史家が秦漢以後の盛時となせるも、必ずしも誇張の言に非ず。而してその崩後、未だ幾ならずして、武韋牝雞の禍あるに際し、回紇は漸次、その頭を擡げ來り、遂に寇

を玄宗の朝に爲すに至りき。かくて安史の亂に際したまは、兵を此に借るの拙策を取りしより、その眼中また中國なく、遂に十萬の大兵を擧げて國境を襲ふに至れり。郭子儀が奉天に鎮せしも、代宗の奉天に走りしも、皆その結果に外ならず。

藩鎮の專横かくの如く、夷狄の擾亂かくの如く、その間に於て代宗は崩じ、德宗は立てり。而して兩者は相合して、更に其勢を逞うしたりき。回紇は交も來りて京師を騷がし、河北三鎮は相連りて反し、その討伐の將李希烈は戈を倒にして賊と通じ、朱泌は廟堂の處置を憤りて突然長安を襲へり。德宗は先蹤を追うて再び奉天に遁れしが、又もや討寇の主將たる李懷光の反をなすあり、奉天亦た圍まれぬ。萬乘の天子さながら、孤豚の如く、遂に梁州に走れり。韓愈の家の洛陽に移りしも、亦た即ち此時なりき。

河北江淮すでに亂麻のごとし、德宗は止むなく、こゝに陸贄を用ひぬ。貞元の初政は、實に贄が執政なり。贄は如何なる人ぞ。一部の陸宣公奏議よ

しや其文に於ては舊套を脱せざる者ありとするも、書策見るべく、誠忠の餘に出でたる熱血の痕に非ざるはなし。贊は玄宗の天寶十三年を以て、吳郡嘉興に生れ、二歳にして安祿山が漁陽鼙鼓の聲を耳にし、その父たりし陸侃と母たりし韋太夫人との訓化を受けし外、また時勢の爲に陶冶せられき。その少年家居するや、令名すでに刺史の聞くところとなり、代宗の大歴六年に至り、十八歳にして進士の第に登り、博學宏詞に擧げられ、次いで鄭縣の尉となり、渭南の尉に調し、監察御史となれり。爾後宮中にあること殆んど八年、時恰かも代宗が末年に際して、姑息偷安、朝政の廢頽、既に絶頂に達したるを目撃したりき。贊が胸は愛國の念に燃え、もとより一才子を以て老ゆるに忍びず、而かもその方寸の間に、經國の大器を懷くを知るものなかりき。代宗の崩御と徳宗の即位とは、端なくも贊に雲蒸龍變の好機會を與へ、先づ召されて、翰林學士となり、施政の顧問に備へられき。奉天梁州に於ける天子の蒙塵は、愈よ贊に親近の關係を得せしめ、禮部員外郎に移り、考功郎中に轉じ、諫議大夫に拜し、中

書舍人となりぬ。贊はこゝに若しく、徳宗の親任を得、やがて其言ふところ、は次第に行はれき。贊は先づ李晟、馬燧等をして、藩鎮を征せしめ、環域等を用ひて、回紇に備へしめ、己は自ら内治救済の重任に當れり。かくして、その規畫するところ、着々功を奏し、李晟は程なく長安を克復し、車駕は京師に還り、大勢は漸次幸運に向へり。内外は翹首して、その相たるを望みしも、贊は已に無冠の宰相たるを以て、必ずしも之を要せざりき。然れども禍また不測の中に生じ、贊が其母の喪によりて、暫らく宮中を去りしや、剛果にして學術なき竇參は、李泌の過口によりて薦められ、參は贊が不在を利とし、早く已に朝士を籠絡したり。贊の歸るや、形勢の一變せるを見て、さすがに驚愕せざるを得ず。而して竇參の讒口は、直に之をして兵部侍郎に轉せしめき。是に於てか、贊は國家の爲に默視するを得ず、全力を盡して之を黜けむとし、辛らくも功を奏し、中書侍郎同平章事に拜し、實際の宰相となりしも、機や已に晩く、最早爲す所なかりき。蓋し徳宗が心、全く前日に似ず、内廷は參に過ぎて、佞更に佞たる、裴延齡一輩

の徒を以て充滿したればなり。

陸宣公奏議中、上延齡奸盜狀を讀まば、贊が如何に、その排斥に力めたるかを知らむ。之に次いで、上長官薦舉狀沿邊守備事宜狀あり。かくて相位に在ること三年、言上らざるに非ず、策獻せざるに非ず、而かも徳宗は一も之を用ひず。延齡の讒謗離間は日に甚しく、遂に其職に留るを得ず。すでにして罷められて太子賓客となり、次いで忠州別駕に貶せられし。かゝる是れ諫議大夫陽城が一身を擲ちて、死より救ひし結果なり。知らば、時勢の慨すべきは言はずして可なり。かの、人、我に負くとも、我、人に負くなからむといひし方正謹嚴なる社稷の臣は、斯の如くして、むごくも朝より逐はれぬ。贊は一時中流の柱となりしと雖も、遂に濁浪の爲に押し流されて止みき。九俎の功之を、一篋に缺きて、天下の大勢は再び擾亂を醸し來らむとせり。かくの如きは、韓愈が初めて京に入りし後、凡そ六七年間、その眼球に映せしところ、邦家の形勢なりき。

* * * * *

愈の京師に來るや、その之を鞭ちたるは、主として生計の困難にありしこと、前に數ば述べたり。十九歳の少年は、見すほらしき姿して、玉しきの都大路に彷徨しつ。旅囊今や盡きなむとし、而して、未だ七尺の軀を托すべき俠者をさへ見出さざりき。

その初愈が郷を出づるや、必ずや心竊かに期したりしならむ。京師に至らば、先兄韓會の知人、善く己を顧みるならむと。而かも事實は案外にして、世態すでに全く變じ、今や先兄と反對の地位にありし人の未々が時めく期節なり。逐諫者の弟としいへば、自ら肩身も狭く、多少慈惠の心ある人だにも、公義を憚りて、之を顧るに躊躇したりき。愈は殘杯冷炙にも飽くを得ず、朝に宰臣の門を叩いて容れられず、暮には肥馬の塵にまみれて空しく歸れり。長安城裡、幾十萬中、未だ一人の善く將來の偉人を識るものあらざるを奈かむ。

此時に於ける愈が心中の悲歎は如何なりけむ。幼時よりして渡るにつらき浮世の困難に慣れて、人情の薄き紙の如く、天命の恃むべからざる

ことば、悉く解知せりと雖も、猶ほ且つ慈愛深き嫂と忠實世の常ならざる乳母とを有したりき。愈は翻雲覆雨、世態の輕浮、かくまでとは思はざりしならむ。天命の我に與せざる、かくまでとは考へざりしならむ。田舎の少年、都に在りて、茫然として爲すべき所を知らざりしも、固より其所のみ、歸らむか、歸らむか、さばれ、老いか、いりし、鄭夫人は、あらゆる欠乏を忍んで、その成功の後、錦衣閭里を耀かし、快馬得意に歸り來らむ日を待ちつゝ、あるにあらざりや、愈はあはれにも、立すくみの身となれり。

愈は、後年崔立之に答へてこの頃の狀態を述べて曰く、僕始め年十六七の時、未だ人事を知らず、聖人の書を讀んで以爲へらく、人の仕ふる者は皆人の爲にするのみ、己に利あるが爲に非ざるなりと、年二十に及ぶとき、家貧にして衣食足らざるに苦しみ、所親に謀り、然る後に仕の唯だ人の爲のみにあらざるを知れりと、嗟乎、孤獨寂寞、正にかくの如し、かくて憂愁の谷中に陥り、絶望の淵底に沈むなくむば、幸のみ、讀者は、こゝに、どこまでも愈の年僅に十九なりしを記せざるべからず。

この時に方りて、天はさすがに將來の巨人をして溝壑に頓せしめず、愈は忽然馬蹏が還京の報を得たりき。蹏は伯兄韓會の親友にして、叔兄韓弁も亦たその知遇を得て、幕下に死せり。愈は、此人の外、身を托すべき者あらざるを思ふや、直に走りて、途上に蹏を、その馬前に拜しぬ。先づものは、涙のみ、やがて伴はれて、其居にいたり、韓會が韶州貶後十年間の事情は、委しく少年の口より語り出されぬ。蹏は韓會の弟なりと聞くや、懷舊の情に堪へず、その孤獨援なきを憐み、任俠の志氣は、脚座に教賑の約を與へしが、その後、愈が再び之を安邑里の第に訪ふや、蹏は深くその飢寒を憐みて、衣食を給し、依てその二兒の教育を委ねたり。愈はかくして馬蹏の第に食客となりつゝ、此間梁纒の徒に従て遊び、銳意鑽仰、自ら一代に振はむと欲し、しばし文を公卿の間に投じ、故相鄭餘慶の頗る爲に譽を延くあり、是に由てや、名を知らるゝに至れり。然れども、起て進士の第に應ずるや、不幸にして常に失敗したりき。

「柳宗元を讀みたる人は、子厚が少年に於ては、坦々たる大道輕車に忽し

て馳するが如く、早く進士の第を得、直に博學宏詞に遷り、一躍して要路に進みしを見たるならむ。さるを韓愈の才の學を以て、しばし失敗せしは何故ぞ。苟くも當時の事情を探らば、あながち非理のことにあらずるを知るべし。乃ち先づ余をして韓愈が自ら告白せしものを驗せしめよ。曰く、京師に来るに及んで、進士に擧げられたる者、人多く之を貴ぶを見て、僕賊に之を樂み、就いて其術を求めき。或は禮部に試みられし賦詩策等を以て相示す。僕以爲へらく、無にして能すべし。と。因て州縣に詣り、擧げられむことを求むるに、有司の者、好惡其心より出で、四擧して後に成ることあるも、亦た未だ仕ふるを得ず。聞く吏部に博學宏詞を以て選ばるものあれば、尤も之を才と謂ひ、且つ美仕を得と。就ち其術を求めしに、亦た禮部の類のみ。私に其故を怪みしも、猶ほ其名を樂み、因て又州府に詣り、擧げられむことを求めき。凡そ二たび吏部に試みられ、一は既に之を得て、又中書に黜けられ、仕ふるを得ず。雖も、人或は之を能といひぬ。退いて自ら試みられし所を取つて之を讀むに、又俳優者の辭に類せ

り。顔慚愧として、心寧からざるもの數月、既に已に之を爲せば、成就する所あらむを欲す。舊に所謂過を耻ぢて非を爲す者なり。因て復た擧げられむことを求めしに、亦た幸なかりき。乃ち復た自ら疑ひ、以爲へらく、試みられしところ、之を得しものと、その程度を同うせず。と。之を觀るに及んで、余亦た甚た愧づるなかりき。と。

余試に子厚と退之とを比較一番せむか。子厚は京師に長じて、善く應試の事情を解知せるに反し、愈は江南の鄙地より出で來り、糊口にすら窮せし者。一は當時多少知名なる官人の子にして、一は寄食の客のみ。一は才子として、嶄然頭角をあらはし、諸公争うて門下より出でしめむとせし者。一は人に讀書を授け、傍ら自修をなじつゝ、あり絶えて、交際上の益をも得ざりし者なり。之を愈が前言と並せ考へ、兩者が境遇を對照すれば、蓋し思半ばに過ぐる者あらむ。

かくの如くして、愈は二十歳より引續いて、三歳進士の試に應ぜしも、得る所なかりき。その二十三歳の時、久々にて家を省せむが爲に、江南に歸

り、翌年復た京師に出で、又一年を経て、貞元八年、二十五歳にして、試に應じ、明水賦、御溝、新柳詩を試みられ、漸く陸宣公の識るところとなり、爲に推されて、進士の第に登るを得たり。同時試人には、賈稜、陳羽、歐陽詹、李博、李觀、馮宿、王涯、張季友、齊孝若、劉遵古、許李、同侯、繼穆、費李、絳温、商庚、承宣、員結、胡諒、崔群、邢冊、裴光輔、萬瑤等あり、是年の一勝、天下、孤、雋、偉、傑、の、士、多、く、因て龍虎勝の稱あり、然れども、當時の事情は、なほ、愈をして三たび、博學宏詞の試に、下第するの止むを得ざるに至らしめ、かか龍を以て自ら比し、科目に應ずるとき、人に與へし書は、正に此間に成れるなり、此に至りて、愈は定めてその伯兄の世に在らざるを憾みしなるべし、馬燧門下の一食客は、萬事意の如くなるを得ず、遂に之を驅て、送齊、醇、下、第、序、の中、に、今天下を擧げて、人なりといへば、則ち今天下を擧ぐる人の過に非ざるなり、蓋し其漸因あり、其本根あり、其親を私するより生じ、其身に私するより成れり、己の不直を以て、人も皆然りと謂へり、その之を植ゆるや、固に久しければ、その之を除くや、實に難し、百年必生に非ずむば、得て化

すべからざるなり、命を知て、惑はざるに非ざれば、得て改むべからざるなり、已んぬるかな、其れ終に古に復せむや」と言はしめ、又崔虞部に與へし書に、鬱勃の憤念を吐きしが如き、當時悲惨なる境涯の大略を推知すべきなり、その初愈が進士の第に登るや、胸中の抱負と機を見るの敏慧とは、直に争臣論の一文に、天下の耳目を聳動せしめたり、き而かも愈は博學宏詞の科に試みられしこと、已に三回中には公平なる虞部其人の如き者ありて、之を薦むることありしと雖も、中書その文名を聞きつゝ、愈を擧げざりしを見れば、その不平を訴へしも、亦た宜ならずや、陸贄を容るゝ能はざりし滿廷の小人は、如何にして韓愈を容るべき、兩者性格相似たるが上に、愈は特に年少氣銳の者なりければなり、愈は當時二十八齡に達し、何時くまでも、目くら千人の俗吏にその才を試みらるを願はず、むしろ短刀直入的に、當時宰相の知を得むを欲せり、是に於てか宰相に上書するの止むを得ざるに至りき、おもふに、愈をして、なほ兩三回、吏部博學宏詞の試に應せしめなば、藩鎮に苦しき生活

を見ることなかりしならむ。然れども、愈は今や心機一轉せり。勿論家の貧を知らざるに非ず、唯だ十九歳より廿八歳に至るまで、十年の星霜は、善く貧窮に慣らさしめたり。愈は今果して如何にしたるか、余は之を叙述する前に、争臣論と上宰相書とを擧げて、韓愈が壯時の文章と識力とを論ずるを得む。

争臣論は、愈がその抱負を世上に告白したる第一のものなりき。今その出でし所以とその述べし論議とを考ふれば、何人も愈が抱負の偉大にして、氣力の強盛なるに感嘆せざることを能はざるべし。愈は自己が不平を以て、陽城其人の上に累を及ぼせしに、非ず、滿廷の朝士一も爲す所なきに想到し、假りに城を以て、その中心點となせしのみ、城が位に在ること已に久しくして、一言の政に及ばざるを責むる語に曰く、

若蠱之上九居無用之地、而致匪躬之節、以蹇之六二、在王臣之位、而高不事之心、則冒進之患生、曠官之刺興、志不可則而尤之、不終無也。今陽子實一匹夫、在位不爲、不久矣。聞天下之得失、不爲、不熟矣。天子待之、不爲、不加

矣。而未嘗一言及于政、視政之得失、若越人視秦人之肥瘠、忽然不加喜戚于其心、問其官、則曰諫議也。問其祿、曰下大夫之秩也。問其政、曰我不知也。有道之士、固如是乎哉。

また諫官たる道を教へて曰く、
入則諫其君、出則不使人知者、大臣宰相之事、非陽子之所宜行也。夫陽子本以布衣、隱蓬蒿之下、主上嘉其行、誼擢在此位、官以諫爲名、誠宜有以奉其職也。使四方後世知朝廷有直言骨鯁之臣、天子有不償賞從諫如流之美、庶巖穴之士聞而慕之、束髮結帶而伸其辭、說致吾君于堯舜、熙鴻號於無窮也。若書所謂、則大臣宰相之事、非陽子之所宜行也。

また聖賢に天人の責あるを論じて曰く、

自古聖人賢士、皆非有心求于聞用也。閔其時之不平、人之不達、得其道不敢獨善其身、而必兼濟天下也。孜孜矻矻、死而後已。故禹過家門不入、孔席不暇暖、而墨突不得黔、彼二聖一賢者、豈不知自安佚之爲樂哉。誠畏天命而悲人窮也。夫天授人以聖賢才能、豈使自有餘而已、誠欲以補其不足者

也。耳目之于身也。耳司聞而目司見。聽其是非。視其險易。然後身得易焉。聖賢時人之耳目。時人聖賢之身也。且陽子之不賢。則將役于賢。以奉其上矣。若果賢。則固畏天命。而憫人窮也。惡得以自暇逸乎哉。

是等の語を觀ば、諫官たるの道を説くや、心に善くその職分を悟り、事に當りて適往直進の氣あるを以て理想となせしを知るべく、聖賢天人の責あるを論ずるに至りては、念が心中深く確固たる道念を有し、社會に對する責任を知り、一動一靜、管て苟くもせざるを悟り居たりしを見む。是れ豈に二十五歳青年の言ならむや。知るべし。その京師に在りし間、勵精刻苦、心神の修養、膽氣の鍊磨、少からざる工夫を積みて之を成就せしことを、此に由て之を視るに、念が進士の第に登りしや、已に當時の大勢を知り、之に對する處置の大經綸の如き、既に胸中に存せしと疑ふべからず。當時の諸文、すでに歴々徴すべく、かの上宰相書の如き、蓋しその最たる者なり。

唐代進士の風、文を公卿の間に投じ、知己を求むる者、甚た多かりしと雖

も、直に之を宰相に求め、敢て唐突を顧慮せざりし韓愈の如きは、蓋し稀なり。大に自ら信じ自ら恃む所あるに非ずして、奚ぞかくの如くなるを得む。其始めて宰相に上る書を讀むに、宰相の責任を説き、當に人材を長成し、英才を教育すべきを以てし、其説の反覆懇切、身自ら之を計るに似たる者あり、更に一轉してその自ら薦むる言に曰く、

今有人生二十八年矣、名不著於農工商賈之班、其業則讀書著文、歌頌堯舜之道、鷄鳴而起、孜孜焉亦不爲利、其所讀皆聖人之書、揚墨釋老之學、無所入於其心、所著皆約六經之旨而成文、抑邪與正、辨時俗之所惑、居窮守約、亦時有感激怨懟奇恠之辭、以求知於天下、亦不恃於教化、妖淫諛佞、諂張之說、無所出於其中、四舉於禮部、乃一得、三選於吏部、卒無成、九品之位、其可望、一畝之宮、其可懷、遠遶乎四海、無所歸、恤恤乎饑、不得食、寒不得衣、瀕之於死、而益固、得其所者、爭笑之、忽將棄其舊、而新是圖、求老農老圃、而爲師、悼本志之變化、中夜涕泗交頤、雖不足當詩人孟軻之謂、抑長育之使、成材亦可矣、教育之使成材、亦可矣。

東方朔が武帝に上りしと李太白が韓荆州に贈りしと、此書とを并せて當に自薦の三幅對となすべし。その言たるや、悲哀を極むと雖も、中に自ら深く待む所あり、英邁矯俗の氣、直に人の眉宇を射るを覺えずむばあらず。而して後、又筆を轉じ、宜しく山林の士を招致し、野に遺賢なかるべきを論じて曰く、

抑又聞、上之化下得其道、則勸賞不必偏加天下而天下從焉、因人之所欲爲而遂推之之謂也。今天下不由吏部而仕進者幾希矣、主上感傷山林之士有逸遺者、屢詔内外之臣、旁求於四海、而其至者蓋闕焉、豈其無人乎哉、亦見國家不以非常之道禮之而不來耳、彼之處隱、就問者、亦人耳、其耳目鼻口之所欲、其心之所樂、其體之所安、亦豈有異於人乎哉、今所以惡衣食窮體、屑麋鹿之與處、爰狖之與居、固自以其身不能與時從順、俯仰故甘心自絕而不悔焉、而方聞國家之仕進者、必舉州縣、然後升於禮部、吏部、試之以繡繪、雕琢之文、考之以聲勢之逆順、章句之短長、中其程式者、然後得從下士之列、雖有化俗之方、安邊之畫、不繇是而稍進、萬不有一得焉、彼惟恐

入山之不深入、入林之不密、其影響昧昧、惟恐聞於人也、今若聞有以書進宰相而求仕者、而宰相不辱焉、而薦之天子、而爵命之、而布其書於四方、枯槁沈溺、魁閎、寬通之士、必且洋洋焉動其心、峨峨焉纓其冠、于于而來矣、此所謂勸賞不必偏加天下而天下從焉者、因人之所欲爲而遂推之之謂者也、何ぞ其論の周到親切にして、國家を思ふことの切なるや、後十九日を経て再び宰相に上りし書にいたりては、水火の難を以て之に比し、最も悲哀を極め、眞に情隘く辭感するに至らむとし、而かも文氣の逸宕を害せず、起伏操縱、神の如きものあり、その後二十九日を経て、最後に上りし書にいたりては、周公を以て宰相に責め、到底その言ふ如くに爲さざるを得ざらしめむとす。その末段に曰く、

古之人三月不仕則弔、故出疆必載質、然所以重於自進者、以其於周不可則去之魯、於魯不可則去之齊、於齊不可則去之宋、之鄭、之秦、之楚也、今天下一君四海一國、舍乎此則夷狄、去父母之邦矣、故士之行道者、不得於朝則山林而已矣、山林者、士之所獨善、自養而不憂天下者之所能安也、如有

憂天下之心、則不能矣。故愈每自進、而不知愧焉。書、函、上、足、數、及、門、而、不、知、
 止焉。寧獨如此而已。惴惴焉、惟不得出大賢之門下。是懼亦惟少垂察焉。
 今夫れ、この三書を斥けて、單に乞食文章といひ、直に唾して棄て去らむ
 とするは、獨り酷なるのみならず、其愚及ぶべからざる者のみ。愈をして
 之を上るの止むを得ざるに至らしめし徑路に就て一考せよ。以爲へら
 く、大丈夫世に生る、必ず當に爲すあるべし。天の才を降す、豈に徒爾なら
 むやと。滿腹の經綸、之を施さざれば、已むに由なし。身を持すると嚴正事
 を處するや、剛潔、是に於てか自ら進むことを嫌はず。その他年善哭の
 唐衢に贈りし詩中に、當今天子急賢良、應函朝出、開明光、何不上書、自薦達、
 坐令四海如虞唐、といへるは、即ち復た夫子自ら謂ふものに非ずとせむ
 や。宰相に知己を求めしは、固より其所のみ。恨むらくは、趙橫賈耽、虛邁の
 輩、太平の宰相、蒙昧痴愚、衰として、充耳の如く、この青年が利器を抱藏せ
 しを察せず、空しく、良馬をして、糟糠の間に駢死せしめむとしたり。余
 はこの時の韓愈に對し、頗る相憐むの切なるに堪へず、而して是れ世上

千金の子と謂ふべからず。陋巷破屋に哭する者、僅に之を識るを得むの
 み。

かくて韓愈は三たび吏部の試に應じて、遂に第に登らず。その滿腔の熱
 血を注ぎし三篇の書も、宰相の爲に報せられず。是に於てか、意を決して、
 京師を辭するの止むを得ざるに至りき。去るに臨み、その同年の進士た
 る侯繼に一書を與へて、別を告げぬ。蓋し、退歸の後、相見ること甚だ難か
 るべきを想ひ、文字を以て之に遺す。所謂貧賤別、更に苦なりといふもの
 篇中に、歴然たり。その一節に曰く、

僕又爲考官所辱、欲致一書聞足下、並自舒其所懷、合意連辭、將發復已、卒
 不能成就其說、及得足下二書、凡僕之所欲進左右者、足下皆以自得之、僕
 雖欲重累其辭、諒無居足下之意外者。故絕意不爲、行自念、方當遠去、潛深
 伏隲、與時勢不相聞、雖足下之思我、無所覩、尋其聲、光故不得、不有書爲別、
 非復有所感發也。

筆を進めて、更に退歸せる所以を詳述して曰く、

僕少好學問、自五經之外、百氏之書、未有闢而不求、得而不觀者、然其所志、惟在其意義所歸、至于禮樂之名數、陰陽、土地、星辰、萬藥之書、未嘗一得其門戶、雖今之仕進者、不要此道、然古之人、未有不通此而能爲大賢君子者、僕雖庸愚、每讀書、輒用自愧、今幸不爲時所用、無朝夕孜孜之勞、將試學焉、力不足而後止、猶將念于汲汲于時俗之所爭、既不得而怨天尤人者、此吾今之志也、懼足下以吾退歸、因謂我不復能自彊、不息、故因書奉曉、冀足下知吾之退、未始不爲進、而衆人之進、未始不爲退也。

嗟乎窮達の命あるを知らば、十年書を讀まざりしを悔るず、銳意仕進を求めて得ず、首を回らして既往を望む、誰か亦た能く此感なしと言はむや、この書、最も悲壯の趣を極め、正に余輩の好伴侶となるべきもの、一讀時に起舞せしめむとする者さへあり。

愈はかくの如くして、飄零落魄、長安を出で、宮闕の巍峨たるを跡にして、江南に向て懶き歩を運ばせたり。時正に暴烈日炎々として、官道の砂塵もきらめき渡り流る、汗はなれし弊衣を濕し盡し、樹下また一吹の風

あらず、既に潼關を出で、黄河の南岸に沿うて東下し、姑らくして路の清溪を廻るところ、蔚然たる樹木を見出し、その涼蔭に憩ひ、しばし旅中の苦を忘れむとせり。時に見る、二鳥を籠に入れたるもの、相並んで西行するを、之を問へば曰く、某土の守某官、使者をして天子に進めしむるなり、と東西行く者、皆路を避け、敢て正目する者なし、愈は乍ち聯想を、現在不遇なる自己の境涯に及ぼし、心中に言ふべからざる悲哀を感じ、遂に二鳥の賦を歌ひ、き之を以て一飽の時なきを嗟すとなし、愈を誹謗する徒は無情冷酷の人ならむのみ、善くその衷情を察する者は、決して其尤むべきに非ざるを知らむ、愈は年少氣銳の身を以て、失敗に失敗を重ね、都を去り、頭腦は世の己を察せざる不明に熱し、胸臆は己が才力を施す所なきに燃えたり、二鳥は唯だ羽毛の美を以て、天子の知遇を受くるに引きかへ己は孜孜として學をなすとこい、二十餘年行を磨き徳を積み、尙ほ一人の知己を求め難し、時に遭へば、小善と雖も必ず達し、時に遭はざれば、累世の善も容れられず、嗟乎人にして鳥に若かず、愈が天道の是

非を嗟せるもの、その理なしと言はむや、所謂二鳥は、白鳥と白鷺鶴となり。その賦に曰く、

吾何歸乎、吾將既行而後思、誠不足以自存、苟有食其從之、出國門而東、
窺白日之隆景、時返顧以流涕、念西路之蒼永、過潼關而坐息、窺黃河之奔
猛、感二鳥之無知、方蒙恩而入幸、惟進退之殊異、增余懷之耿耿、彼中心之
何嘉、徒外飾焉是逞、余生命之湮阨、曾二鳥之不如、汨東西與南北、恒十年
而不居、辱飽食、其有數、况策名於薦書、時所好之、爲賢庸有謂余之非愚、昔
殷之高宗、得良弼於宵寐、孰左右者、爲之先信、天同而神比、及時運之、未來
或兩求而莫致、雖家到而戶說、祇以招尤而速累、蓋上天之生余、亦有期於
下地、盍求配於古人、獨悵悵於無位、惟得之而不能、乃鬼神之所戲、幸年歲
之未暮、庶無羨斯類。

蘇子美かつて此篇を評して曰く、悲壯激烈、騷人の思を得たりと、然れども時に藻章を發して世に耀かさむとする形跡の免れ難き者あり、居然として少年氣銳、乃ち然るのみ、かくて念は靜に、二鳥の籠の後影を、目送

いつ、終に起て、疲脚を驅り、やがて、河南なる故郷の地に着したりき。



第四章 汴徐二州の幕僚

余はすでに愈が二十三歳の時に於て、一たび河南に歸りしことを記せり。三たび進士の試に應じて登第せざりしことを、其嫂たる鄭夫人に語りしとき、無限の悲憤、胸中に滿ちて容易に抑遏すべからざりしを想像するに苦しまず、而かも、今再び歸り來るとき果して如何、願れば京師に在りしこと已に十年、時の否命に遇ひしとはいへ、一も爲すと云ふなく、弊裘塵にまみれ、幾に一物の膝下に獻する者なかりしに非ずや。感情的なる愈は、必ずや其道すがら、歸りて鄭夫人に顔を合はさむよりは、寧ろ一死の優れるに若かざるを思ひしならむ、すてに衡宇を瞻て、家門に入りて、堂に上り、寄る年波に、瘦せ衰へたる鄭夫人に迎へられ、其身の去就を問はれしとき、愈は如何に苦しき思を爲すべきかを豫想したりけむ。然れども自ら心に之を責むる苦は、更に切なるものあり、おもふに、客夜蕭寂、四鄰人定、まりて、寒星破壁を射るとき、凄然として自ら堪へず、既往

を回顧して、涕淚滂沱、縱横頤に交りしなるべし。是れ尙ほ言ふに足らず、余は今こゝに、愈が一生の中に最も悲しかりし出來事に就て語らざるべからず、何ぞや、夫人の死、即ち是なり。蓋し愈は河陽に至りて、未だ家に達せず、料らずも老成が嫂の喪を護して、墳墓の地に來葬するに會したり。

愈は鄭夫人をして一日の安裕を得せしめず、空しく之を死に送らざるを得ざりき。生れて未だ二歳に滿たず、早く父母を失ふてより、嫂は一日も爲に勞せざりしことあらず。中道にして其夫を失ひ、他に幾多の災害に遭遇したるにも拘はらず、あらゆる辛苦艱難を忍びたり、而して愈は旅食十年、空しく前鄉貢進士の名を以て、歸り來り、今や零落の極點に於て、恩惠ある此嫂を九泉に送る、人生の悲惨むしろ之より大なる者あらむや。余はこゝに愈が夫人の柩前に捧げし一篇の祭文を引くことを禁せず、而して是れ眞摯誠實なる心の底より出でし人間第一悲哀の聲なりと知らずや。

維年月日、愈謹於逆旅、備時羞之奠、再拜頓首、敢昭祭于六嫂陽鄭榮氏、夫
人之靈、嗚呼、天禍我家、隆集百殃、我生不辰、三歲而孤、蒙幼未知、鞠我者兄
在死而生、實維嫂恩、未訖一年、兄官王官、提携負任、去洛居秦、念寒而衣、念
飢而飧、疾疹水火、無災及身、劬勞悶悶、保此愚庸、年方及紀、荐及凶屯、兄罹
讒口、承名遠還、窮荒海隅、天闕百年、萬里故鄉、幼孤在前、相顧不歸、泣血號
天、微嫂之力、化爲夷蠻、水浮陸走、丹旆翻然、至誠感神、返葬中原、既克友葬、
遭時艱難、百口偕行、避地江濱、春秋霜露、薦敬蘋繁、以享韓氏之祖考、曰此
韓氏之門、視余猶子、誨化諄諄、爰來京師、年在成人、屢貢于王、名迺有聞、念
茲頓頭、非訓曷因、感傷懷歸、隕涕重心、荷容躁進、不顧其卑、祿仕而還、以爲
家榮、奔走乞假、東西南北、孰云此來、迺賭靈車、有志而及、長負殷勤、嗚呼哀
哉、昔在韶州之行、受命于元兄、曰爾幼養于嫂、喪服必以葭、今其敢忘天實、
隨之嗚呼、哀哉、日月有時、歸合登封、終天永辭、絕而復蘇、伏惟尙饗、

之を讀むもの、誰か爲に惻動せざらむ、かくて愈は喪に服して、嫂の恩に
報せり。

鄭夫人はすでに世を去り、愈は悲哀の深淵に沈めり、而してその反動と
して、勇氣は漸く發現し來らむとせり、愈はすでに他の頼むべからざる
を解知せり、今後の韓愈は最早決して號泣憐を乞ひ、悲を訴ふる人に非
ず、剛毅勇猛、直前邁往の一大丈夫、漢たるべし、是に於てか、他人より一臂
の力を借らずして、段階の最下級より新なる生活を始めむとする決心
は、出て來りぬ、愈が東都に赴いて、運命を藩鎮の中に見出さむとしたる

は、之が爲のみ、時に貞元十一年九月なりき、
道乍ち田横の墓下に出でぬ、愈は深く横が義高く能く士を得たるを感
じ、因て酒を取りて以て祭り、文を作て之を弔いぬ、其辭に曰へらく、
事有曠百世而相感者、余不自知其何心、非今世之所稱、孰爲使余歔歔而
不可禁、余既博觀乎天下、曷有庶幾乎夫子之所爲、死者不復生、嗟余去此
其從誰、當秦氏之失鹿、得一士而可王、何五百人之擾擾而不能脫、夫子於
劍鏃、抑所寶之非賢、亦天命之有常、昔闕里之多士、孔聖亦云其遠、邈荷余
行之不迷、雖顛沛其何傷、自古死者非一夫子、至今有耿光、跪陳辭而薦酒

魂^〇髣^〇髴^〇而^〇來^〇享^〇

田横の死するや、五百八皆之に海島に従ふ。蓋し深く士心を得るに非ずむば、奚ぞ能く然らむ。今念は命世の才を負ひ、嘗て數ば知己に用ひられむことを欲して、世に其人なし。是に於てか、横が義に慕ふあり、歎歎嘆息、獨り感ずるところあるが如くして、文を作て之を祭るに至る。敬慕の情、悲傷の意、飄然擲すべし。文、僅に百餘字、而かも旨味窮なし、真に命世の作と稱すべきなり。

かくて愈は東都に赴き、留守董晋に依りぬ。當時の世態を考ふるに、朝に容れられざる者は、藩鎮に赴く外に一策あらず。藩鎮の節度は、所謂古しへの方伯、連帥の職にして、一方に坐して制を其境内に専らにするを得るものなり。故に當時の朝廷は、藩鎮の比較的、大なるものにして、藩鎮は朝廷の小なるものなり。藩鎮に意を得るものは、官職の卑きをいはずして、實權を掌中に收むべく、その志望にして高かりせば、當に大に爲すとこそあるべきなり。愈が藩鎮に身を寄せむとしたる、亦た其理なきに非

ず。而して董晋は如何なる人ぞ。余は愈が撰びし贈太傅董公行狀によりて、之を知るを得たりき。

董晋字は混成、河中虞鄉萬歲里の人。少にして明經を以て上第し、次いで祕書省校書郎に拜せられ、翰林に入て學士となりしが、疾を以て辭し、汾州司馬に拜せられ、崔圓が淮南に節度たりしとき、本官を以て御史を攝し、判官に充てられき。その軍事を以て京師に来るや、止りて殿中侍御史となり、遂に祠部郎中に上りぬ。代宗の大曆四年、兵部侍郎李涵が節を持し、崇徽公主を送りて回紇に如くや、奏して判官となす。すでにして、回紇の人來て曰く、唐の土疆を復せしは、回紇の力に取れり。我に約して市を爲し、馬既に入て我に賄を歸すこと足らず。我使人に於て、之を取らむ。と。涵懼れて敢て對へず。顧みて晋を視る。晋乃ち代り言て曰く、我が土疆を復せしは、爾信に力あり。吾馬なきに非ずして、爾と市を爲す。賜たる既に多からずや。爾が馬、歳ごとに至り、吾皮を數へて資を歸る。邊吏詰を致さむことを請ふも、天子爾が勞ありしを念うて、故に詔を下して、侵犯を禁

じ諸我我が大國の爾に與することを畏れて敢て核すること莫し爾が父子寧んじて畜馬蕃きは我に非ずして誰かせしめむと是に於て其衆皆服し晋を環りて拜す既にして又相率ひ南面に序拜するや皆兩つながら手を舉げて曰く敢て復た大國に意あらずと晋の回紇より歸るや司勳郎中に拜せられ後諸官を歴て御史中丞となり朝夕入て事を議せしがしばらくして出だされて華州刺史潼關防禦鎮國軍使となりぬ朱泚の亂御史大夫を加へられ詔して帝の所に至らしめ恒州に宣慰使となれり是に於て朱滔范陽より來り回紇の師を以て亂を助け人心恟々たり而して晋の恒州に至るやその地の民即日詔を奉じて兵を出し滔と戦ひ大に破て之を走らしめ還て河中に至る時に李懷光また反を爲し上梁州に走る懷光の率ゆるところ皆朔方の兵晋その朱泚と合せむことを謀るを知り之を患ひ懷光に造り言て曰く公の功天下與に敵するものなく公の過未だ人に聞ゆるものあらず某上の所に至り公の情を言はむ上げ寛明なり將に赦宥せざることを無からむとす乃ち能く朱

泚が臣と爲らむや彼や臣と爲て其君に背けり苟くも志を得ば公に於て何か有らむ公は既に太尉たり彼や公を寵すと雖も何を以て此に加へむ彼君に事ふること能はず能く公に臣とし事へむや公能く彼に事へて君に事ふる能はざることあらむや彼天下の怒て朝夕に戮死せられむことを知る者なり故にその同罪を求めて之と比す公何の利する所かある公の彼に敵する餘力あり如かず明かに之に絶を告げ兵を起し之を襲取し宮を清め天子を迎へ庶人の服を爲して罪を天子に請はむには大過ありと雖も猶ほ將に掄はむとす公の如きは誰か敢て讖せむと語已はるや懷光拜して曰く天公を賜うて懷光の命を活かすと喜び且つ泣き晋も亦た泣く又その將卒に語るや懷光に語る者の如し將卒呼んで曰く天公を賜うて吾が三軍の命を活かすと拜して且つ泣き晋も亦た泣く故に懷光つひに朱泚に與せざりき晋は氣仁にして語口より出す能はざるか如く事に當るに及では乃ち更に疎亮捷給その詞忠その容貌温然故に人に言ふあれば信せられざる無し明年德宗の京

師を復すや、左金吾大將軍に拜せられ、尙書左丞より太常卿に遷り、貞元五年、遂に相位に上り、台鼎を輔弼すること五年、上前に奏するところの者、皆二帝三王の道、秦漢より以降は未だ嘗て言はず、退き歸るや、未だ嘗て上に言ひしところの者を以て、人に告げず、子弟私に問ふあれば曰く、宰相職とするところ、天下に繫がれり、天下の安危は、宰相の能と否とを以て見るべし、宰相の能否を知らむと欲す、かくの如く視れば、其れ可なり、凡そ上前に謀議するところは、道ふに足らざるなり、と、故に其事聞えず、疾の病せしを以て、上前に辭するものを記せず、退いて表を以て辭する八方にして許され、禮部尙書に拜せらる、後四年にして、兵部尙書に拜せられ、次いで東都留守判東都尙書省事充東都畿汝州都防禦使兼御史大夫といへる長々しき官名を戴き、洛陽に出守せしなり、晋の人となりや、大凡かくの如し、未だ王佐の才、社稷の臣を以て許すべからざるも、滿廷の朝士たい、勢利に奔趨し、富貴に眷戀する者に比すれば、雞群中の孤鶴たりしなるべし、愈は如何なる關係を以て、之を知りしか、今さら審

かにし難し、然れども晋がかつて宰相たりし時は、恰も愈が京師旅食の日に際したれば、或は其門に詣り、親しく之を見しこともあるべきか、而して晋は愈が東都に赴きしよりも、やゝ後れて其地に來れり、愈は又數ば之を干したりしならむ、その後、未だ五月を盡くさず、貞元十二年の七月に至り、晋が汴州刺史宣武節度使となるや、愈はその推選により、進士を以て秘書省校書郎に試みらるを得、觀察推官となり、從つて其地に赴けり、愈は時に三十一歳、漸く一官を得て、自ら衣食する身となり、此時の前後に於て、妻をも娶りしが如し、

汴州の地たるや、代宗大曆よりこのかた、殊に兵事多く、劉玄佐、其師を益して十萬に至り、藩鎮の勢威、日に熾なり、玄佐の死するや、其子士寧之に代りしが、政遊度なきを以て、衆心離畔し、其將李萬榮なる者、一日其政に乗じて之を逐ひ、自ら代て節度となりしが、未だ一年ならず、その將韓惟清、張彥林、亂を作し、萬榮を殺さむとしたりしが、剋たず、すでにして、萬榮風を病み、昏々事を知らず、其子乃ち復た士寧が故をなさむと欲しけれ

ば、監軍使俱文珍、その將鄧惟恭と謀り、之を執へて京師に至り、其間に萬榮早く死し、詔未だ至らず、惟恭軍事を督したりしが、今や董晋が向ふことゝなれるなり、晋の命を受くるや、劉宗經、韋弘景及び愈等、僚屬の二三を従がへ、他に兵衛を帯びず、その鄭州に及ぶまでは、幸にして逆ふ者、至らず、鄭州の人、或は爲に之を危ぶみ、晋に勸めて、止まり待てといひ、汴州より出でし者の如きは、特に切諫して、入るべからずといひぬ。然れども、晋は對へず、遂に行いて圃田に宿し、明日中牟に食し、逆ふもの至りて、八角に宿し、その翌、惟恭及び諸將の至るや、遂に逆へて以て入りぬ。郟に及ぶとき、三軍路に縁て、譴駭をなし、やゝ不穩の狀勢あり。蓋し晋が何事を爲すかを豫想せず、故に然りしなり。かくて路傍見る者の中、庶人の壯なる者も、亦た從て呼び、老いたる者は泣き、婦人は啼哭し、喧闐紛擾の中を過ぎて、一行は先づ軍府に入りぬ。この時、韓愈たるもの、肉躍り血沸きし者なしと謂はむや。

初め玄佐死して、吳濩の代るや、鞏に及ぶとき、亂を聞て歸りしに因り士

寧萬榮の節度となりしも、皆自ら爲して、後に命ぜられたるなりき。故に軍士は、見慣れて、以て常となし、怪まず。惟恭も亦た其志あり、而して晋の來るや、餘りに速なりしを以て、まだ謀をなすに及ばず、遂に出で、迎ふるに至れるなり。すでにして惟恭、晋の爲す所を觀むと欲し、其人に私して之を告げしめぬ。曰く、公爲すことなしと。惟恭漸く胸を撫し、晋の己を害するなきを知り、心を委して服従せむとせり。その晋に進見せし者皆公は仁人なりといひ、晋の言を聞きし者も亦た、公は仁人なりといひ、環りて相告げ、汴軍大に和ぎぬ。而して晋は、從來軍民の聲望を得むが爲に、酒肉を賜ひしなどの惡例を廢し、専ら之を心服せしめ、再び亂を起さしめざらむを期せり。而して愈は、此間多少爲す所ありしと雖も、未だその驥足を伸ばすに及ばず、居然としてその不平を消遣するに由なかりき。唯だ老成の來り訪ひ、一歲滯留するあり、おもふに唯だ家居園樂の興、僅に自ら慰めしに過ぎざらむのみ。

董晋は固より愈を用ふるに意ありしならむと雖も、直に破格の登庸を

以て之が官を進むることは爲し能はざりき而して愈は幼時より悲哀なる境遇に陥りしが爲に強盛なる自信の外に憤り易く悲み易く甚だ急激に過ぐる性をも有せり故に區々たる觀察推官の位は毫も其心を満足せしむる能はず之を階梯とすべきは固より知悉するところなれども唯だ荏苒として機會を待つこと久しきに堪へず秋隼の翮を撃つや青雲の末に迷らずむば止らずおもへば初めて仕進に志してより已に十一年元より無理ならぬことはいへば後來その生涯に於ける幾多の頓挫は實にこの急激なる性より起りし者なり位に在ること殆んど二年未だ榮遷の慶あらず是に於てか貞元十三年七月に至り終に辭するに疾を以てしぬかくて愈は退いて居に休し復志賦を作りて今更に己が生涯の多涙を痛歎せり其賦に曰く

居悒悒之無解兮獨長思而永歎豈朝食之不飽兮寧冬裘之不完昔余之既有知兮誠坎珂而艱難當歲行之未復兮從伯氏而南遷凌大江之驚波兮過洞庭之漫漫至曲江而乃息兮逾南紀之連山嗟日月其幾何兮携孤

養而北旋值中原之有事兮將就食於江之南始專專於講習兮非古訓爲無所用其心窺前靈之逸跡兮超孤舉而幽尋既譏路又疾驅兮孰知余力之不任考古人之所佩兮閱時俗之所服忽忘身之不肖兮謂青紫其可捐自知者爲明兮故吾之所以爲惑擇吉日余西征兮亦既造夫京師君之門不可逕而入兮遂從試於有司惟名利之都府兮羌衆人之所馳競乘時而附勢兮紛變化其難推全純愚以靖處兮將與彼而異宜欲奔走以及事兮願初心而自非朝聘驚乎書林兮夕翺翔乎藝苑諒卻步以圖前兮不浸近而愈遠哀白日之不與吾謀兮至今十年其猶初豈不發名於一科兮曾不補其遺餘進既不獲其志願兮退將遁而窮居排國門而連出兮慨余行之舒舒時憑高以迴顧兮涕泣下之交如良洛師而悵望兮聊浮游以躊躇假大龜以視兆兮求幽貞之所廬甘潛伏以老死兮顯著其名譽非夫子之洵美兮吾何爲乎浚之都小人之懷惠兮猶知獻其至愚固余異於牛馬兮寧止乎飲水而求芻伏門下而默默兮竟歲年以康娛時乘間以獲進兮顏垂歡而愉愉仰盛德以安窮兮又何忠之能輸昔余之約吾心兮誰無施而有

獲、嫉、貪、佞、之、汚、濁、兮、曰、吾、其、既、勞、而、後、食、德、此、志、之、不、修、兮、愛、此、言、之、不、可、忘、情、悵、悵、以、自、失、兮、心、無、歸、之、茫、茫、苟、不、內、得、其、如、斯、兮、孰、與、不、食、而、高、翔、抱、關、之、阨、陋、兮、有、肆、志、之、揚、揚、伊、尹、之、樂、於、畎、畝、兮、焉、貴、富、之、能、當、恐、誓、言、之、不、固、兮、斯、自、訟、以、成、章、往、者、不、可、復、兮、冀、來、今、之、可、望、

望むところ得べからず之を苦んで意氣自ら消沈せむとす。

晋の汴に在るや職事修まり人俗化し嘉禾生じ白鵲集まり若鳥來り巢ひ嘉瓜帶を同くし實を聯ね四方より至る者歸て以て其帥に告げ小大威懷疑ふところなれば輒ち來り問はしめ交も惡するあれば晋與に之を平げぬすでにして復た長く留まるを欲せず累りに朝に請ふ所ありしも許されず疾あるに及で又之を請ひ且つ曰く人心動き易く軍旅虞多し臣の生けるに及で計先づ定めざれば他日に至りて事或は期し難からむと猶ほ允されず未だ幾ならずして疾を獲十五年二月三日終に薨じぬこの時愈は未だ職を辭するを許されずして位にありければやがて其喪を護して京師に赴くことゝはなれり。

かくて董晋すでに薨じ行軍司馬陸長源姑らく留後を總ぶることゝなれり。長源性刻急才を恃み物に傲り軍中の惡む所たりその留後に知らるや揚言して曰く將士弛慢日に久し當さに法を以て之を齊ふべしと衆皆懼る或は之に勸め財を發し以て軍を勞せしむ長源曰く我豈に河北の賊に倣ひ錢を以て健兒を買ひ節鉞を求めむやとその委任するところの從事揚儀孟叔度の諸輩皆浮薄にして檢せず常に戯に軍中に入り婦女を調弄し自ら孟郎と呼べり軍中皆怨怒し遂に聚て亂をなし長源並に揚孟を執へて之を殺しぬ即ち長源が留後となりしより八日是に於てか監軍俱文珍宋州刺史劉逸準が久しく宣武の大將となり衆心を得たりしを以て之を召す逸準乃ち兵を引て徑に汴州に入り衆乃ち定る遂に以て節度使となし名を賜うて全諒といひぬ論ずる者曰く長源以て自ら取るあり何ぞ雲南の張乾陀揚州の呂用之と異ならむや昔人言ふところ大雅人を先にするは福の聚るところ小智自ら和するは怨を藏する府なる者其れ長源の謂かと愈は出發の後四日家眷を其地

に、殘したるまゝなるに、途上に、この變を開く、その感をなす、果して如何

此日足可惜の詩中、之を述べて曰く、

暮宿偃師西、徒展轉在牀、夜聞汴州亂、遶壁行傍徨、我時留妻子、倉卒不及將、相見不復期、零落甘所丁、驕女未絕乳、念之不能忘、忽如在我所、耳若聞啼聲、中途安得返、一日不可更、俄有東來說、我家免罹殃、乘船下汴水、東去趨彭城、從喪朝至洛、還走不及停、假道經盟津、出入行澗岡、日西入軍門、羸馬顛且僵、主人願少留、延入陳壺觴、卑賤不敢辭、忽忽心如狂、飲食豈知味、絲竹徒轟轟、平明脫身去、決若驚鳥翔、黃昏次汜水、欲過無舟航、號呼久乃至、夜濟十里黃、中流上灘潭、沙水不可詳、驚波暗合沓、星宿爭翻芒、驢馬蹶、躑躅、左右泣、僕童甲午憩、時門臨泉窺、罔龍東西出、陳許陂澤平、茫茫道邊草、木花紅紫相、低昂百里不逢人、角角雄雉鳴、

同時に、汴州亂の短古二章あり。

汴州城門朝不開、天狗墮地聲如雷、健兒爭誇殺、留後連屋累棟燒成灰、諸侯咫尺不能救、孤士何者自興哀、

母從子走者爲誰、大夫夫人留後見、昨日乘車騎大馬、坐者起趨乘者下、廟堂不敢用干戈、嗚呼奈汝母子何、

滿胸の憤悶、反語を以て之を出す、眞に所謂言ふ者罪なくして、聞く者戒むるに足るもの、神氣黯然として絶えむと欲するを覺ゆ、殊にその後首にいたりては、獨り長源が妻子の爲に言ふのみならず、天下の事、豫め料り難き者あらむとするに際し、安ぞ慷慨の涙を懸けざらむやといへるの微意を逗露し、餘情盡きず、千歳の下、なほ人をして節を拍つを禁せざらしむ。

上に云ひし如く、愈は僅に四日の差を以て、この亂に遭はず、その妻子の無異なりしは、せめてものこと、をいふべく、かくて短長の亭驛、送過し盡四年ぶりにして、三たび京師に入りぬ、

愈の洛陽に在りしや、僅に一二句、諸事すでに果されたりしが、心中には汴に還る一點の意志だにあらざりき、多少知己を以て囑せし董晋の下

にありてすら志を得ざりしに、何ぞ復た汴に還り、新任の節度の下に屈するの愚を學ばむや、愈は汴に還らざるに決せしものから、又長く洛に止まるべくもあらねば、烟柳二月、帝里の春に負き、又もや去て、寄邊なき流浪の身とはなれり。

行いて汜水を度り、陳許の間に出で、二月の末を以て、遂に徐州に抵りき、かくて友人李翺の紹介は、其州の節度使張建封をして、愈の足を留めしめぬ。此日足可惜の詩中に、

僕射南陽公宅我唯水陽篋中有餘衣、
盜中有餘糧、閉門讀書史、窓戶勿已涼。

の數句を著けしを見れば、建封はさばかり冷遇せしにもあらざりしならむ。愈は爲に姑く留まり、符離唯上に居り、やがて月餘に亘りしも、建封が一事を以て委托せしに遇はず、無爲の境、長しへに満足する能はず、秋に及んで、將に辭し去らむとするに至り、建封はいさゝか驚愕の意なき能はず、おはたいしく奏して、之に節度推官の職を授けぬ。

一官僅に至りて、而かもさばかりの者にもあらざりき。知らずや、愈が自ら牒を受くるの明日、使院中に在り、小吏あり、院中の故事節目十餘事を以て、來て愈に示す。其中不可なる者、九月より明年二月の終に至るまで、皆晨に入り夜に歸る、疾病事故あるに非ざれば、輒ち出づるを許さず、當時初めて命を受けしを以て、敢て言はずといひしを、愈は到底無味なる、腰辨當的俗吏たる能はず、その求むるところは、軍府の樞要機密に參與し、平生蘊積するところを實施せむとするにあり、而して建封は唯だ一個趨走の吏として、將た機械的人物として、之を使役せむと欲したるなりき。その初、李翺が公は豪傑の士、唐天下を有してより、數百年、公に如く者なしといへるを聞きて、愈を登庸せし建封は、必ずしも之を見ること淺きにあらずしとするも、愈の求むる所の大なる丈、建封の酬ゆる所は小と見えざるを得ず。况んや、急激は全くその第二の天性となれりしに於てをや、愈は乃ち書を上りて、苟くも是の如くなれば、日に千金の賜を受け、一歳に九たび其官を遷すとも、恩に感ずるは之あらむ、時に以

て天下に稱して知己と曰はるゝは未だしといひて専ら建封を干かさむとせり。

己を勉めずして人を勉めしむるは難きのみ。愈は當時待遇の冷薄と境地の無味とに拘はらず自己の責任を盡すに於ては決して他に批難を受くることなかりき。愈は更に進んで節度使の責を以て建封に説き又そが軍兵の訓練を忽にし徒らに繆を飛ばし田獵以て日を送ることを諫めぬ。詩に文に當時の社會狀勢を回顧し建封を諷諭せしもの一にして足らず。雉帶箭の一首の如きも亦た此種の筆墨たるを疑はず。

原頭火燒靜兀兀野雉畏鷹出復沒將軍欲以巧伏人盤馬彎弓潛不發地形漸窄觀者多雉驚弓滿勁箭加衝人決起百餘人紅翎白鏃隨傾斜將軍仰笑軍吏賀五色離披馬前墮

他は一一擧げず硬骨漢の強項長しへに屈することなく而かも建封未だ擢用する能はざりき。

貞元十五年の冬建封に代りて京師に朝正し十六年の春徐州に還るや

意を決して建封の幕下を辭しぬ。その去るや數日にして建封死し徐軍亂れぬ。而してその之を免れしは前に汴に於けると同じ再度の凶變一も難に罹らず。さながら天の阿護あるに似たるを疑ふ者あり。是に於てか奮然として一倍自信の氣を増せし者なしとせず衛中行が書を飛ばして之を慰めしもの亦た其故なきに非ず。愈は遂に徐を去つて洛陽に再び羈旅の客となれり。さばれ余は此間に於ける愈の悲嘆を以て無理とは思はず。重ねの不運は時勢の非なるを證し况んや前途に於て未だ一點の光明を發見せざるに於てをや。乃ち賦を作りて聊か自ら慰むるのみ。閔已賦は正に此時に成れり。

余悲不及古之人兮伊時勢而則然獨閔閔其曷已兮憑文章以自宣昔顏氏之庶幾兮在隱約而平寬固哲人之細事兮夫子乃嗟嘆其賢惡飲食乎陋巷兮亦足以頤神而保年有至聖而爲之依歸兮又何不自得於艱難曰余昏昏其所類兮望夫人其已遠行舟楫而不識四方兮涉大水之漫漫勤祖先之所貽兮勉汲汲於前修之言雖舉足以蹈道兮衰與我者爲誰衆皆

捨而已用兮、忽自惑其是非、下土茫茫其廣大兮、余一不知其可懷、就水草以休息兮、恆未安而既危、久拳拳其何故兮、亦天命之本宜、惟否泰之相極兮、咸得而一違、君子有失其所兮、小人有得其時、聊固守以靜俟兮、誠不及古之人兮、其焉悲。

才高くして、數ば官を黜けられ、今や依歸するところなきを言ひ、不幸短命なる顔回をすら羨望して、一個の幸福者と呼び倣せり、而して自己の運命の非なるをあきらめ、かの急激の性を收斂し、靜かに俟つところあらむとす、是れ豈に自信の力の凝固せし結果にあらずや。

愈はすでに昔日の愈に非ず、而して社會も今や之に對する待遇を改めむとしたりき、その昔、反響の來るまで、あてどもなく聲を限りに叫ぶを敢てせし勇猛なる息みなき精神は、今や社會をして漸く爲に耳を傾けしめ、愈が名は士人の間に知らるゝに至りき、さきに愈が徐に依る前、洛陽を出でて盟津に至りしとき、河陽軍節度使烏重裔に迎へられむとしたりき、その兆にあらずや、さばれ余をして前言を續け、愈が多年の艱

苦を以て、贏ち得たる心性の鍊磨と進歩とに就て、嘆美の辭を呈せしめよ、愈が洛陽に在りしとき作りし二文、答衛中行書と送孟東野序とは、やがて之が證據を提供して餘あるものなり、前にもいへる如く、衛中行の書は、愈が汴徐二州の亂を逃れし天福を祝せし者にして、中に左の句あるを見る。

命之窮通、官我爲之、若公之德義既優、其汲汲富貴、以救世爲事、當脫於禍亂者、

愈は之に答へて曰く、

凡禍福吉凶來似不在我、惟君子得禍爲不幸、小人得福爲恆、君子得福爲恆、而小人得福爲幸、以其所爲似有以取之也、必曰君子則吉、小人則凶者、不可也、賢不肖存乎己、貴與賤禍與福存乎天、名聲之善惡存乎人、存乎己者、吾將勉之、存乎天存乎人者、吾將任彼而不用吾力、其所守者、豈不約易行哉、

愈は、賢不肖の必ずしも貴賤禍福に一致せざるに想ひ到れり、年少氣銳

のとき善なるものは貴と福とに、悪なるものは賤と禍とに歸すべしと
臆想せり。是に於て加理想と現實との衝突を起し、現在社會の缺陷を感
じ、天道の是非を疑ひしなり。然れども、今や豁然として心に得るところ
あり、所謂貴賤禍福は必ずしも善惡の賞罰となすべからず、且つや道德
は絶對的なるべく、決して他と相對的なるべからざるを悟了せり。嗟乎
浮世の常態はなほ春月の夜の如し、然れども君子は猶ほ白晝の十字街
頭と思惟して身を立て道を行はざるべからず、故に曰く、

若○曰○以○道○德○爲○己○任○窮○通○之○末○接○吾○心○則○可○也○

東野を送る序に至りては、更に偉なる者あり、人の善く知るところ、今必
ずしも擧げず、而して其大意に謂へらく、千古の文章、善く不朽なる者、他
の故なし、人に出づと雖も、却て是れ天が人の口を借りて發出せし者
のみ、人言は故なくして出でず、胸中に鬱積して、その平ならざるは即ち天
の假て以て自ら顯はす所以なりと、故にその末にいたりて曰く、

抑不知天將和其聲而使鳴國家之盛耶、抑將窮餓其身、思愁其心腸、而使

自鳴其不幸耶、三子者之命則懸乎天矣、其在上也、奚以喜、其在下也、奚以
悲、

知るべし、天を得るを以て己が務となし、區々たる人生の得失を以て念
頭に置かざらむを勸奨せしものなるを、若し之を文章結構の上より立
論せむには、林西仲の言、大に取るべきものあり、曰く、先づ物聲より説い
て人言に到り、人言より説いて文辭に到り、歴代より説きて唐朝に到り、
天假善鳴の一語を以て骨となし、幾多千古能文の人を把へて異様に鄭
重し、然る後、東野の身上に落入し、其詩を盛稱して、歴代と相較すること
一番、以爲へらくその天に假らるゝことを知らば、自ら天の命ずるとこ
ろに聽くべしと、また李翺、張籍二人を扯て伴説し、從吾遊の三字を用ひ、
自己を連ねて其中に挿入し、又以爲へらく、此を以て人世の得失、升沈を
視ば、是れ何ぞその胸次に入るゝに足らむやと、その全篇を結び、其序を
製せし所以の意を述ぶるに曰く、

東野之役於南也、有若不釋然者、故吾道其命於天者、以解之、

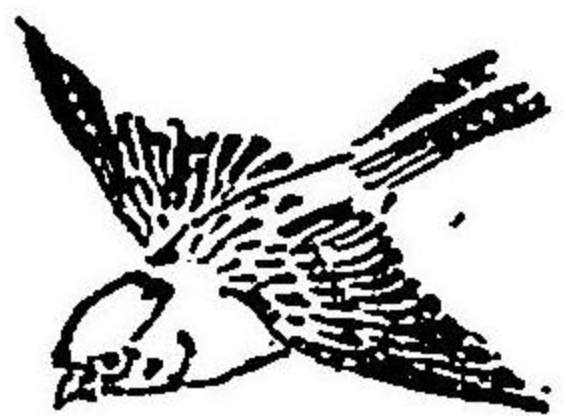
東野の爲に解くは、自ら解く所以のみ。愈は又衛中行に與へし書中に洛陽窮居の状を記して曰く、窮居荒涼、草樹茂密、出づるに驢馬なく、因て人を絶つと、又之に一語を加へて曰く、一室の内、以て自ら娛むものありと、先に所謂確然たる自信、即ち是なるなからむや。

韓愈この時歳正に三十有五、頭半ば自からむとして、身は尚ほ坐下に雖なき老書生なり。余は愈の轍軻不遇の餘りに長かりしを嗟せず、むばおらず、然れども盛衰榮枯自ら期あり。天はあらゆる物體をして長しへに同一状態に在らしむを欲せず、淫雨たとひ旬を經と雖も、余輩は晴天を豫期するに苦しまず、然らば汝何ぞ不幸の後に大幸の相繼ぎ、失意の極に得意の近づき來るを悟らざる。

挫折に遇ひて遂に屈せざる銳志と、匹儔を絶ち唯だ自ら恃むべき能力とあり、之を進むるに忍耐と至誠とを以てす。天下何事か成らざらむ、究極の勝は、余輩の囑望するところにして、之に達するまでの一起一伏は、必ず論せざるべきなり。天の冥罰は、今や下つて愈が上にあり、慘澹なる

不幸不遇の雲霧は、漸く消えて、幸福の光明はその四邊を照破せり。かくて愈は衣冠の身、朝に立つに至れり。

貞元十七年、愈は妻子を携へて京師に出で、その翌十八年春、遂に國子監四門博士に調せられき。是れ愈が闔閭の九門に入りし第一歩にして、今後更に多趣なる生活の起伏の大波動は、將に演出せられむとす。而して余はこゝに數頁を割き、貞元の末政を觀察し、愈が傳記に對して、平行的敘述を試みざるべからず。



第五章 貞元の末政

貞元十一年五月、愈が京師を去りてよりこゝに八年、その汴徐の野に徘徊しつゝありし間、天下の形勢は如何になり行きしか、陸贄の力により一時靜謐に歸したる藩鎮は、その去ると同時に、又もや盪搖し初めぬ。加ふるに外には回紇入寇の兆候を傳ふるものなり、此間に在りて、内廷の大臣は、自黨を植ゆるに汲々たるのみ、裴延齡はすでに陸贄を追ひ、全く憚るところなく、次いで李充、張榜、李錡等を譖し、之を長史に下せり。而してその援引せし同類は、李齊運、王詔、李實、章執誼、章渠、牟の一輩のみ、彼等が趨附門に盈ち、權宰相を傾くるを見れば、その内情察すべきのみ、廷臣の腐敗は、やがて財政の紊亂となり、遂に進奉の弊と宮市の制とを形成するに至れり。

進奉とは何ぞ、初め徳宗奉天窮乏の故を以て、宮に還て以來、尤も意を聚歛に專にし、藩鎮多く進奉を以て恩を市ふ、之を税外の方圓といひ、また

用度の羨餘といふ。その實或は常賦を割き留め、或は百姓に増歛し、或は吏祿を減刻し、或は疎菓を販鬻し、往々にして私に自ら入れ、進む所は糶に什の一二、李兼江西に在て月々に進むところあり、章阜西川に在て日々に進むところあり。その後、常州刺史裴肅進奉を以て、浙東觀察使に遷り、刺史の進奉は肅より始まる。劉贄卒するに及で、判官嚴綬、留務を掌り、府庫を以て進奉しければ、徴されて刑部員外郎となりぬ。幕僚の進奉は綬より始まる。進奉の事たるや、一言以て之を蔽へば、州郡の吏民、財を收め、朝に上り、自ら媚を容るゝなり。

宮市とは何ぞ、宮中の市、外間の物、官吏をして之を主らしめ、隨て其値を給するものなり。この歳、宦官を以て使と爲し、賈人の物を抑へ、復た白壁數百人を兩市及び要關坊間に置き、曲に人の賣る所の物を聞し、但だ宮市と稱すれば、手を斂めて付與し、眞偽復た辨ずべからず。敢て從て來る所を問ひ、また價の高下を論ずるものなし。率ね直百錢なる物を用ひて、人の直數千なる物を買ふ、多くは紅紫染の故衣、敗繒尺寸を裂て之を給

し、仍ほ進奉の門戸及び脚價錢を求め、人物を將て市に詣り、手を空うして歸るものあるに至る。名は宮市といふも、其實は之を奪ふなり。勅使出づる毎に、漿を沽り餅を賣る家と雖も、皆業を撤して、門を閉づ。宮市の事たるや、一言以て之を蔽へば、政府の暴力を以て、低價に民物を徵收するなり。

進奉、宮市、その非理の事たるや、今復た贅せず。堂々たる朝廷、富四海を有し、而かも小人と分毫の利を奪ひ、甚しきは白はに奪うて之を占有するに至る。是れ豈に人君の道ならむや。支那四千歳の歴史中、宮廷の醜かくの如きに至るもの、他にその類例を知らず。

財政紊亂して資力給せず、故に軍馬を養撫するを得ずして、遂に兵權の不振となる。取るところは、唯だ姑息の政策のみ。徳宗の末年、藩鎮の驕傲を極めしは、勢自ら然るところ、而して延齡等の無定見は、遂に事勢をして一層に然かくならしめしなり。唐朝社稷の運命、今や岌々乎として殆し。已にして延齡死せりと雖も、その黨與は依然として内廷に蟠屈し、

根株漸く固く、彼等は相謀りて、遂に陽城をさへ逐へり。内外の危機、日に逼りて、今は唯だ藩鎮の公然叛を爲さざるを幸とするのみ。

かくの如きは、愈が再び京師に入りしときの光景にして、一日も猶豫すべき秋にあらざること、を自覺せしめ、おもふに、愈が始めて京官たる命を受けたる日、沈思黙考、容易に起たざりしなるべし。その一生の經歷よりして、歸納的に論究するも、當時の人心を根底より刷新すること、愈の精神本領なりしが、如し。愈は、老佛に浸潤感溺する、人心を翻して、儒教に歸向せしめむを欲しき。然れども、自ら個々の人に教へて、之を爲すの迂濶と遅緩とに堪へず。故に先づ自ら其例を示し、之を實際に施し、卓々然として一代の木鐸となり、天下をして道德の模型を知らしめんとしたりき。その人材登庸を以て、目下の急務となし、進言數回に及びし如きも、實は如上の理因より來りしものにして、自己と相似たる硬直の士をして、朝に上らしめ、相合して一大勢力を形成し、以て邦家前途の爲に謀らむとしたるならむ。何はともあれ、人材の登庸は、清平の政治を表示し、

清平の政治はやかて國家の安寧を意味するもの固より推稱すべければなり。

國子四門博士となりし韓愈其人が爲さむと欲せし者容易に知るべきのみ。その于襄陽に求むる所ありしは、應さに此時に在るべきか。すでに超遠絶倫の神才あり、識は常に其職に越え、手は其位よりも敏なり。故にその憂慮規畫するところ自ら大にして深からざるを得ず。彼れすでに朝に立つ、豈に黙々として止むべけむや。

貞元十八年一月より五月に至るまで、旱魃虐をなし、天は一滴の甘雨を下さず。畿内は一般に飢饉に苦しみ、憂愁里巷に滿ちぬ。是に於て廟堂の臣僚は互に頭をなやまし、相謀りて、こゝに今年七月吏部の選舉と禮部の貢舉とを罷むるに至れり。以爲へらく、歳かくのごとく、早若し選舉を爲さば、人士こゝに輳集し、爲に京中米價の騰貴をなさむと。その事を謀る一應は理ある如くして、實は然らず。唯だ徒らに人士の輳集と民心の動搖とを以て、かばかり輕々しく停議せば、やかて前例を提供し、續々か

かる場合あるを豫知するに難からず、かくて長しへに仕進の門を閉ぢ、後日の害を爲すは知るべきのみ。精細に事の利害輕重を審查するもの、必ずかくなるべからず。且つ夫れ、人材登庸は國家第一の急務なり。天下一次に凶歳あるは、今更詮なし。國家一日も人材なかるべからず。その昔、宰相に上書し、人材長育の一日も忽にすべからざるを痛論せし韓愈は、この停議の宜しく全力を揮ふべき一大問題たるに氣付きたり。乃ち論今年權停舉選狀を作り、中に君臣の責を論じて曰く、

臣聞古之求雨之詞曰、人失職歟、然則人之失職、足以致旱。今緣旱而停舉、選是使人失職而召災也。臣又聞君者陽也、臣者陰也。獨陽爲旱、獨陰爲水。今者陛下聖明在上、雖堯舜無以加之、而群臣之賢不及千古、又不能盡心於國、與陛下同心、助陛下爲理、有君無臣、是以久旱。以臣之愚、以爲宜求純信之士、骨鯁之臣、憂國如家、忘身奉上者、超其爵位、置在左右、如殷高宗之用傅說、周文王之舉太公、齊桓公之拔甯戚、漢武帝之取公孫弘、清閑之餘、時賜召問、必能輔宣王化、銷殄旱災。

嗚呼是れ明かに正朝諸臣の無能を罵倒し、陰陽六氣の調はざる、有君無臣を以て天子に責め、獨り舉選の以て停むべからざるのみならず、一步を進め、賢を取る、尋常の法に拘束すべからざる意を逗露せしものに非ずや、而して權停舉選の意を尋ぬるに、すでに前にも言ひし如くにして、愈が所謂

道路相傳、皆云以歲之旱、陛下憐憫京師之人、慮其乏食、故權停舉選、以絕其來者、所以省費而足食也。

といふに過ぎざるのみ、乃ち一擧之を槌碎して曰く、

臣伏思之、竊以爲十口之家、益之以一二人、於食未有所貴、今京師之人、不啻百萬、都計舉者、不過五七千人、併其僕僮畜馬、不當京師百分之一、以十口之家計之、誠未爲有所損益、又今年雖旱、去歲大豐、商賈之家、必有儲蓄、舉選者皆齊持費用、以有易無、未見其弊。

當時廟堂の上、國是を議するもの、舉選を停むるを以て、唯一救荒の奇策となす、その朝に立つ伎倆は料るべきのみ、戸位素餐の徒、一も用ふるに

足るものなきなり、愈は固より之を熟知せり、是に於てか、臣雖非朝官、月受俸錢、歲受祿粟、苟有所知、不敢不言、といへる意氣を以て、前言を爲すを敢てせしのみ、而してその望むところは、獨り眼前の權停を撤するの一事に止まらざることは、讀者容易に之を推及せむ、然れども、夏蟲は終に氷を説くべからず、この遠大の識は、決して區々たる近眼者流の領會し得べきどころに非ず、愈は光順門に詣り、狀を奉じ、命を待ちしと雖も、遂に其效なくして終れり。

愈が此狀は朝臣の拒むところなりしと雖も、その之によりて技能と才力とを認識されしは、殆んど争ふべからず、かくして貞元十九年にいたり、國學の微位よりして、一躍して監察御史の顯位に上れり、その初、京華に旅食せしこと十年、貧窮落魄を嗟せしとき、寧ろ今日あるを期せむや、監察御史の職たるや、固よりさばかりの榮職に非ずとするも、言責を以て任ずる點よりいへば、亦た重要な地位ならざるにもあらず、硬直愛國の士、愈の如きものにありては、先づ適任たるを疑はず、その活動は愈よ

盛にして、遂に小人との衝突を免れず、地位乍ち危くして、一朝貶謫の禍を得たる者亦た其故なしとせず、而して是れ愈が人の爲りの活潑偉大なるを明白に證せし者に外ならず。

内廷の腐敗は、日を迫うて増加し、惡弊百出、而かも一人の之を斥言するものなし。進奉といひ、宮市といひ、その害毒の異常なるは、前にすでに言へり。愈や今監察の重職に在り、固より言論の責あるもの、機會一たび到れば、必ず發せむのみ、而してこの貞元十九年も、前年に引き續いての凶歲なりき、關中旱饑、人死して相枕籍し、吏刻にして怨を取る。愈が之を賦せし數句、以てその一斑を窺ひ知るべし。

是年京師旱、田畝少所收、上憐民無食、征賦半已休、有司恤經費、未免煩徵求、富者已云急、貧者固已流、傳聞閭里間、赤子棄渠溝、持男易斗粟、掉臂莫肯酬、我時出衢路、餓者何其稠、親逢道邊死、佇立久嗷嗷、歸舍不能食、有如魚中鉤。

時に一報あり、曰く進奉の風の上下を浸潤せるや、京兆尹李實も亦た之

に倣ひ、天子すでに半ば征賦を罷めしにも拘はらず、強いて徵求して、進奉に給せりと。聖勅税を寛にし、權臣却て之を徵し、以て自ら媚びむとす。愈はその慘虐を思ふて、一腔忽ち悲憤の熱血を湧かし、ついに監察御史の同席に列坐し、當代の才人と稱せられし柳宗元、劉禹錫の諸人が、何故に口を緘し、周廟の金人を學ぶかを怪しめり、而してその悲憤の念は、遂に之を消遣するに由なく、同官張畧、李方叔等を誘ふて、御史臺上論天旱人饑狀と題する一篇の封書を草するに至れり。その書たるや、劈頭第一、災荒の甚しき、今や其極に達し、決して他年に比すべからざる由を述べて、右臣伏以今年已來、京畿諸縣、夏逢亢旱、秋又早霜、田種所收、十不存一、といひ、次に蠲免の事を説いて、

陛下恩臨慈母、仁過春陽、租賦之間、例皆蠲免、所徵至少、所放至多、といひ、已にかくの如しと雖も、その方法宜しきを得ず、爲に民情上に達せざる狀を叙して、

上恩雖弘、下困猶甚、至聞有棄子、逐妻、以求口食、折屋伐樹、以納稅錢、寒餓

道途蹉跎溝壑有者皆已輸納無者徒被追徵臣愚以為此皆群臣之所未言陛下之所未知也

といひ宸聰若し之を容るれば施すべき策なきに非ざるを述べて

臣竊見陛下憐見黎元同於赤子至或犯法當戮猶且寬而宥之况此無辜之人豈有知而不救又京師者四方之腹心國家之根本其百姓實宜倍加憂恤今瑞雪頻降來年必豐急之則得少而人傷緩之則事存而利遠

といひ更に百尺竿頭の一步を進め李實進奉の未納に係る者は斷じて應すべきを極言す

伏乞特勅京兆府應今年稅錢及草粟等在百姓腹内徵未得者玆且停徵客至來年蠶麥庶得少有存立

條理井然として一絲紊れず狀は奉られ善儒の宰相杜佑は之を納れしと雖も他の佞幸諸臣は憤怨して措かず讒構百方遂に愈及び張署李方叔等をして朝を去るの止むを得ざるに至らしめきかくて愈は陽山の令に貶せられ又もや藩鎮隸下の一小官となれり

中使愈が家に臨みその行を促す一場の悲劇は端なくもこゝに演出されたり江陵途中寄翰林三學士の詩中次の數句は最も悲痛の文字を推すべく千歳の下人をして一掬の涙を濺ぐを禁せざらしむ

中使臨門遣頃刻不得留病妹臥牀褥分知隔明幽悲啼乞就別百請不領頭弱妻抱稚子出拜忌慙羞

路先づ藍田に依る窮冬十二月雪華乍ち到る遷客の離愁馬鞍を壓し孤苦寥丁その狀想ふべきのみ

初從藍田入顧盼勞頓時天晦大雪淚目苦朦矜峻塗拖長冰直上若懸溜寒衣步推馬顛蹶退且復蒼黃忘遐隔所矚纒左右杉篁陀蒲蘇泉灑撒介胃專心意平道脫險逾避臭

南山の奇景はさすがに其心をして幾分爽快ならしめつらむ前程行路なほ遼濶その間驚心駭魄の者亦た無しとせず江陵道中の詩前に引抄せし一段之を承くるに下の數句を以てしたり

蹏僂不廻顧行行詣連州朝爲青雲士暮作白首囚商山季冬月冰凍絕行

轉○春○風○洞○庭○浪○出○沒○驚○孤○舟○

その所任の地陽山は如何にこの窮人の眼に映せしか

酸寒何足道、隨事生疥癩、遠地觸途異、吏民似猿猴、生瘳多、忿恨辭、舌紛嘲、
咽、白日屋簷下、雙鳴、鸛、鶴、有蛇類、兩首有、蠱、群飛、遊窮冬、或搖扇、盛夏或、
重裘、颯起、最可畏、旬、哮喘、籛、陵丘、雷霆助、光怪、氣象、難比、伴、癘、疫、忽、潛、進、十家、
無一、瘞、猶、嫌、動、置、毒、對、案、輒、懷、愁、

また送區冊序に曰く

陽山天下之窮處也、陸有丘陵之險、虎豹之虞、江流悍急、橫波之石、廉利、
劍戟、舟上下、失勢、破碎、淪溺者、往往有之、縣郭無居民、官無丞尉、夾江荒茅、
簞竹之間、小吏十餘家、皆鳥言夷面、始至言語不通、畫地爲字、然後可告、以、
出租稅奉期約、是以賓客游從之士、無所爲而至、愈待罪於斯、且半感矣、
幽荒險怪の光景を叙し得て、人物見るが如く、文に畫意あり、その地夷獠、
に近くもとより人の居るべきところに非ず、あらゆる不快は、集沖して、
之を拔拂するに由なし、少壯の意氣、今や衰ふるに垂むとして、僅に存せ

り、縣齋有懷の一首前半述ぶるところは、確かに此間の消息を傳へしものなり。

少小尙奇偉、平生足悲陀、猶嫌子夏儒、肯學樊遲稼、親皇稷、文章、
謝、澀、纏、起、江、湖、緩、珮、雜、蘭、麝、悠、悠、指、長、道、去、策、高、駕、誰、爲、傾、國、媒、自、許、
城、價、初、隨、計、吏、貢、屢、入、澤、宮、射、雖、免、十、上、勞、何、能、一、戰、霸、人、情、忌、殊、異、世、
多、權、詐、蹉、跎、顏、途、低、摧、折、氣、愈、下、治、長、信、非、罪、侯、生、或、遭、罵、懷、書、出、皇、都、
街、
淚、渡、清、瀾、身、將、老、寂、寞、志、欲、死、閑、暇、朝、食、不、盈、腸、冬、衣、纔、掩、幣、
同、冠、峽、邊、春、色、漸、漸、至、
消、愛、を、爲、せ、し、と、雖、も、や、が、て、一、た、び、身、世、の、浮、沈、を、回、憶、す、る、と、き、嘆、嗟、
泣、を、禁、ず、る、能、は、ず、

南方二月半、春物亦已少、維舟山水間、晨坐聽百鳥、宿雲尙含姿、朝日忽升、
曉、鷓、鴒、旅、感、和、鳴、因、拘、念、輕、矯、潏、潏、淚、久、迸、詰、曲、思、增、繞、行、矣、且、無、然、葢、棺、事、
乃了、

この間楊儀之が湖南支使を以て來るあり、その別るゝや、賦を作りて之

に與へ、親朋の得がたくして、聚散定むべからざるを咏嘆せり。別知賦と題せるもの、即ち是なり。

余取友於天下、將歲行之兩周、下何深之不即、上何高之不求、紛擾擾其既多、咸喜能而好修、寧安顯而獨裕、顧阨窮而共愁、惟知心之難將、斯百一而爲收、歲癸未而遷逐、侶蟲蛇於海陬、遇夫人之來使、闢公館而羅羞、索微言於亂志、發孤笑於群愛、物何深而不鏡、理何隱而不抽、始參差以異序、卒爛熳而同流、何此歎之不可恃、遂駕馬而廻轡、山嶽嶽其相軋、樹蒼蒼其相擗、雨浪浪其不止、雲浩浩其常浮、知來者之不可以數、哀去此而無由倚、郭郭而掩涕、空盡日以遲留。

韓愈はすでに陽山の令に貶せられたり、瘞者終身起つを忘れず、愈は到底こゝに終るを欲せざるのみならず、時勢も亦た之を要するを禁せざるなり。余は次に例に由り、愈が京を去りしより後、廟堂の變に就いて、語る所あらむ。

愈が御史を去りし時に當りて、廷臣中に微位より起り内外政治の改革

を試みむとする野心家出でたり、王休玉叔文の一黨是なり。この事に就いて、余さきに柳宗元の書中に詳載するところありしと雖も、事實を主とせしを以て、頗る紛糾に失せし感なきに非ず。故に此には更に概括的に簡明なる記述を試みむとす。二王は固より賤人のみ、休は書を善くし、叔文は書を善くせしを以て、俱に東宮に出入せり。余は二王が當時無能の廷臣中に於て、確に敏腕、險棘の策士と爲すべかりしを知る而して、歴史はその計謀、書策の秘密的なるを以て、稱して詭譎多詐の士となすと雖も、當時腐敗の極點に達したる内廷に在りて、微官卑職より興りて之が改革を爲さむと欲せば、自ら多少の權謀を用ひざるを得ず。彼等はその目的を達せむが爲には、如何に下劣卑屈なる手段とはいへ、之を取るに怯ならざりき。

當時改革を要すべきもの、之を五項に歸すべし、曰く内廷の腐敗、曰く府庫の缺乏、曰く財政の困難、曰く藩鎮の強暴、曰く兵權の宦官に歸せむとする傾向、之を救済するには、他に奇策あらず、唯だ人材を登庸して、内廷

を振肅し、敏腕の士を撰拔して、財政を整理し、府庫をして漸次に充豊ならしめ、次いで兵權を宦官の手より奪ひ回し、之を名將に與へ、然る後師を出だし、強暴なる藩鎮を制し、以て再び唐祚を昌ならしむべきのみ、敏慧なる二王は、固より之を知れり。その之を成さむ爲には、上天子の信任を得、下朝野の名士の心を收攬せざるべからず。二王はあらゆる手段を取り、先づ剛愎自ら用ひ、加ふるに行く先の餘り長からざる徳宗を捨て、聰明なる太子順宗に頼りぬ、結托して相盟ひしもの、翰林學士には章執誼あり、監察御史には韓泰、柳宗元、劉禹錫あり、他に陸淳、呂溫、李景儉、韓曄あり、之に凌準、程异を加へ、更に大に羽翼を張らむとす。準備はすでに成れり、而してその待つものは時のみ。

すでにして急報宮禁より下り、二王の一黨均しく額手して相慶せり。他なし、徳宗の病革りしこと、是なり。こゝに於てか、臣先づ入て詔と稱し、叔文を召し、翰林の中に坐し、事を決せしめぬ。その徳宗崩じて順宗位に即くや、叔文は直に帝に勸めて、臣に顯官を與へ、先づ自己の重きを爲し、そ

の權勢を形成したりき。之に次いで、金吾將軍范希朝を以て、左右神策諸行營の節度使となし、韓泰を以てその行軍司馬となさむと企て、なほ宦官の兵柄を專にするを制せむが爲に、章執誼を引いて相となさむと圖れり、而して之を遂ぐるには、寵妃幸臣に依附することすら爲せり。

その計畫は、すべて成功し、章執誼は同平章事となり、范希朝は左右神策行營節度使となり、之に次いで杜佑は度支等使となれり。是に於てか、立政、財務、兵備の三權は、一黨の掌握中にあり、活潑なる行動は、誰にも憚る所なく、相續いて始まり、先づ帝に奏し、天下に大赦し、前朝逐臣の罪を軽くせり。韓愈も自らその餘澤を被り、陽山の令より江陵府の法曹參軍に榮轉しぬ。蓋しその初、愈と親密なりし劉柳二人は、最も二王の依頼せし者なれば、愈も早晚召されて朝に還るべかりき。二王は更に諸種の逋負を免除し、貞元の末政、前朝の大弊たりし進奉と宮市とを全廢したり。なほ之に次いで、無辜の逐臣中、最も天下の重望を負へりし陸贄、陽城の二人を京師に召喚せしが、不幸なるかな、揃ひも揃ふて、途中に病歿したり。

念が江陵の法曹參軍となるや、先づ命を彬に俟てり。時恰かも八月十五夜に當り、清光萬里、秋色正に高く、多少の感慨なき能はず加ふるに、意氣の稍昂りし者あり。乃ち七古一篇を賦して、之を同時赦歸の人たる張巽に似して曰く、

織雲四卷天無河、清風吹空月舒波。沙平水息聲影絕、一盃相屬君當歌。君歌聲酸辭且苦、不能聽終淚如雨。洞庭連天九疑高、蛟龍出沒猩貍號。十生九死到官所、幽居默默如藏逃。下牀畏蛇食畏藥、海氣濕螿熏腥臊。昨者州前槌大鼓、嗣皇繼聖登夔皋。赦書一日行萬里、罪從大辟皆除死。遷者近廻流者還、滌瑕蕩垢朝清班。州家申名使家抑、坎軻祗得移荆蠻。判司卑臣不堪說、未免捶楚塵埃間。同時輩流多上道、天路幽險難追攀。君歌且休聽我歌、我歌今與君殊科。一年明月今宵多、人生由命非由他。有酒不飲奈朝何、前に數ば引抄せし江陵途中寄三學士の五古は、この際作りし者にして、左の一段の意は、榮遷を喜ぶよりも、官海風波悪く、滿腹の經綸之を施す

に由なく、今後なほ幾多の挫折に遇ふべきを憂ふるに似たる者あり。懸知失事勢、恐自罹置罟。湘水清且急、涼風日脩脩。胡爲首歸路、旅泊尚夷猶。

衡州を過ぎて、南嶽に登り、高歌一曲、能く神靈を感通し、衆峰粲然、紫蓋翠桂、森然として排列する壯觀を恣にし、响嘯の古碑、奇奧讀み難きを疑猜して止まず、やがて潭州に入り、湘西の兩寺に遊び、獨宿して題あり、招提の境、閑寂たる夜半の情、まことに凄絶なるものあり、覺えず、深省を發し、兼ねて又た自己が飄零に想ひ到り、殆んど睫を塞がず、

幸逢車馬歸、獨宿門不掩。山樓黑無月、漁火燦星點。夜風一河喧、杉枌屢磨颯。猶疑在波濤、恍恍夢成寤。靜思屈原沈、遠憶賈誼貶。椒蘭爭妬忌、絳灌共譏諍。誰令悲生腸、坐使淚盈臉。翻飛乏羽翼、指摘困瑕玷。珥貂藩維重、政化類分陝。禮賢道何優、奉已事苦險。大厦棟方隆、巨川楫行剡。經營誠少暇、游宴固已歎。旅程愧淹留、徂歲嗟荏苒。平生每多感、柔翰遇頓染。展轉嶺嶺鳴曙燈、青歌歌。

洞庭風に阻まれて詩ありまた張器に贈る遠客の離憂寫し出して餘蘊なきに似たり。

十月陰氣盛北風無時休若茫洞庭岸與子維雙舟霧雨晦爭泄波濤怒相投犬雞斷四聽糧絕誰與謀相去不容步險如礙山丘清談可以飽夢想接無由男女喧左右飢啼但啾啾非懷此陸興何用勝羈愁雲外有白日寒光自悠悠能令暫開霽過是吾無求

岳陽樓に上れば朝旭輝煥飛廉その威を收め水天空濶十萬八千頃たい微瀾の殺紋を織るあるのみ知らず胸中幾雲夢を呑みたりけむ然れども愈は子美浩然に次ぐべき壯句を哦せずこゝに司直資瘁と別れをなし五古一篇の末に於て自己の希望を述べ軒冕の榮となすに足らずいつかは自然に反る日あらむことを期せり愈は果して衰へたるか否一段の躊躇は姑らく此言を吐かしめしのみその胸中豈に一日も社稷を忘れむや

庶從今日後粗識得與夷事多改前好趣有獲新尙誓歸十畝田不取萬乘

和○君○知○靈○織○稚○子○已○能○前○行○當○掛○其○冠○生○死○君○一○訪○

江陵の景は幾分愈が心を慰むることありけむ李花杏花の數詩は明に之を證せり而して感春四首の中に三盃取醉不復論一生長恨奈何許といひ平明出門暮歸舍酪酏馬上知爲誰といひ百年未滿不得死且可勸買拋青春といひしを見れば春時隨處に出游して靜に年華を憐み黃鳥旗亭の酒に懷を放ちし者たるを疑はず愈は此地に來りて唯だ陽山貶謫の苦を洗ひしのみ未だ他に及ぶことあらざりしが如し。

筆を轉じて更に二王に就て敘述を續がしめよ。

二王の動作は遂に峻急激烈の誦を免る能はざりきその昔陸贄が一代の大賢を以て十年間に猶ほ且つ爲す能はざりし者を僅々數月の間に完成せむと企てしに至りては獨り性急たるのみならず寧ろ狂暴に過ぐる者なからむや加ふるに二王は人を見て收むる明識を缺きたり故を以て能く賈耽鄭珣等の異論者を追ひ盡せしと雖も却つて太子憲

宗のいやまされる聰明を察し得ず、また杜黄裳が宰相の器あるを擧ぐる能はざりき故に、黨中に頑冥無識の徒あり、さながら獅子身中の蟲の如く、自ら其身を殘害すべきを知らず、やがて自ら果敢なき末路を見るに至れり。

宮市の廢と進奉の禁とにより、忽ち甚しき財政の困難を感じたる故を以て、宮廷は先づ反對を試みぬ。兵權を褫奪せられ、自ら位地の危険を覺えし故を以て、宦官は次いで抗立を爲せり。この兩者は、自然の勢相結び、一大打撃を以て報ゆべき日あらむことを翹望せり。すでにして、果然敵は自黨の中より分裂して起れり。二王が引いて相となしたる章執誼は、内に叔文の言に従ふと雖も、外はその黨與に非ざるを公示せむが爲に、時々故らに異論を爲し、又密かに叔文に謝しぬ。然れども、阻格に過ぐる極、叔文自ら心に平なる能はず、遂に全く仇視するに至れり。是に於てか、宮廷と宦官とは相謀り、機失ふべからずと爲し、奏して叔文が翰林の職を奪へり。後に王休の疏によりて、再び翰林に入ること許されたりと

雖もその權勢のほどは決して前に似るべくもあらざりき。

かくて杜黄裳は、章執誼の推薦によりて、漸く勢を得、二王黨外の英才は、續々其職に就き、廟堂の上に立てり。やがて此等の人物と宮廷宦官の力とは、二王の一輩をして、全く勢力を失ふに至らしめ、其後、章阜、裴均、嚴綬等、諸節度使が太子の監國を請ひ、兼ねて叔文等の過惡を奏聞し、群小を逐ひ、政人主より出でむことを求むるや、勢力全く地に墜ち、憲宗の位に即くや、實は己と容れざりし怨恨をも加へて、二王は貶せられ、次いで死を賜はり、劉柳以下八司馬の貶謫となりて、一先づ局を結びつさしもの。二王は、徒らに成敗の跡に就いて、是非せられ、長しへに支那歴史中の誤解され易き一大疑問を殘せしに過ぎざりき。

さばれ、二王の精神は、決して亡びずよしや、親しく手を下せし改革は、失敗に歸せしと雖も、爲に少からず善き結果を促したりき。財務の紊亂、兵權の分裂、施政の頽墜、藩鎮の強暴等、たどひ、二王によりて、少しく矯正整理されしと雖も、猶ほ未だしきのみ、英明なる憲宗は、身を以て新しき改

革に委し、人主の特権を以て、二王が規畫せしと同一の者を完成せむとしたりき。げに憲宗はその初に於ては、一代中興の英主なりき。剛明果斷の資を以て、僭叛を平げむと志し、能く忠謀を用ひて、群議に惑はず、卒に成功を收めて、唐の威令、復た振ふに幾き者さへありき。

憲宗即位の四月、元を元和と改め、萬機を親らし、清明の治を成さむとし、先づ杜黃裳に聽いて、蜀を討ち、次いで又賢者を擧げたり。これによりて、元稹、白居易の輩、新に朝に入り、韓愈も亦た召されて、權知國子博士となり、愈は二王が朝に立ちしとき、劉柳等諸友が、その親任を得て、大政に參與するを聞きしや、或は羨望に堪へず、その援引を得て、一日も早く京に還るとを願ひしならむ。然れども、今や劉柳は、貶謫せられ、己は聰明なる人主の爲に召還せられ、喜愛地を換へ、順逆境を變ず、豈に多少の感慨なきを得むや。永貞行一篇の詩は、劉禹錫が貶謫の次に、江陵に邂逅して作りし者と稱せらる。故を以て、微言婉辭、劉柳諸人の爲に痛惜するの意、昭昭として見るべく、せめては世俗の謬解を辯せむとしたる跡は、歴々

として指摘すべし。坦夷義を尙び、朋友を待つに始終ある、その襟懷の澀落、千歳の下、猶ほ且つ欽慕するに堪へたり。



第六章 淮西の征討

愈はすでに召還されしと雖も、憲宗は未だ直に之を美官に任用すること能はざりき。而して愈の歳すでに不惑に近く、人事の艱苦を嘗め盡し、自己の目的を達せむ爲には、心にもあらぬ事を爲さざるを得ざるが浮世の常なるを知悉し、唯だ眞摯剛直の性を以て、之を爲すを欲せず、己むなく知己に逢はむを豫期し、ひたすら世の耳目を避け、獨り沈黙を守り、故らに奇を爲さむとはせざりき。すでに元和二年を以て、國子博士となり、三年東都に分教たるや、憲宗の英明を頌して、元和聖德詩を賦し、その序中に記して、臣蒙被恩澤、日與群臣序立紫宸陛下、親望穆穆之光といひ、詩中には帝が親ら皇天上帝を郊丘に祀り、宮に還りて天下の囚人を大赦したる盛典を描きて、

天兵四羅、旂常婀娜、駕龍十二、奧奧雅雅、宵昇於丘、奠璧獻罍、衆樂驚作、轟
厖融冶、紫焰嘘呵、高靈下墮、群星從坐、錯落侈侈、日君月妃、煥赫嫋嫋、瀆鬼

溟鴻、嶽祗崇峩、猷沃羶鄉、產祥降嘏、風風應奏、舒翼自拊、赤麟黃龍、逶迤結
糾、鄉士庶人、黃童白叟、踴躍歡呀、失喜噎嘔、乾清坤夷、境落塞舉、

と歌ひ、更に極力帝徳を賛して曰く、

皇帝神聖、通達今古、聰聰視明、一似堯禹、生知法式、動得理所、天錫皇帝、爲
天下主、并包帝養、無異細鉅、億載萬年、敢有違者、
皇帝儉勤、鹽澁陶瓦、斥遣浮華、好此綿紵、救戒四方、侈則有咎、天錫皇帝、多
麥與黍、無石水旱、耗於雀鼠、億載萬年、有富無窳、
皇帝正直、別白善否、擅命而狂、既翦既去、盡逐群姦、靡有遺侶、天錫皇帝、麗
臣碩輔、博問遐覲、以置左右、億載萬年、無敢侮余、
皇帝大孝、慈祥悌友、怡怡愉愉、奉太皇后、天錫皇帝、與天齊壽、登茲太平、無
忘永久、億載萬年、爲父爲母、

愈は決して諛辭をなすものに非ず、當初の憲宗は正に之に當るに足る者ありしや疑ふべからず。而して更に喜侯喜至、贈張籍張徹の詩中に、今者誠自幸、所懷無一缺といへる如き、之を一見すれば、憲宗たるもの善く

愈が理想に適合し、分に安んじて自ら満足せしに似たるものあり、然れども弊事未だ全く除かず、愈は前にいひし如き理由を以て、姑らく是の如き觀をなせしのみ。

元和四年に分司都官となり、五年河南令となり、六年職方員外郎に遷りぬ。愈はその間、常に前の如くして、特に爲すことなく、寄廬同詩、雙鳥詩、石鼓歌、月蝕詩等の長篇を成せしを見れば、悠々自ら養ひ、吟哦日を消し、徐かに機を待ちしものたるを知るべし。さばれ、愈が急性は終に抑ゆべからざる者あり、是に於て、元和七年、柳洄の事に坐し、復た博士に下遷しき。初め華陰令、柳洄卒あり、前の刺史、之を劾奏して、未だ報せず、而して刺史罷めらるゝに會し、洄は百姓を諷して、軍糧役直を遮り、索めしめぬ。後の刺史、之を惡み、其獄を按じて、洄を房州司馬に貶したり。時に愈、職方に赴き、華を過ぎ、之を見て、以爲へらく、刺史陰かに相黨すと、上疏して之を治す。既にして、御史覆問、洄が賊を得、再び之を封溪尉に貶し、愈も亦た言ふところ正しからざりしを以て、坐して、この貶遷のことありしなりき。然

れども、こは全くその罪に非ず、滿朝の倭幸、その剛直を思ひしが、故に然るもの加ふるに、一代の文名は、小人の妬猜を惹き、爲に進路を妨げられしに外ならずのみ。愈時に四十四歳、幼時よりの艱苦の爲に、年にも似ず、早く老衰に瀕せしに似たる者あり。釋言の中に、自ら慷慨して曰く、

夫傲雖凶德、必有恃而敢行、愈之族親鮮少、無叛聯之勢、於今不善交人、無相先相死之友于朝、無宿資蓄貨、以釣聲勢、弱於才而腐於力、不能奔走乘機抵讎、以要權利、夫何恃而傲、

剛腸硬骨の男子、此に至りて、意氣消沈の感なきに非ず、而して其友崔群に與へし書中述ぶるところ、

僕無以自全活者、從一官于此、轉困窮甚、自放于伊穎之上、當亦得之、近者尤衰憊、左車第二牙無故動搖、脫去、目視昏花、尋常之間、便不分顏色、兩鬢半白、頭髮五分亦白、其一鬢亦有一莖、兩莖白者、僕家不幸、諸父諸兄皆康疆、早世如僕者、又可以圖于久長哉、

嗚呼世途の險巖と相闘ふ、勇者も、亦た身体の衰弱いつしか、此に到るを

免かれざるか。さばれ、一片稜夾の傲骨と凛々たる精神とは猶ほ儼乎として箇中におり、毫も消磨耗盡することなきなり。釋言に曰く、

爲御史得罪德宗朝、同遷於南者凡三人、獨愈爲先收用、相國之賜大矣、百官之進見於相國者、或立語以退、而愈辱賜坐語、相國之禮過矣、四海九州之人、自百官已下、欲以其業徹相國左右者多矣、皆憚而莫之敢、獨愈辱先索、相國之知至矣、賜之大禮之過、知之至、是三者於敵以下受之、宜何以報、况在天子之宰乎、人莫不自知、凡適於其用之謂才、堪其事之謂力、愈於二者、雖日勉焉而不近、束帶執笏、立士大夫之行、不見斥以不肖者、幸矣、其敢傲於言乎、

衆口は金を鑠す、世に懼るべきもの、讒豎の舌に若くものあらず、市に三虎を致し、晉參の母をして罅を投し、牆を越えて走ることすら爲さしむ、愈自ら之を説いて曰く、

市有虎、聽者庸也、晉參殺人、以愛惑聰也、若伯之傷亂世是逢也、今三賢方

與天子謀、所以施政於天下、而階太平之治、聽聰而視明、公正而致大、夫聰明則聽視不惑、公正則不遜、讒邪致大、則有以容、而思彼讒人者、孰敢進而爲讒哉、雖進而爲之、亦莫之聽矣、我何懼而慎、

丈夫自ら恃むところなかるべからず、その恃むところを以て敗るゝは天のみ、韓愈の心情、誠に贊するに堪へたり、今の世に方り、便佞利口、巧に他の意を逢合し、其尾に附して、榮祿を得むとするもの、紛々として、何ぞ多きや、かくの如きは、紅樓媚を賣るところ、纖弱なる女子にすら及ばず、余は誓て、此輩と伍せざらむなり、

愈が職方員外郎より再び博士に下さるゝや、抑鬱の餘、有名なる進學解一篇の文は著はされぬ、その敘述の方法たるや、先づ他人の口より自己が現時の不遇を言はしめ、却て虚心平氣を以て之を辯ずるにあり、長歌の哀は、慟哭より甚しき者なきに非ず、余はこゝに愈が心中無限の悲痛ありしを認めざるべからず、その境遇を説くに曰く、

公不見信于人、私不見助于友、踈前寔後、動輒得咎、暫爲御史、遂竄南彘、三

年博士冗不見治、命與仇謀、取敗幾時、冬暖而見號寒、年豐而妻啼饑、頭童齒豁、竟死何裨、

而して自ら之を辯疏して曰く、

學雖勤而不由其統、言雖多而不要其中、文雖奇而不濟于用、行雖修而不顯于衆、猶且月費俸錢、歲糜廩粟、子不知耕、婦不知織、乘馬從徒、安坐而食、雖常途之役、復窺陳編、以盜竊然而聖主不加誅、宰臣不見斥、茲非其幸歟、徹頭徹尾、これ反語のみ、博士の左遷もとより小挫折に過ぎずとするも、老境漸く促し、日暮れて路遠きの感に禁ぜざる折しも、豈にかくならずるを得むや、而して愈はこの一文を以て、新たに有力なる知己を得たりき、

其人は誰ぞ、當時の宰相たりし武文衡、李吉甫、李絳の三人、即ち是なり、三子此文を見て、愈が才を奇なりとし、遂に擧げて比部郎中史館修撰たらしめたり、蓋し三子は當時また文名あり、兼て氣節を以て稱せられしもの故に、自然に臭味を同うし、和吸引せし者ならむのみ、その除官制に曰

大學博士韓愈、學術精博、文力雄健、立詞措意、有班馬之風、求之一時、甚不易得、加以性方道直、介然有守、不交勢利、自致名望、可使執簡、列爲史官、記事書法、必無所苟、仍遷郎位、用示褒升、

愈入りて史官となりぬ、然れども、固より翰を染め、筆を走らすに意なかりき、すでに幾多の禍に遭ひし者、またその累を爲さむを、性れたればなるべし、或は書を贈りて、その筆削を勸むるものあり、愈答へていふ、古より史を爲る者、人責あらざれば、必ず天災あり、と、柳宗元が之に對して反駁せし一書は、人の善く誦するところ、その

退之不宜一日在館下、安有探宰相意、以爲苟以史筆、榮一韓退之邪、若果爾、退之豈虛受宰相榮已、而冒居館下、近密地、食奉養、役使掌故、利紙筆、爲私書、以供子弟費、古之志道者、不宜若是、

といふ如きは、委曲剴切を極めしものと爲すべく、更にその結末

今學如退之、辭如退之、好言論如退之、慷慨自謂正直行焉、如退之、猶所

言若○是○唐○之○史○述○其○卒○無○可○託○乎○明○天○子○賢○宰○相○得○史○才○如○此○而○又○不○果○甚○
可○痛○哉○退○之○宜○更○思○可○爲○速○爲○果○卒○以○恐○懼○不○敢○則○一○日○可○引○去○又○何○以○云○
行○且○謀○也○

といふに至りては、責め得て逃避すべからざらしむ。愈は流石に之に對して、辯ずることを爲さず。やがて勉めて毫を執り、順宗實錄一部の撰を爲しにき。然れども、氣が乘らぬ厭々の作なりければ、固よりさばかりの者たるべき謂なく、繁簡當らず、事を叙して取舍に拙く、遂に平生の手筆に似ず。張中丞傳後に見たる手腕は、こゝに求むべくもあらざりき。蓋したゞ責を塞ぎしまでのことにして、自らも他に囑望しつゝ、史官の職たゞ一時の腰掛となせしが故ならむのみ。

愈はすでに宰臣輩の知る所となれり、かの李絳に、元和の魏徵といへる稱ありしを見れば、正にその頼る所を得たりし者と謂はざるべからず。而して愈の友たりし崔群も、亦た擧げられて翰林に在り。その他り賢者漸く其勢を得むとす。愈は今や、生來はむめての順境に在りき。

かくて程なく崔群は中書舍人に進み、愈は考功郎中知制誥となり。こゝに復たその同僚中に新しき一知己裴度を見出しつ。この後、運命を共にすべく定まりたりき。未だ幾ならずして、愈は知制誥より進んで中書舍人となれり。唐代の宰相は多く中書舍人より登りしを知る者、愈の勢力の漸く大に、位地の漸く高きを推及し得べからむ。この時に方りて、愈が經綸の才を發揮せし者は、淮西處理の一策にあり。請ふ余をして筆を轉じ、淮西に就いて語るところあらしめよ。

淮西とは、即ち淮河の西、吳元濟の屯する所を指す者にして、藩鎮の中のすぐりて大なる者なり。初め憲宗の位に即くや、之を輔佐するもの、其人を得たりければ、施すところの政策、一一事理に適合し、所謂元和清明の治、こゝに勃興し來れり。而して憲宗は銳意命に抗する藩鎮の征討に力を盡し、一罪あるもの之を征して、假借する所なかりければ、さしも専横なりし藩鎮の多くも、爲に色を失ひ、或は降を納れ、或は獻するに地を以てするに至りき。而して獨り淮西の三鎮は、自ら恃んで、敢て歸降せず。

剩つさへ、數ば官軍を憐したりき。

かくの如くして、淮西の征討、久しく功を奏せず。朝議はこゝに二分し、一は飽くまで淮西を討ぜむとし、一はしばらく之を赦して、時期を待たむとしたりき。前者は今に之を赦せば、廟堂の威信地に墜つべしと主張し、後者は兵すでに疲れ、軍費漸く缺亡せしを以て、其辭となす。一見するところ、孰れも其理なきに非ず。然れども、熟ら事實の真相を洞察するに、淮西は遂に討ぜざるべからず。蓋しその強傲制し難き所以のものは、三鎮竊に相救援するに因る者にして、李師道、王承宗の如きは、在廷の諸臣に賄ひて、實施せむとする政策を後より制肘せり。故に、今姑らく其罪を赦さむか、堂々たる朝威行はれざるは固より言ふを須るず。且つ、や今後到底之を征服するの期、長しへにあらざらむ。故を以て、韓愈をはじめ、裴度、武元衡等、廟堂骨鯁の臣は、大抵之が征討の主張者にして、銳意事を慮るものなり。憲宗はさすがに英明の主、また之を欲すと雖も、彼等に反對する者は、私利の一財源を失ふの故を以て、種々の手段を以て、之を挫かむ

としたりき。故を以て、憲宗も未だ決するところあらず。先づ裴度をして、淮西の行營を宣慰し、彼我の形勢を觀察せしむることゝはなしぬ。すでに裴度還り奏して曰く、淮西必ず取るべし。我軍の諸將を觀るに、李光顔勇にして義を知る、必らず能く功を立つべし。この時に方りて、李師道陰に淮西の援をなし、盜を募りて河陰の轉運使を攻め、錢帛三十萬緡匹、穀二萬餘斛を焼きぬ。こゝに於て、人情恐懼し、先に反對せるもの、大に其論の傍證を得しとなし、紛々として、兵を罷むべきをいへり。而して韓愈は憲宗がその請ふところに従はむを恐れ、淮西事宜狀を上りて、その早く斷ぜざるべからざるを説き、必ず取るべき策をも併述したりき。曰く

右臣伏以淮西三州之地、自少陽疾病、去年春夏以來、圖爲今日事、有職位者、勞於計慮、撫循奉所役者、修其器械、防守金帛糧蓄、耗於賞給、執兵之卒、四向侵掠、農夫織婦、携持幼弱、餉於其後、雖時侵掠、小有所得、力盡筋疲、不償其費、又聞畜馬甚多、自半年以來、皆上槽廩、譬如有人、雖有十夫之力、自

朝及夕常日大呼跳躍、初雖可畏、其勢不久、必自委頓、乘其力衰、三尺童子、可使制其死命、况以小州殘弊、困劇之餘、而當天下之全力、其破敗可立而待也、然所未可知者、在陛下斷與不斷耳、夫兵不多、不足以必勝、必勝之師、必在速戰、兵多而戰不速、則所費必廣、兩界之間、疆場之上、日相攻劫、必有殺傷、近賊州縣、徵役百端、農夫織婦、不得安業、或時少遇水旱、百姓悲苦、當此時、則人人異議、以惑陛下之聽、陛下持之不堅、半途而罷、傷威損費、為弊必深、所以要先決於心、詳度本末、事至不惑、然可圖功、為統帥者、盡力行之於前、而參謀議者、盡心奉之於後、內外相應、其功乃成、昔者殷高宗、大聖之主也、以天子之威、伐背叛國、三年乃克、不以為遲、志在立功、不計所費、傳曰、斷而後行、鬼神避之、遲疑不斷、未有能成其事也、臣膠承恩、寵獲掌綸、誥地親職、重不同庶寮、輒竭愚誠、以裨補護、條事乎賊事宜、一二如後、

第一、款は客兵を徵するよりは寧ろ土人を召募するに如かざるを痛論す、

諸道發兵、或三二千人、勢力單弱、羈旅異鄉、與賊不相諳委、望風憚懼、難便

前進、所在將帥、以其客兵難處、使先不存優恤待之、既誨使之、又苦或被分割隊伍、隸屬諸頭士卒本將、一朝相失、心孤意怯、難以有功、又其本軍各須資進、道路遼遠、勞費倍多、士卒有征行之艱、閭里懷離別之思、今聞陳許安唐汝壽等州、與賊界連接處、村落百姓、悉有兵器、小々俘劫、皆能自防、習於戰鬪、讎賊深淺、既是土人、雖惜鄉里、比來未有處分、猶願自備衣糧、其相保聚、以備寇賊、若令召募、立可成軍、若要添兵、自可取足、賊平之後、易使歸農、伏請諸道、先所追到行營者、悉令却牒歸本道、據本道據行營、所追人額器械、弓矢一物、已上、悉送行營、充給所召募人、兵數既足、加之教練、三數月後、諸道客軍、一切可罷、比之徵發、遠人利害懸隔、

第二、款は堡柵兵馬の宜しく一所に聚むべくして他に分つべからざるを極論す、

繞逆賊州縣堡柵等、各置兵馬、都數雖多、每處則至少、又相去濶遠、難相應接、所以數被收劫、致有損傷、今若分爲四道、每道各置三萬人、擇要害地、屯聚一處、使有隱然之望、審量事勢、乘時遂利、可入則四道一時但發、使其狼

狼、驚、惶、首、尾、不、相、救、濟、若、未、可、入、則、深、壁、高、壁、以、逸、待、勞、自、然、不、要、諸、處、多、置、防、備、臨、賊、小、縣、可、收、百、姓、於、便、地、作、行、縣、以、主、領、之、使、免、散、失、

第三款は交戦の中、恩威並びに行はるべきを細論す、
蔡州士卒、爲元濟迫脅、勢不得已、遂與王師交戦、原其本根、皆是國家百姓、進退皆死、誠可閔傷、宜明勅諸軍、使深知意、當戰鬪之時、固當以盡敵爲心、若形勢已窮、不能爲惡者、不須過有殺戮、喻以聖德、放之使歸、銷其凶悖之心、貸以生全之幸、自然相率、棄逆歸順、

第四款は兵を用ふる當さに持久すべく、且つ其費を惜むべからざるを詳論す、

論語曰、欲速則不達、見小利則大事不成、比來征討無功、皆由欲由其速捷、有司計算所費、苟務因循、小不如意、即求休罷、河北淮西等、見承前事勢、知國家必不與之、持久併力、苦戰幸其一勝、即希冀恩赦、朝廷無至忠愛國之人、不惜傷損威重、因其有請、便議罷兵、往日之事、患皆然也、臣愚以爲、淮西三小州之地、元濟又甚庸愚、而陛下以聖明英武之資、用四海九州之力、除

此小寇、雖易可知、太山壓卵、未足爲喻、

第五款は軍中の賞罰宜しく加重して行ふべく、然らざれば威立たざるを辯論す、

兵之勝負、實在賞罰、賞厚可令廉士動心、罰重可令凶人喪魄、然可集事、不可愛惜所費、憚於行刑、

第六款は李師道、王承宗をして、元濟を援けざらしむべきを切論す、
淄青恆冀兩道、與蔡州氣類略同、今聞討伐元濟、人情必有救助之意、然皆關弱、自保無暇、虛張聲勢、則必有之、至於分兵出界、公然爲惡、亦然不敢宣、特下詔云、蔡州自吳少誠已來、相承爲節度使、亦微有功效、少陽之歿、朕亦本擬元濟、恐其年少、未能理事、所以未便處置、待其稍能緝綏、然後許其承繼、今忽自爲、狂悖侵掠、不受朝命、事不得所、以此討伐、至如淄青、恒州、范陽、等道、祖父各有功業、相承命節、年歲已久、朕必不利其土地、輕有改易、各宜自安、如妄自疑懼、敢相扇動、朕即赦元濟、不問廻軍、討之、自然破膽、不敢妄有異說、

議論もとより十分ならず、繁簡其當を失すと雖も、その中一二策は、確かに取るべきものなり。徵兵守隘の如きは、後に降將杜重質が杜牧に語りしものと符節を合するが如し、愈や敵を料ること神の如き者ありといはざるべからず。

然れども、この上書は、不幸にして採用するところと爲らざりき。否な、愈は爲に内外の怨恨を招き、讒謗百出、その中傷を免ること能はず。偶ま人あり、愈の江陵にありしとき、裴均が厚遇するところなり、均が子素行無状なるにも拘はらず、爲に文章を作り、字して鏢といひしを証るものあり、謗語驟暴、遂に中書舍人より一轉して、太子右庶子に下されたりき。當時憲宗の信任を得たる愈が同僚裴度にして、猶ほ且つその地位を保つこと能はざるに近かりしを知らば、これも亦た怪しむに足らず。愈の畫策するどころ、已に用ひられず、而かも唯だ無爲にして止むべくもあらねば、滿腔の不平は、彼を驅りて、之を淮西の行營に告げ、こゝに與柳中丞の二書とはなれりき。

中丞は即ち柳公綽なり、公綽初め御史中丞より出でて、湖南の觀察使となり、後に鄂州に徙る。その吳元濟を討せむとするに方りてや、詔して岳鄂の兵五千を發し、安州刺史李聽に隸せしむ。公綽曰く、朝廷吾を以て、儒生兵と知らずと謂へるか、と依て請ふて自ら行き、兵を引いて江を渡り、さながら古の名將の如く、戰ふ毎に輒ち勝ちぬ。淮西の賊、馬首を北上せざりしは、當に斯人の功といふべく、韓愈が囑望せしところ、亦た頗る大なる者ありき。その第一書に曰く、

閣下書生也、詩書禮樂是習、仁義是修、法度是束、一旦去文就武、鼓三軍而進之、陳師鞠旅、親與爲辛苦、慷慨感激、同食下卒、將二州之牧、以壯士氣、斬所乘馬、以祭踣死之士、雖古名將、何以加茲、此由天資忠孝、鬱於中、而大作於外、動皆中於機、會以取勝於當世、而爲戎臣之師、豈常習於威暴之事、而樂其鬪戰之危也哉、

その第二書に曰く、

夫遠徵軍士、行者有羈旅離別之思、居者有怨曠騷動之憂、本軍有饋餉煩

憂之難、地主多姑息形迹之患、急之則怨、緩之則不用命、浮寄孤懸、形勢銷弱、又與賊不相諮委、臨敵恐駭、難以有功、若召募士人、必得豪勇、與賊相熟、知其氣力所極、無望風之驚、愛護鄉里、勇於自戰、徵兵滿萬、不如召募數千、問下以爲如何、

愈はかつて淮西事宜狀に論ぜしものを以て、之を公綽に説きしなり。韓集兵を談ずるの文、惟だ此のみ、議論剴切、その妙處、直に神解に臻る。徵兵萬に滿つるも、召募數千に如かずといふは、少くとも彼土に於て萬世行ふべきの通議たるに似たり。嗚呼、書生兵を談ずる固より病に非ず、些の血性あるもの奚ぞ國家の危運を坐視すべけんや、愈はこゝに言なくて止む能はざりしなり。

さばれ、淮西の征討は、早晚必ず行はざるべからざる一事なり。惡木を枯殺せむには、根株よりして轉移せざるべからず。韓愈は、さすが經世の大家を以て、之を未然に洞察したりきと雖も、未だ滿廷の臣僚をして、之に左袒せしむること能はざりき。之を一言すれば、愈が意見は苟くも機を

察するの人のあらざるよりは、孰れも皆早きに失すと認められたればなり。然れども、時勢の轉換は、自ら愈の上言せしものを實行せしむるに至らしめたり、その之に到りしや、亦た因あり。

これより先き、憲宗が淮西の征服を期するや、時にその軍を行るに急なりしとあり、諸賊之に苦しむ、互に相謀りて、その討伐を止めむと企て、先づ京師の廷臣に賄して、朝議を變せしめむとし、之が爲には、ありとある秘密手段をも取れり。然れども、憲宗が銳意と當時の宰相武元衡、裴度等の決心とは、容易に動かすべくもあらず。是に於てか、諸賊は百計す、盡きやがて、李師道は決するところあり、刺客を放て、京師に入らしめ、禁中に潜んで、二相を暗殺せしめむとせり。而して武元衡はその犠牲となり、不幸も毒刃に其命を失ひしが、裴度は避朝厚くして、僅に首を傷けたるのみ。京師の人、大に駭き、爾後宰相は警衛を嚴にして、金吾の騎士を加ふるに至りき。

こゝに於てか、無能の廷臣は、すべて恐怖の深淵に沈み、和平を欲するも

のは、裴度の官を罷めて、淮西將士の心を安ぜむとしたりき。然れども、憲宗はなほ英明の資を失はざりしを以て、淮賊の暴行に對して、頗る憤怒するところあり。曰く、若し今にして、度の官を罷めなば、是れ愈よ、賊の奸謀をして成らしむるもの、朝廷復た紀綱なからむ。吾は度一人を用ひて、猶ほ淮西を破るに足れり。と、憲宗は、遂に裴度を以て、中書侍郎同平章事と爲せり。度はすでに相位に在り、その規畫するところ、果して爲し得べかりしか。

憲宗の決心は、漸く堅からむとせしばかりのみ、固より裴度を信ずと雖も、今や將に來らむとする讒謗中傷の言に對し、耳を借さざる程、強固なるか。是れ未決の問題なり。裴度韓愈は、早く此に想ひ到れり。況んや滿廷の臣僚多く、和平を希ひ、好を賊に通ずるもの、中傷の言をなすこと、火を賭るよりも明なるに於てをや。是に於てか、憲宗の信任をして、一層堅固に決して、他に移らざらしめむが爲に、秘密の計謀は、度愈二人の間に於て協議され、この結果として、遂に裴度讓官表は、愈の筆を以て、草せられ

たり。宰相を辭するは、固より本意に非ず、唯だかくの如くして、憲宗を悟らしめ、將來讒謗の多きを豫期し、大に獨斷の明を要するを覺知せしめむと企圖せしのみ、その文辭の婉曲なるは、實に大手筆を借らざるを得ざりき。

臣某言、伏奉今日制書、以臣爲朝議大夫中書侍郎同中書門下平章事、承命驚惶、魂爽飛越、俯仰天地、若無所容。臣某誠惶誠恐頓首頓首。臣少涉經史、粗知古今、天與樸忠、性惟愚直、知事君以道、無憚殺身、慕當官而行、不求利己、人以爲拙、臣行不疑、元和之初、始拜御史、旋以論事過功、爲宰相所非、移官府廷、因佐戎幕、陛下恕臣之罪、憐臣之心、拔居侍從之中、遂掌經綸之重、受恩益大、願已益輕、苟耳目所聞知、心力所迨及、少關政理、輒以陳聞於裨補、無涓埃之微、卽有謗謗丘山之積、陛下知其孤立、賞其微誠、獨斷不謀、獎侍踰量、臣誠見陛下具文武之德、有神聖之姿、啓中興之宏圖、當太平之昌歷、勤身以險、與物無私、威怒如雷霆、容覆如天地、實群臣盡節之日、才智效能之時、聖君難逢、重德宜報、苦心焦思、以日繼夜、苟利於國、知無不爲、徒

欲竭愚、未免妄作、陛下不加罪責、更極寵光、既領臺綱、又毗邦憲、聖君所厚、凶逆所警、闕於防虞、幾至斃陪、恩私曲被、性命獲全、忝累祖先、玷塵班列、未知所措、祇自內慙、豈意陛下擢臣於傷殘之餘、委臣以燮和之任、忘其陋汗、使佐聖明、此唯成湯舉伊尹於庖厨、高宗登傅說於版築、周文用呂望於屠釣、齊桓起穽威於飯牛、雪耻榮光、去辱居貴、以今準古、擬議非倫、陛下有四君之明、行四君之事、微臣無四子之美、獲四子之榮、豈可叨居以彰非據、方今干戈未盡、戢穽狄未盡、賓麟鳳龜龍未盡、郊糞草木鳥鼈未盡、被雍熙當大有爲之時、得非常人之佐、然後能上宣聖德、以代天工、如臣等類實不克堪、伏願博選周行、旁及巖穴、天生聖主、必有賢臣、得而授之、乃可致理、乞廻所授、以叶群情、無任懇款之至。

辭表は豫期に違はず、直に却下され、信任の堅きを誓ふ言辭は、親ら憲宗の口より發せられたり、是に於てか、裴度は更に上書して曰く、淮西は腹心の疾除かざるを得ず、且つ朝廷業に己に之を討つ、兩河の藩鎮跋扈するもの將に此を視て、高下を爲さむとす、中止すべからずと、憲宗大に然

りと爲し、淮西用兵の事を以て、全く裴度に一任せたりき。さばれ、淮西の大征は、立どころに始むること能はず、裴度はその準備として、内は廷臣の一致を謀り、外は河北淮西の行營をして、出兵に備へしめぬ、かくして、薄弱無能の臣僚は、一時盡く逐はれ、李光顔、李愬、柳公綽は用ひられ、しばらく河北の兵を按じ、力を淮西に専らにするに決し、裴度は遂に彰義節度使、淮西宣慰招討使の名を以て、淮西に赴くこととなり、愈を奏して行軍司馬となし、相携へて京師を出でぬ。行くに臨んで、度は憲宗に辭謝して曰く、臣若し賊を破らば、天に朝せむこと期あり、賊あらば、闕に歸る日なからむと、憲宗爲に涕を流しぬ、愈の潼關を出づるや、請ふて先づ遽に乗じ、汴に入り、都統韓弘を感説し、とも力を協はさしめ、師乘遂に和せり、愈は又蔡州の精卒、悉く界上に聚つて、官軍を拒ぎ、留まつて城を守るものは、率ね老弱、且つ千人に過ぎざるを察し、亟かに度に白し、請ふて兵三千人を以て、間道より入り、必ず吳元濟を擒にせむことを謀れり、而してその未だ之を爲すに及ばざるに、凱

歌は早く擧げられたりき。

これより先き、唐鄧節度使李愬、兵を進めて、賊將丁士良、吳秀琳、李祐を擒にし、釋して之を用ひぬ。李祐、愬に謂て曰く、蔡の精兵皆洄曲にあり、州城を守る者皆羸卒を以てす、虛に乗じて、直に其城に抵るべし。賊將之を聞くころ、元濟すでに擒どならむと、愬之を然りとし、裴度に白して命を受け、祐及び李忠義に命じ、突騎三千を帥ひて、前驅たらしめ、自ら監軍と與に三千人に將として、中軍となり、李進誠は三千人に將として、其後に殿たり、かくて軍を出だせしが、その行くところを言はず、愬は唯だ東行せよと命ぜしのみ、行くと六十里、夜、張柴村に入り、盡くその戍卒と烽子とを殺し、其柵に據り、士卒に命じて少休し、乾糲を食ひ、羈約を整へしめ、五百人を留めて、之を鎖し、以て明山の救兵を斷つに備へ、又兵を分ちて洄曲及び諸道の橋梁を斷ち、復た夜に乗じ、兵を引いて出でぬ。諸將大に疑ひ、之く所を請ふ。愬曰く、蔡州に入りて、吳元濟を取らむと、諸將皆色を失ひ、監軍は哭泣し、李祐が姦計に陥りしといふ。時に風雪大に到り、旌旗盡

く裂け、人馬凍死するもの相望み、人々必ず死すと爲し、而かも愬を畏れ、敢て進はず。夜半、雪愈よ甚しく、行くこと七十里、遂に州城の下に達し、先づ鵝鴨池を環て、軍聲を混ぜしむ。蓋し蔡州は少誠が命を拒みしより、官軍至らざること三十餘年、故に蔡人果して備を爲さず。四鼓、愬の至りしとき、一人の知る者あらず。祐、忠義等、其城に鑿して先登し、壯士之に従て入り、先づ守門卒を殺し、獨り擊柝者を留め、柝を環つこと故の如くならしめ、遂に門を開いて衆を納れ、鷄鳴の比、雪止むや、愬先づ入りて、元濟の外宅に據りぬ。時に或は元濟に告ぐる者あり、曰く、官軍至ると。元濟信ぜず、起て庭に聽き、愬が軍の號令の聲を耳にし、始めて驚き、乃ち左右を帥ひ、牙城に登りて拒戦す。時に董重質、精兵萬餘人を擁し、洄曲に據る。愬曰く、元濟望むところの者は、重質の救のみと。乃ち重質の家を訪ひ、厚く之を撫し、其子傳道を遣はし、書を持って重質を諭さしむ。重質遂に單騎、愬に詣て降る。愬、牙城を攻めて、其南門を燒く。民争ひ、芻薪を負うて、之を助く。門壞れて、元濟を執らへ、檻して京師に送り、且つ裴度に告ぐ。是日中

光二州及び諸鎮の兵二萬餘人相繼いで來降す。元濟來降してより、愬一人を戮せず、官吏帳下厨廩の卒より皆その職に復し、之を使ふて疑はず。然る後、鞠城に屯し、以て裴度を待つ。未だ幾ならずして、度は降卒萬餘人に將とし、城に入りぬ。李愬躬ら發糶を具へ、出で、路左に拜す。度を將に之を避けむとす。愬曰く、禁人、頑悻、上下の分を講らず、願くは、公、因て之を示し、朝廷の尊を知らしめよ。と、度乃ち之を受け、愬は軍を文城に還しぬ。十一月、天子興安門に御して俘を受け、吳元濟を以て廟社に獻じて、之を斬り、淮西の事、全く終りぬ。蓋し李祐の謀りしところ、愬が爲さむと欲せし外に出でず。故を以て知る者爲に竊かに深く惜みきといふ。

さばれ、愬は他になほ特記すべき功績もありき。蔡州の平ぐるや、布衣栢者といふもの、計を以て愬に謁す。愬與に語て、大に奇なりとし、遂に裴度に白して曰く、淮西すでに滅び、河北の王承宗、膽破れて、衆を用ふることを勞せざるべく、宜しく相公の書を奉じて、禍福を明かにし、以て之を招かしむべし。その服するや、何の疑ふところぞと。度之を然りとす。是に於

てか、愬直に文を草し、栢者をして之を袖にして、鎮州に至らしむ。承宗果して大に恐れ、表を上り、德棣二州を割いて、以て獻じ、子を遣はして、入侍せむを乞ひ、愬等が豫想せしに違はず、一矢を費さずして、降を納れぬ。諸鎮なほ永遠の鎮壓を要すと雖も、唐の社稷は、當時、恰も中興の觀ありき。愬が桃林の夜、裴度の賞を受けしを賀するに曰く、

西山騎火照山紅、夜宿桃林臘月中。手把命珪兼相印、一時重疊賞元功。

淮西平治の功は、主として李愬の力に歸すべし。その初、天子の意を強うして、之を遂げしめしものは裴度にして、愬が平淮西碑を撰して、盛に度の功を擧げたるは可なりと雖も、遂に愬を詳説せざりしは何故ぞ。此碑すでに成る、而して愬は之に平ならず。愬の妻は、唐安公主にして、時に禁中に入出し、因て碑辭の實ならざるを訴ふ。是に於てか、詔して其文を斷らしめ、更めて翰林學士段文昌に命じて撰ばしめぬ。その文、氣骨委弱、詞旨靡曼、もとより相較ぶべからず。愬の作りしところ、原詞の妙、叙は書の如く、銘は詩の如しとの評語さへあり。同時に上りし柳宗元の平淮西雅

と相並んで、一代の偉觀を極めしもの、その文、今こゝに擧げず、而して碑の厄に逢ひしこと、かくの如きは、頗る惜むべきなり。後に李商隱、情韓碑の一篇あり、淮西征討の顛末を簡明に叙して、太だ稱すべきものあるを以て、その篇幅のやゝ長きを嫌はず、上記述せし者の總結に代へて、試に引抄するを得むか。

元和天子神武姿、彼何人哉、軒與義、誓將上雪列聖耻、坐法宮中朝四夷、淮西有賊五十載、豺狼生、羆生、羆生、不據山河據平地、長戈利矛日可麾、帝得聖相相曰度、賊斫不死神扶持、腰懸相印依都統、陰風慘澹天王旗、愬武古通、依爪牙、儀曹外郎載筆隨、行軍司馬智且勇、十四萬衆猶虎貔、入蔡縛賊獻太廟、功無與比、恩不訾、帝曰、汝度功第一、汝從事愈宜、爲辭、愈拜、誓首、蹈且舞、金石刻、畫臣能爲古者世稱大手筆、此事不繫於職司、當仁自古有不避言訖、願天子順公退齋戒、坐小閣、濡染大筆、何淋漓、點竄、堯典、舜典、字塗改、清廟生民詩、文成破體書、在紙、清晨再拜鋪丹墀、表曰、臣愈、昧死、上詠神聖功、書之碑、碑高三丈、字如手、負以靈龜、蟠以螭、句奇語重、喻者少、謔之

天子言其私、長繩百尺拽碑倒、鹿砂大石相磨治、公之斯文若元氣、先時已入人肝脾、湯盤孔鼎有述作、今無其器存其辭、嗚呼、聖皇及聖相、相與烜赫流、淳熙公之斯文不示後、曷與三五相攀追、願書萬本頌、萬過口角流、沫右手、胠傳之、七十有三代、以爲封禪玉檢明堂基。

蘇東坡、かつて臨江驛の邸舎、壁間に題せる一詩を見しことあり、曰く、淮西功業冠吾唐、吏部文章日月光、千歲斷碑人贈灸、不知世有段文昌、或は東坡が自ら作りし者と稱す、兩詩品隨すでに盡く、世自ら公論あるを知るに足るべし。

淮西征討の諸人、その其分に應じて、愈位の事あり、裴度は晉國公となり、李愬は涼國公となり、韓弘、李光顏等も官を遷ること差あり、而して愈は功を以て、刑部侍郎となれり、時に年恰も五十、是れ愈が一生中最も得意の時にして、また憲宗中興の最盛時代といふべかりき。

然れども、憲宗の最盛時代は、決して永續すること能はざりき、彼はさながら周の宣王もしくは己が祖先なる玄宗と相似たるものあり、一たび

安逸の中に在りては、毅然その素行を持すると能はず。淮西の平定、河北の降服は、今や憲宗をして天下復た思ふべき者なしと謂へる。慢心を生じ、依て驕奢の中に陥らしめむとす。かの皇甫鍾程等（註）の小人が進んで相位に上りしは、實にその兆となすべきものにして、裴度はかつて疏中に下の如き言を爲せしことあり。

天下治亂繫朝廷、朝廷輕重在輔相、所可惜者河北底寧、承宗斂手削地、韓弘興疾討賊、豈朝廷之力能制其命哉、直以處置得宜、能服其心爾、陛下建討平之業、十已八九、何忍還自墜壞、使四方解體乎、

度は如上小人輩と同位に列するを屑とせず、自ら退かむことを求めて許されず、遂に此に至りしなり。而して憲宗は之を以て朋黨樹立、自ら避け難き者に過ぎずと爲し、毫も耳を其言に假すことなかりき。

憲宗の明日に、蔽はるゝと共に、宮廷の驕侈は日に増加し來りぬ。鹽鐵使奉つる所の羨餘之を舉げて、耳目の費に供し、怙々して顧みざりしのみならず、かの土の天子に最も普通なる欲望は、又もや憲宗を驅り、秦皇漢

武の愚を學びて、長生の藥を求めむが爲に、先づ天下に詔して、方士の靈驗ある者を徵さしむるに至り、山人柳泌は、皇甫鍾の爲に薦められ、唯だ靈草を求めむ爲ばかりに、臺州刺史を得たり。諫官輩、さすがに之を厭過し得ず、廷争その非を鳴らせば、憲宗答へて曰く、一州の力を煩はして能く人主の爲に長生を致せば、臣子亦た何ぞ愛せむと。嗚呼、憲宗の心は全く亂れ盡し、臣子の愛を以て愛束なき仙藥に代へむとまでしつるなり。かくてこの荒惑は、延いて佛骨奉迎の一事となり、竟にわが尊意を起して、震天動地の一表を捧呈するに至らしめき。



第七章 佛骨表

塔頭光微にして槐槍地に落ち淮西の一提賊首を梟せるを得之に次いで河北の降服あり四海の妖氛漸く掃蕩に歸すべき觀ありしと雖も永遠の鎮定に對しては更に努力するところ無かるべからず是に於てか韓愈はひたすら裴度に頼り俱に規畫する所あり家國の憂常にその胸中に絶えず教育の普及風俗の矯正財政の整理等その職掌上の義務を盡すの外如何に將來の氣運に對して夙夜に心を痛しめたるか中宵枕を撫して浩歎し人知れぬ熱涙を澱ぎしことありしや想像するに難からずさばれ人事の翻覆豫め料られず事の起るや常に意外にありその初英明の主を以て聊か天下に嚮望されし憲宗も上言せる如く漸く心驕り氣弛みて荒惑日に増して來り宮中の光景忽ち又た一變し肅清の風全く見るべからざるに至りぬ此時に方りて韓愈が獨り焦心の餘に出で他の諫官を勧め抗顔して其主を説き力を盡して紀綱の振起を計

りしは固より其所なりしなるべし然れども洪水の一たび至るとき山を懷ね陵に褻るは決して避くべからず偶ま之を防げば愈よ其勢を激せむのみ果然憲宗の荒惑と迷亂とは前にも増して甚しくなりゆきかつて方士をして長生の藥を求めしめたる故態は再發して新に佛に迷ひ入り甘じて三寶の奴となり風翔に佛の指骨あるを聞き之を禁中に迎へて冥福を祈らむとするに至れり韓愈が心中の苦は知るべきのみ余はこゝに聊か傍徑に入るの感あれども唐朝佛教の趨勢に就いて畧述する所なくむばあらず

げに有唐の一代は支那に於ける佛教の最盛時期といふも不可なかりきそも佛教の初めて支那に入りしは釋迦入滅後千〇十六年のことにして後漢明帝の御宇に當れり當時思想界一般の傾向は厭世に向ひたかりければ容易にその迎合する所となり其勢漸く盛なる者あり東晋より南北朝にいたりては高僧碩徳踵を接して輩出し次いで鳩摩羅什の經論を翻譯したると達磨が葱嶺の雲を踏て禪宗を齎らしたるとあり

梁の武帝が歸依して其愚を極めしも、亦た此時に當り、同代の文人が等しく其臭にかぶれたる如き、余は唯だ象教の影響するところ頗る異常なりしを見ずむばあらず、唐朝に至りては、更に積年の餘力を振ひ、貞觀開元の昭代に乗じて、前後無比の盛觀を呈せしが、有名なる玄奘三藏の出でしも、寒山拾得も居たりしも、共に此時なりき、他に道宣は律宗を傳へ、善導は淨土宗を興し、窺基は法相宗を創め、義淨は華嚴を廣め、金剛智は眞言宗を掲げ、三論成實涅槃地論攝論俱舍の諸宗、亦た之に付隨して世に出でぬ、而して本邦より萬里の波濤を越えて、わざ／＼求法の僧を派遣せしも、亦た此時に際せり、知るべし、佛敎の備はれる唐より盛なるは無かりしを。

佛敎が上下一般に布及せし證左は之を擧ぐるに難からず、太宗輔弼の名臣、房玄齡杜如晦の二人が力を盡して之を監護し、他に李泌等累代の宰相が信仰管ならざりしを見れば、その如何に人心に浸潤せしかを察すに足るべく、隋世すでに文中子が偶然かは知らねど、三敎是に於てか一

にすべしと喝破せるあり、顏真卿は一代の重望を荷うて、上弘律師の戒を受けしことあり、韓愈と共に一時の瑜亮たるべき柳子厚は、淨土の讃揚をなし、また嘗て半面の譏ありし白樂天は、道を烏窠禪師に問ひ、三敎論衡一部の著述をさへ爲しにき、その後年に至るが如きは、武宗の排佛ありしと雖も、機械的勢力の打撃は、さしたる結果を爲すに及ばず、五代を経て宋に至り、歐陽修が居納となり、司馬溫公が禪偶となり、蘇老泉が祖印となり、王安石が報寧となり、蘇東坡が彌陀佛像の譏となるに至り、その形而上眞理の討究が、やがて所謂理學の基礎を提供せしを見れば、その人心内部に透入し、非常の勢力を蘊積したるを知了すべし。唐初の佛敎その盛を極めたる時代は、既に過ぎて、韓愈が當時の社會は、漸く惡弊を醜穢せむとしたりき、帝室が儀式に要する浪費の増加と有爲なる中流人士が氣力の衰憊とは、佛敎その者の罪にはあらずとするも、實際唐の國家が爲に受けしどころの病毒なりき、而して韓愈は特にこれが匡正救助に對して、滿身の力を費すを惜まず、かつて詩を賦して

曰く

然、佛法入中國爾來六百年、齊民逃賦、役高士著、幽禪官吏、不立制、紛紛聽其

その弊害を痛斥して、剩すところなく、儒教の標榜は、後者に對する根本的革新の一方法として、居常之を爲すに怠らざりしが、やがて佛骨の一表は前者に對する諫奏として、端的この時を待つて出だせしなりき。

* * * * *

初め鳳翔の法門寺に、護國眞身塔あり、塔内に釋迦佛の指骨一節を藏し、其法として三十年に一たび開くのみ、開けば歲稔にして、人泰なりと傳ふ。憲宗の元和十四年、恰も其歲に當りしを以て、正月丁亥、中使杜英奇を遣し、宮人三十を押し、香花を持し、迎へて大内に入らしめ、禁中に止むること三日、乃ち之を寺に送りぬ。王公士庶奔走贊歎して、捨施し、唯だ後に在らむことを恐れ、膜唄して、夷法を爲すに至り、百姓また業を廢し、産を破り、頂を焼き、臂を灼し、供養を求め、眇目を委し、騰沓して、路に係る者あり

り平生より佛嫌ひの韓愈たるもの安んぞ閑坐して之を見ることを爲さむや、况して實際少からざる弊事たるに於てをや、愈はかつて憲宗が國士の知遇に涙を存べし、忠直無比の人なり、淮西の役ある前、憲宗が之を群臣稠坐の中より拔擢して、裴度に諫せしめ、征討の事を委ねたるに方りて、その心中如何に天子の聖明に感じたるか、而かも今や時事日に非なるものあり、その常に排斥する所の佛を迎へて、無用の禮法を修せむとす、愈や是に於てか、斷として起たざるを得ず、以爲へらく、異教の勢を爲すこと此の如く、惡弊すでに此の如し、萬乘の天子之に歸依せば、その底止するところを知らざるべし、上の爲す所下之より甚しき者あり、世道の微線の如くして、邦前の前途大に憂ふべきものあるを奈何むと、乃ち中夜熱涙を注ぎ、椽大の筆を把りて、沛然一揮、墨痕淋漓たる一封の諫書を捧げ、朝に之を丹墀の下に獻じ、退いて命を待てり、其文に曰く、

臣某言、伏以佛者夷狄之一法耳、自後漢時流入中國、上古未嘗有也、昔者黃帝在位百年、年百一十歲、少昊在位八十年、年百歲、顓頊在位七十九年、

年九十八歲帝嚳在位七十年年百五歲帝堯在位九十八年年百一十八歲帝舜及禹年皆百歲此時天下太平百姓安樂壽考然而中國未有佛也其後殷湯亦年百歲湯孫太戊在位七十五年武丁在位五十九年書史不言其年壽所極推其年數蓋亦俱不減百歲周文王年九十七歲武王年九十三歲穆王在位百年此時佛法亦未入中國非事佛而致然也漢明帝時始有佛法明帝在位纔十八年耳其後亂亡相繼運祚不長宋齊梁陳元魏已下事佛漸謹年代尤促惟梁武帝在位四十八年前後三度捨身施佛宗廟之祭必用牲牢晝日一食止於菜果其後竟爲侯景所逼餓死國亦尋滅事佛求福乃更得禍由此視之佛不足事亦可知矣高祖始受隋禪則議除之當時群臣材識不遠不能深知先王之道古今之宜推闡聖明以救斯弊其事遂止臣常恨焉伏惟睿聖文武皇帝陛下神聖英武數千百年已來未有倫比即位之初即不許度人爲僧尼道士又不許創立寺觀臣常以爲高祖之志必行於陛下之手今縱未能即行豈可恣之轉令盛也今聞陛下令群僧迎佛骨於風翔御樓以觀昇入大內又令諸寺遞迎供養臣雖至愚必

知陛下不惑於佛作此崇奉以祈福祥也直以年豐人樂徇人之心爲京都士庶設詭異之觀戲翫之具耳安有聖明若此而肯信此等事哉然百姓愚冥易惑難曉苟見陛下如此將謂眞心事佛皆云天子大聖猶一心敬信百姓何人豈合惜身命焚頂燒指百十爲群解衣散錢自朝至暮轉相倣效惟恐後時老少奔波弄其業次若不即加禁遏更歷諸寺必有斷臂鬻身以爲供養者傷風敗俗傳笑四方非細事也夫佛本夷狄之人與中國言語不通衣服殊製口不言先王之法言身不服先王之法服不知君臣之義父子之情假如其身至今尚在奉其國命來朝京師陛下容易接之不過宣政一見禮實一設賜衣一襲衛而出之於境不令惑衆也况其身死已久枯朽之骨凶穢之餘豈宜入宮禁孔子曰敬鬼神而遠之古之諸侯行弔於其國尙令巫祝先以桃茢祓除不祥然後進弔今無故取朽穢之物親臨觀之巫祝不先桃茢不用群臣不言其非御史不舉其失臣實耻之乞以此骨付之有司投諸水火永絕根本斷天下之疑絕後代之惑使天下之人知大聖人之所作爲出於尋常萬萬也豈不盛哉豈不快哉佛如有靈能作禍祟凡有殃咎

宣加臣身上天監臨臣不怨悔無任感激懇悃之至隨奉表以聞臣某謹惶

韓愈が學問の本領に至りては後章細述するところあるべけれど先づこゝに佛骨の一表に就て略論するところあらむかこの書の内容に至りては秋毫も推服の意を表する能はず蓋し當時にありて天子が佛に倂する所以の者唯だ壽を祈り國を護するを以て心と爲せしが故にその議論を行る皆また福田の上に於て説を立てしには相違なかりしと雖も愈がこの時佛理の一端をだに解知せざりしに至りては遂に争ふべからず羅大經が文公かつて佛骨を看す但だ能くその皮毛を攻むるのみといひしは頗る肯綮に中りし至言を推すべく憲宗の荒惑迷亂を辭悟せしむるに於ては餘りに粗莽の言なりき取るべき者は唯だ至誠一片の情のみ蓋し愈は自己の不知なるよりして進説の方法を諷りに外ならずその過やなほ君子なり。

九重深き處表は乍ち傳達せられぬ果然憲宗は赫怒せり乃ち特に宰相

に示して將に抵すに死を以てせむとしたとへば雷霆の轟くとき暴厲迅疾天地唯だ崩墜せむを恐るゝばかりなりき裴度崔群の二人は愈が平生刎頸の友として固よりその真情を熟知する者何ぞ解議の諫を爲さいらむや謹んで帝の前に到り膝首拜を爲し奏して曰く愈が言は許悟せり之を罪するや誠に宜し然れども内に至忠を愷く者に非ざれば安んぞ能く此に及ばむ願くは少しく寛假して以て諫争を來せと帝曰く愈の我が佛を奉ずる唯だ過ぎたるをいふは猶ほ容るべし東漢佛を奉ぜしより以後天子咸な天促すといふに至りては言何ぞ乖刺せるや愈は人臣にして狂妄なり固より赦すべからずと是に於てか中外駭懼し咸里の諸貴と雖も亦た愈の爲に言ふ所あり遂に潮州の刺史に貶せらるゝこといなれり昔は崔浩佛を闢いて魏に死し今や韓愈佛を論じて唐に貶せられぬ三寶に歸依する天子何ぞ慘酷にして恩少きや而して韓愈が廷士の擁護を受け以て其禍を寛にするを得たるに至りては流石に至誠人を感ずる深きを見るといふべきのみ時に皇甫湜程昇の

二人相位にあり、この表を以て、愈と同年の進士にして、皆て裴度に淮西に佐たりし馮宿の草せし所ならむを疑ひ、之をも併せて貶して、歙州の刺史たらしめぬ。朝廷補弼の大匠、譴罷なきこと、此の如く、猜忌構陷、是れ事とするが如き、豈に亦た言を爲すべしや。

潮州の地たるや、南疆の僻地にして、人の多く到らざる所なり、愈が貶謫の行程を案せば、いかで惨然たるなきを得む。その命を受くるや、即日途に上り、便道疾きを取り、先づ長安を出でて、藍關に至りき。藍關は前に詩聖杜甫が好奇の岑參兄弟と共に舟を洪波に浮べしとき、水面月の初めて出でしを望みしところにして、都城の外數里にあり、秦時驪關と呼びし地、即ち是なり。路は先に陽山貶謫の途次に過ぎしところにして、前度の風物復た之を見たりき。時は正月癸巳の日に方り、陰寒猶ほ去らず、形雲慘澹として、空を蔽ひ、南望すれば、群山愁ふるが如く、天に掛して、簇然、崔嵬凍て相映じ、滿地の雪華深き一丈、馬蹄爲に進まず、今夜知らずして、誰か家にか宿せむ、遅々として、鞭徐かに下るとき、困憊殆んど極り進

退正に歩を失せ、時に姪孫湘後れて至り、漸く相及ぶあり、乃ち咄嗟の間に一律を賦し、之に似して曰く、

一封朝奏九重天、夕貶潮州路幾千、欲爲聖明除弊事、豈料衰朽惜殘年、雲

橫秦嶺、家何在、雪擁藍關馬不前、知汝遠來應有意、好收吾骨瘴江邊、

嗚呼、是れ何等痛歎の辭ぞ、遍體の至情毫も修飾する所あらず、而かも氣格自ら高く、數ば見るも尙ほ且つ新なる者、自ら其故なくむばあらず。李光地曰く、佛骨の一表、千古に孤映し、この時、之に配す、尤も妙なるは、許大の題目にして、除弊事の三字を以て了却するにありと、蓋し禮法の國に在りては、人臣たるもの君の惡を明言するに忍びざればならむと、雖ども古人が其分を占めて、敢て激語を著けず、自ら咎を引き、責を負ひ、天を怨みず、人を尤めざるに至りては、蓋し及ぶべからずと爲すべきなり、而して世に傳ふるところ、韓湘奇術あり、雲橫雪擁の二語は、かつて先づ示せしところの讖にして、愈初め曉らず、爾時湘の至るを見るに及んで、始めて向の詩意を悟り、遂に是篇を足し成しにきといふに至りては、青瑣

高談の如き俗書に載する者にして毫も信ずるに足らずかの韓柳合集の註を作れる蔣之翘の論ずるところ、陋妄を辯破して盡さるなし、今聊か重複に失するの嫌なきに非ざれど、便宜上之を引抄して、收束と爲すを得む、曰く、公の従子老成子を生む二、湘といひ、滂といふ、湘は進士の第に登り、大理丞となりしが、滂は未だ仕へずして死せり、初め公の南遷のとき、湘は年二十七、滂は年十九、皆公に従て以て行けり、而して此時の末句、遠來といふは、蓋し公すで行いて湘始めて追て此に及びしをいふのみ、而して有意といふも、亦た感歎の意に過ぎざるのみ、竊かに意ふに、或は是言に因り、又世の傳ふるところ、仙人に韓湘子といふものあるを見、遂に傳會して、此説をなせるか、抑も異教を主とする者、陰かに公の正論を敗らむとして、故らに此を以て其事を長大にせるか、况んや公の貶は、憲宗元和己亥に在り、又四年にして穆宗の長慶癸卯となり、湘始めて登第しぬ、豈に湘すでに仙を學び、又山でて仕ふる歟、その事、怪妄不經、史傳載するなし、而して香と公の詩に註する者、乃ち之が爲に取る、亦た

鄙陋甚しと、余は斷じて此言に従はむとする者なり。



第八章 潮袁二州の刺史

すでに藍田の關を超えて、路忽ち商洛に入り、亂山高下の處、瀉水潺湲、一夜客愁を送り來るに堪へず、武關の西に於て、配流の吐蕃に逢ひ、同病相憐むの情は、

嗟爾戎人莫慘然、湖南地近保生全、我今罪重無歸望、直去長安路八千、の一絶となり、悲慘自ら禁せず、硬骨剛腸の大丈夫は、其情却て至醇至誠彼の故らに奇矯を爲ぬる者と等しからず、更に路傍塚の短古を賦して曰く、

堆堆路傍塚、一雙復一隻、迎我出秦關、送我入楚澤、千以高山遮、萬以遠水隔、吾君勤聽治、照與日月敵、臣愚幸可哀、臣罪庶可釋、何當迎進師、緣路高歷歷、葵心向日の誠、豈に須臾も其主を忘れむや、その救歸の日を囑望する所以の者は、決して自己が苦難を逃れむとする私情に非ず、唯だ是れ戀闕

の心のみ、曲河驛の晨景に遇ひては、更に臨風の一哭を禁せず、驛店の雞聲、すでに入頭を白くするに足る者あり、元んや貶謫の苦を兼ぬるに於てをや、真情發して眞時となる、正に遺種に於て見るべきなり、晨及曲河驛、懷然自傷情、群鳥巢庭樹、乳雀飛簷楹、而我抱重罪、子々萬里程、親戚頓乖角、國史棄縱橫、下負明義重、上孤朝命榮、殺身諒無補、何用答生成、

鄧州の界に入りては、

潮陽南去倍長沙、戀闕那堪又憶家、心訝愁來惟貯火、眼知別後自添花、商顏暮雪逢人少、鄧鄙春泥見驛賒、早晚王師收海嶽、普將雷雨發萌芽、といひ、驛に乗じて、未だ家人と俱にするに及ばず、從ふ者は唯だ姪孫のみ、窮愁乍ち形容の枯槁に及ぶ、而かも誰か之を理に達せずといふや、南陽を過ぎては、

南陽郭門外、桑下麥青青、行子去未已、春鳩鳴不停、空道既遠、海浩渺、經軌忽生以感吾、其寄餘齡、

といふ而してその卓絶を推すべきは實に瀧吏の一篇にあり。

南行逾六旬始下昌樂瀧險惡不可狀船石相舂撞往問瀧頭吏潮州尙幾里行當何時到土風復何似瀧吏垂手笑官何問之恐管官居京邑何山知東吳東吳遊官卿官知自有山潮州底處所有罪乃竄流儂幸無負犯何山到而知官今行自到那妄尋問爲不虞卒見困汗出愧且駭吏曰聊戲官儂管使往罷嶺南大抵同官去道苦遶下此三千里有州始名潮惡溪瘴毒聚雷電常洶々鱷魚大於船牙眼怖殺儂州南數十里有海無天地颶風有時作掀簸眞差事聖人於天下於物無不容比聞此州囚亦有生還儂官無嫌此州固罪人所徙官當明時來事不待說委官不自謹慎宜即引分往胡爲此水邊神色久惶慌瓶大餅毀小所任自有宜官何不自量滿溢以取斯工農雖小人事業各有守不知官在朝有益國家不得無風其間不武亦不文仁義飾其躬巧姦敗群倫叩頭謝吏言始慙今更羞歷官二十餘國恩並未酬凡吏之所訶嗟實頗有之不即金木誅敢不識恩私潮州雖云遠離惡不可過於身實已多敢下持自賀

全幅の精神貶地の遠惡を寫さむと欲し却て問答を設けて之を行ひまた吳音俚語を借り以て真切の意を致し荒陋の態を助けむとを惟れ勉む吏言を借て規諷するところ主意正に此に在り君子は恐懼を以て修省すといへる殆んど之を指すものか英雄氣短きをいふものに至りては情を爲さざるを奈何むその音節氣味の如きは蓋し漢人の樂府より來る韓詩中にありては確かに別調たり得意の詩は常に失意の時に成るといふ余は此言の深く中れる者あるを信せずむばあらず更に臨瀧寺の一絶

不覺離家已五千仍將衰病入瀧船潮陽未到吾能說海氣昏昏水拍天
といふ如きは一片の浩氣遠謫を以て少往せず百鍊の鐵遂に挫折する
こと無きなり瘴烟蠻雨の中知命に達せる殘軀を以て敢て骨を背山に
誓ふに至りては滿腔の感慨消遣するに山なかりしや必せり
なほ途上元山人に別をなし爲に六首を賦し最後の二に於ては遙かに
柳宗元に寄懐し問訊の意を傳へしめて曰く

寄書龍城守君驥何時秣峽山逢颶風雷電助撞碎乘潮簸扶胥近岸指一髮兩巖雖云半木石牙飛發屯門確云高亦映波浪沒余罪不足惜子生未宜忽胡爲不忍別感謝情至骨

韶州に入り、晩に宣溪に次するや、刺史張端公が書を恵んで、別を叙せしに酬るし、絶句二章あり。

韶州南去接宣溪、雲水蒼茫日向西、客淚數行先自落、鷓鴣休傍耳邊啼。

兼金那足比清文、百首相隨愧使君、俱是嶺南巡管内、莫欺荒僻斷知聞。韶州は唐初に姑興郡といふ、大曆十四年、愈が兄たりし起居舍人韓會、罪を以て此州の刺史に貶せられしことあり、愈時に十歳の幼齡を以て相隨て遷りぬ、今や四十年を経、均しく貶謫の苦懷を以て、其地を過ぐ、豈に多少の感慨なきを得むや、是に於てか、始江口感懷の一首あり。

憶昨兒童隨伯氏、南來今只一身存、目前百口還相逐、舊事無人可共論。一結無限の悲愴、人を動かす者、遍體の至情、亦た復た然るのみ、その目前百口といふは、明かに家人の相及び、こゝに行を借にせしをいふ者にし

て罪を得し者、眷屬の隨逐せられ、追て遣らるゝは、當時の風習なりき、而して此際、小女道にして死し、層峰驛傍の山に葬りしとなど、もあり、客行匆忙、かくの如き不幸に遭ふ心、腸斷絶せざるとなきを、得べけむや。

かくて曾江口に至れば、潮州漸く近きにあり、時に春將に暮れ、なむとし、て江邊一夜、雨乍ち昏く、謝豹啼過して、客子の腸殆んど九廻す、殘燈一穗、冷かに照すとき、牀頭人なく、寂然として、涙自ら落つ、乃ち姪孫湘に示す詩二首あり。

雲昏水奔流、天水莽相圍、三江滅無口、其誰譴涯圻、暮宿投民村、高處水半扉、犬雞俱上屋、不復走與飛、篙舟入其家、冥聞屋中啼、問知歲常然、哀此爲生、微海風吹寒晴、波揚衆星輝、仰視此年高、不知路仰歸、舟行亡故道、屈曲高林間、林間無所有、奔流但潺潺、嗟我亦拙謀、致身落南蠻、茫然失所歸、無路何能還。

征行七句に餘り、正月の中潯に都を出で、三月廿五日に至り、漸く八千の里程を經過し、始めて潮州に達するを得たり、當時の例として、官を得て

任に就くもの、必ず謝表あり、愈乃ち先づ筆を驅れり、而してこの儘々二月の間、廟堂の形勢、愈よ非ならむとする者あり、裴度はすでに罷められ、崔群は全く孤立の位地に在り、武備衛李弼等、愈と相知れる者、漸くにして斥けられむとす、僻陬の地にありて、之を聞く、其耳にするの遅きために、心は益すせかるゝなり、遷徙常ならざる世上の光景に對しては、胸中の感慨抑ふる能はず、一片の悲音は、表中に入りて、北向再拜、遙に帝關に進め、只管上の怒を和げむことを計れり、而かも、その居然として愛世の念に驅られて然りしを記銘せざるべからず、其文に曰く、

臣某言、臣以狂妄、愚不識禮度、上表陳佛骨事、言涉不敬、正名定罪、萬死猶輕、陛下哀臣、忍忠、恕臣、狂直、謂臣言雖可罪、心亦無他、特屈刑章、以臣爲潮州刺史、既免刑誅、又獲祿食、聖恩弘大、天地莫量、破腦剜心、豈足爲謝、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、臣以正月十四日、蒙恩除潮州刺史、即日奔馳上道、經涉嶺海、水陸萬里、以今月二十五日到州、上訖、與官吏百姓等相見、具言朝廷治平、天子神聖、威武慈仁、子養億兆、人庶無有親疎、遠邇雖在萬里之

外、嶺海之陬、待之一如綏甸之間、犛殺之下、有善必聞、有惡必見、早朝晚罷、兢兢業業、惟恐四海之內、天地之中、一物不得其所、故遣刺史、面聞百姓疾苦、苟有不得、得以上陳、國家憲章、完具爲治、日久守令、承奉詔條、違犯者鮮、雖在蠻荒、無不安泰、聞臣所稱聖德、惟知鼓舞、歎呼不勞、施爲坐以無事、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、臣所領州在廣府極東界上、去廣府雖云纔二千里、然來往動皆經月、過海口下惡水、濤龍壯猛、難計程期、颶風驟集、惡禍不測、州南近界、漲海連天、毒霧瘴氣、日夜發作、臣少多病、年纔五十、髮白齒落、理不久長、加罪犯至重、所處又極遠、惡愛惶慙、悸死亡無日、單立一身、朝無親黨、居蠻夷之地、與魑魅爲群、苟非陛下哀而念之、誰肯爲臣言者、臣受性愚陋、人事多所不通、惟酷好學問、文章未嘗一日暫廢、實爲時輩所見、推許、臣於當時之文、未有過人者、至於論述陛下功德、與詩書相表裏、作爲歌詩、薦之郊廟、紀泰山之封、鑲白玉之牒、鋪張對天之闕、休揚厲無前之偉蹟、編之乎詩書之策、而無愧措之乎天地之間、而無虧、雖使古人復生、臣亦未肯多讓、伏以大唐受命、有天下、四海之內、莫不臣妾、南北東西、地各萬里、自天寶

之後、政治少懈、文致未優、武烈不剛、孽臣姦譟、益居恭處、播毒自防、外順內悖、父死子代、以祖以孫、如古諸侯、自擅其地、不貢不朝、六、七、十、年、四、聖、傳、序、以、至、陛、下、陛、下、即、位、以、來、躬、親、聽、斷、旋、乾、轉、坤、開、闢、風、飛、日、月、清、照、天、戈、所、麾、莫、不、寧、順、大、宇、之、下、生、息、理、極、高、祖、創、制、天、下、其、功、大、矣、而、治、未、太、平、太、宗、太、平、而、大、功、所、立、咸、在、高、祖、之、代、非、如、陛、下、承、天、寶、之、後、接、因、循、之、餘、六、七、十、年、之、外、赫、然、興、起、南、面、指、麾、而、致、此、巍、巍、之、治、功、也、宜、定、樂、章、以、告、神、明、東、巡、泰、山、奏、功、皇、天、具、著、顯、庸、明、示、得、意、使、永、永、年、代、服、我、成、烈、當、此、之、際、所、謂、千、載、一、時、不、可、逢、之、嘉、會、而、臣、負、罪、嬰、璽、自、拘、海、島、戚、戚、嗟、嗟、日、與、死、迫、曾、不、得、游、技、於、從、官、之、內、隸、御、之、間、窮、思、畢、精、以、贖、罪、過、懷、痛、窮、天、死、不、閉、目、瞻、望、宸、極、魂、神、飛、去、伏、惟、皇、帝、陛、下、天、地、父、母、哀、而、憐、之、無、任、感、恩、懇、懇、惶、惶、追、之、至、謹、附、表、陳、謝、以、聞、

一讀する者誰か情詞哀迫り無限乞憐の態あるを覽ざらむや佛骨の一表たどひ論旨に於ては取るべからざる者ありとするも行動のみを以てすれば一世を震懾すべき快心事たりき韓愈たるもの諫むるところ

行はれずむば流離死に瀕するも俯仰天地に愧ぢざるべく亦た自ら惜むところあるべからず而かるを今や醜て封禪の事をいひ憲宗が大を好み功を喜ぶ心を挑撥し迎合以て赦を乞ふに似たる形跡あるは如何嗟乎文公も亦た長しへに窮裔に傲骨を抛つゝの氣慨なく操守なくその本領を狂げて前度の一諫忽ち悔心の生せしなきを得むや且つ夫れ封禪の事たる尙古主義を標榜する支那にありては一大盛典たること疑ふべからず然れども是れ四海の太平と積年の善政とを昭耀する所以のもの一言以て之を蔽へば粧飾的もしくは誇張的にしてその重ざる所は單に禮に在り吉しへ稱す受命の帝王曷ぞ嘗て封禪せざらむ蓋し其應なくして事を用ふる者はあらむ未だ符瑞の見はれしを睹て泰山に臻らざる者あらざるなり命を受くと雖も功至らざれば梁父に至れども徳洽ぬからず洽ねければ日に暇給せざることあり是を以て事に即く用て希なり傳に曰く三年禮を爲さざれば禮必ず廢す三年樂を爲さざれば樂必ず壞る世の隆なる毎に封禪して答ふ衰ふるに及んで

息むと。彼の秦皇漢武の如きは、全く神仙の邪説に迷ひ、之を修せし者に
して、爲に國帑を浪費し、少からざる弊害を馴致せしこと疑ふべからず。
韓愈たるもの、其君の梁武たるを止むる能はず、而して却て漢武を以て
之を導かむとす。是れ五十歩を以て、百歩を笑ふに外ならず。若し清時に
際せば猶ほ且つ可なる者あらむ。當時天下の形勢は、余が前に數ば述べ
しが如く、かの廣德以來、河の南北に跋扈跳梁し、自ら官吏を黜陟し、貢賦
を供せざりし藩鎮も、しばし平定を告げて、憂なきが如しと雖も、河北
の降服も、至竟沈黙に外ならず。豈に以て昭平無事の世と謂ふを得むや
韓愈の本志、たゞ封禪を假り、一捷の餘勢に乗じ、天子の威を群鎮に示す
にあらば、一種の見解たるを失はざる者あらむと雖も、この表中の辭句
に於ては、さばかりの深義ありとも見えず。復た他に之を確證するに事
實無きに於てをや。歐陽公が揣摩の言を爲し、前世名ある人事を論ずる
時に當り、感激して誅死を避けず、眞に義を知る者の如し、貶所に至るに
及では、戚戚嗟怨して堪へざるの窮愁、文字に形はるゝことあり。韓文公

と雖も、免れずといひしは、蓋し實際を穿てる者ならむ。余は固より窮境
の苦時に然る者あるべきを知る。故に之に對し、少からぬ同情を以て、觀
るに吝ならずと雖も、行爲其者に向ては、飽くまで鼓を鳴らして攻むる
に怯ならず。さばれ歐陽公が忽ち筆を轉じて、或は又封禪を以て帝に諛
ぶるを罪す、皆非なりといへるは、余その何の謂たるを解せず。かくの如
く、論じ來れば、天下に善惡正邪の別なきに至るべく、斷じて有道者の口
より出づべき者に非ず。韓愈の眞意は、召還を望むに在り。臣子の情、固よ
り然り。唯だその文章に至りては、摠括して佞を獻ずる者、頗る陋なり。是
れ均しく説を爲す方法を誤りし者と雖も、佛骨の一表は前にもいへる
如く、其過や猶ほ君子たるを失はず。こは直に婦女の情態をなす者にし
て、斷じて相伴しからず。蘇東坡が黃州より汝州に量移せしとき、上りし
表に云はく、伏して訓詞を讀むに、人材實に難く、終に棄つべからざるの
語あり。臣昔じ常州に在りしとき、田租を有して、餽粥を給す。常州に居住
するを望むを許さしめむと欲す。輒ち徐州に河を守り、及び妖賊を獲る

事を叙し、庶くは功過相除するに因て、所便に従ふを得むと。之を愈の表に比するに、二者均しく命を君上に期することを爲せども、其情は同じからず。坡は自ら往事を列し、皆その實録にして、乞ふところは自ら見地ありて、一の佞詞なし、眞に假すべきを爲す。この一點に於ては文公遂に及ばざるなり。

表は朝廷に達して、憲宗の覽に入れり。皇帝陛下天地父母哀而憐之といふは、晏天に號泣して、嬰兒が所生に訴ふる一般のみ。天子爲に惻動し、即ち宰相に謂て曰く、昨韓愈が潮州に到る表を得たり、因て思ふに、その諫めしところ、佛骨の事たるや、大に是なり。我豈に知らざらむや。然れども、愈や人臣として、人主佛に事へ、乃ち年促ると言ふべからざりしのみと知るべし。至誠天に通ずる情は、やがて憲宗の怒心を翻したるを、帝の言は、復た愈を用ひむが爲に出でし者にして、先づ宰相の意を覩むとせし者なりき。而して皇甫鏞一輩の徒は、小人の常として、飽くまで執拗にして、氷炭相容れず、乃ち率先して奏して曰く、愈や終に太だ疎狂なりし

ばらく一郡を量移すべしと。是に於てか、憲宗はせめてもの慈惠を彰はさむ爲に、愈をして潮州の惡土より、袁州の善地に徙さしめき。その詔の達せしは、正に十月にして、愈はすでに潮陽に在りて、七個月を斷送したりき。

愈か潮州に在りしや、比較的恩遇を蒙りし者ありしに似たり。孔大夫に謝する狀に、州小にして俸薄く、闕くるあらむを慮り、毎月別に錢五十千を給し、以て使錢の充を送らるゝとあるを見て知るべし。而して此書は、七月二十七日の牒を奉じて、後に筆を走せしものなれば、早くとも八月中の作に係れり。文中に、妻子男女并に孤遺孫姪奴婢等、尙ほ未だ至らずとあるを見れば、唯だ韓湘一人の従ふあり、途に相及びし家眷、即ち始興江上の時に謂ふところ、目前百口は、屢く某處に止まりしことなどあるもの歟。事實の眞否は、今更詮索すること能はず。故に朱子は此書を以て、致ふべきに由なしといひ、方崧卿が年譜には、姑く之を存すといへり。然れども、之を現時の事にしていふも、縣官妻孥を拉して、家を出で、之を道

に留め、已れ先づ其地に至り後、改めて迎致するなど、必無のことにもあらず。余輩は、唯だ家人の遅く至りしを記せば足れり。
筆を轉じて、余はこの短日月の間に、潮州の刺史として、韓愈が如何なる功績を爲せしかを尋ねざるべからず。愈の始めて潮州に至るや、先づ民の疾苦を問ふ。皆曰く、惡谿に鱷魚あり、民産を食ふて盡きむとす。と。惡谿は府城東の地なり。抑も鱷魚の物たるや、龍吻、虎爪、蟹目、鼉鱗、長さ二三丈、形守宮に似たり。身は黄色にして、四足あり、修尾數尺、末大にして、箕の如く、芒刺鉤を成す。仍ほ膠ありて粘す。舉止、蹇疾にして、鋸齒善く物を攫す。多く水濱に於て潜伏し、人畜近づけば、屏を以て擊取す。猶ほ象の鼻に任かすが如し。鹿の如き善儒の者に在りては、その崖上を行くとき、この惡魚が一聲の嗚吼を聞き、大に怖れ、直に崖上より落ち、因て蠶食せらるゝといふ。神猛想ふべし。愈乃ち四月二十四日を以て、一文を草し、その僚を遣はし、羊豚を以て谿水に投じ、試に之を祝せしめき。所謂鱷魚の文は、即ち是なり。曰く、

維年月日潮州刺史韓愈、使軍事衙推秦濟以羊一猪一、投惡谿之潭水、以與鱷魚食而告之曰、昔先王既有天下、列山澤罔細獨刃、以除蟲蛇惡物、爲民害者、驅而出之。四海之外、及後王德薄不能遠有、則江漢之間、尚皆昇之、以與蠻夷楚越、况湖嶺海之間、去京師萬里、設鱷魚之涵淹卵育於此、亦固其所。今天子嗣唐位、神聖慈武、四海之外、六合之內、皆撫而有之。况禹跡所揜揚州之近地、刺史縣令之所治、出貢賦以供天地宗廟百神之祀之壤哉。鱷魚其不可與刺史雜處此土也。刺史受天子命、守此土、治此民、而鱷魚睥然不安、谿潭據處、民畜豕鹿、麋以肥其身、以種其子孫、與刺史亢拒、爭爲長雄。刺史雖驚弱、亦安肯爲鱷魚低首下心、佞佞眼、爲民吏羞、以偷活於此邪。且承天子命、以來爲吏、固其勢、不得不與鱷魚辨。鱷魚有知其聽、刺史之言、潮之州、大海在其南、鯨、鰓、之類、無不容歸、以生、以食。鱷魚朝發而夕至也。今與鱷魚約、盡三日、其率醜類、南徙于海、以避天子之命。吏三日不能至、五日不能至、七日不能至、是終不肯徙也。是不有刺史聽從其言也。不然、則鱷魚冥頑不靈、刺史雖有言、不聞不知也。夫傲天子之命

吏不聽其言不徒以避之與冥頑不靈而為民物害者皆可殺刺史則撰村技吏氏操強弓毒矢以與鱷魚從事必盡殺乃止其無悔

其辭や嚴其義や正筆力最も遒勁たどへば問罪の師の如く正正堂堂能く他をして心寒く膽慄せしむ郭正域が韓公の前身神道の中より來るその精鬼神に通して風雷を走らしむといひし者信なり其夕乍ち暴風震雷あり湫水の中より起り數日にして水盡く涸れ西に徙ること六十里是れより潮州全く鱷魚の患なかりき後宋の世に及び陳堯佐のこの州に通判たりしとき惡谿復た鱷魚を生じ近づくべからず萬江の地硫黃の村民の其害を受けし者あり堯佐吏に命じ之を捕へ得たり乃ち數を市に鳴らし告ぐるに文を以てし之を戮し其忠並に息みきといふ是に於てか潮人嘆じて曰くむかし韓公鱷に諭して聽かしめ今や陳公鱷を戮して懼れしむ爲す所異なりと雖もその異物醜類をして革化せしめ人を利するに至りては一なり吾が潮州三百年を問して二公を得しは幸なりと之を偶然といへば偶然のみ然れども韓文公が文筆の靈に

至りては余輩全然之を否定するの狂を爲さず

次は文教を布きし一事にしてこは前者に比して更に推稱すべき者なり潮州の地たるや前に數ば言ひしが如く南方瘴厲の境に在り未だ全く王化に洽はず民風頗る卑陋僅に蠻夷を脱せしのみ斷髮文身の俗を去ること遠からず是に於てか愈は郷校を置かむとし之を朝に請ひ因て牒を進めて曰く十室の邑必ず忠信あり今や此州の戸萬有餘豈に庶幾する者なからむや刺史縣令自ら之が師と爲らざれば里閭の後生從背する所無からむのみ趙德秀才沈雅專靜頗る經史文章に通じ能く先王の學を知り且つ異端を排して孔氏を宗とす以て師たるべし請ふ海陽縣尉を攝して衙となし専ら州學を勾當して以て生徒を督することわらむと郷校すでに成り趙子の督學頗る好結果を奏し流風餘韻長しへに後世に傳はり潮の士常に文行に篤く延いて齊民に及び號して治め易しといふに至る文翁の蜀を治むる即ち以て比すべし而して是れ愈が千歲の後猶ほ且つ崇祀せらるゝを得し所以にあらずや

愈の潮州に在るや、邊地與に語るべきものなし。前記の趙徳を除いて、偶
ま一僧あり、名を大顛といふ。乃ち之を山より召して、州郭に至らしめ、留
むること十數日、相語つて佛に就いて少しく究むるところありしが如
し。愈自ら顛の人と爲りを評し、實に能く形骸を外にして、理を以て自ら
勝ち、事物の爲に侵亂せられず、之と語るに盡く解せずと雖も、要するに
自ら胸中に滯礙なし、以爲へらく得難しと、因て與に往來したりきとい
へり。その神を祭りて海上に至りしとき、遂に其廬に造り、後に袁州に移
らむとせしに方りてや、衣服を留めて別となしぬ。是に於てか、先に己れ
が數ば駁撃を加へし人々より、反つて佛氏を奉ずるなきかを疑はるゝ
に、さへ至りき。尙書孟簡は、即ち其人なりき。簡は夙に佛を嗜み、劉伯芻、歸
登、蕭俛等と梵言を譯次せしとあり、之を聞くや、書を移して、愈を責めぬ。
愈はこゝに僅かに佛理の端を知りしならむと雖も、區々數月間、果して
何の得る所ぞ。況んや、彼が強固なる保守的精神と尙古的主義とは、斷じ
て移し難きものたるに於てをや。愈は乃ち書を孟簡に贈り、答をなせり。

その中に曰へることあり、釋老の害は、楊墨に過き、韓愈の賢は、孟子に及
ばず。孟子すら之を未亡の前に救ふこと能はず、而かるを韓愈は乃ち之
を已壞の後に全うせむと欲す。嗚呼、其れ亦た其力を量らず、且つ其身の
危くなりて之を救ふことなくして、以て死なむを見るなり。然りと雖も、
其道をして愈に山て粗ぼ傳はらしめば、滅死すと雖も、萬々恨なからむ。
天地鬼神臨んで上に在り、質して傍に在り、又安んぞ一摧折に因り、自ら
其道を毀つて邪に従ふを得むやと知るべし。愈の操守抱負は、確然とし
て動かざるを、石に匪ず、故に轉すべからず。席に匪ず、故に捲くべからず。
愈の佛に於けるや、一に國粹保存的主義を以て之に對し、所謂食はず嫌
ゆ弊なき能はず、幸か不幸か、余しばらく之を言はず。唯だ之を柳柳州に
比しては、大に異なる者あるを見ずむば、あらず。若し夫れ、司馬溫公が此
書を誣左とし、公は書に於て觀ざる所なし、蓋し嘗て遍ねく佛書を觀て、
善を取る。その精粹を取て、その糟粕を排せしのみ、然らずむば、何を以て
か事物の爲に侵亂せられざるを知らむやといふに至りては、推測の餘

りに無意義なるを見るに堪へず。鄧瑀が復た斥譴の辭を逞くし、此書を指して、過を文り、非を飾りし者となし、交擇はさるべけむやといひしが如きは、居然たる頑冥者流、世事に通せず、孤峭自ら喜ばむと欲する者にして、見地の偏狹なる、固より取るに足らざるべきなり。韓愈が潮州に於ける行事は大抵此の如し。

この年七月、群臣尊號を帝に上りて、元和聖文神武法天應道皇帝といひ、宣政樓に御し、冊禮を受けて畢り、丹鳳樓に御して、天下に大赦しぬ。愈乃ち賀冊尊號表あり、而して前にいひしが如く、袁州刺史に轉すべき詔勅はその十月に於て始めて達したり。是に於てか、愈は遙かに北天を望みて、憲宗の恩遇を謝し、更に浮雲蔽日の嘆を移して、身の尙ほ要路の津に登る能はざるを悲み、十一月を以て潮州の地を去れり。此際その平生交誼を通ぜし趙德と別をなし、相携へて行を爲す能はざるを嗟し、一篇の五古に其意を發するを禁せざりき。

我遷於揭陽君先揭陽居、揭陽去京華、其里萬有餘、不謂小郭中、有子可與

娛、心平而行高、兩通詩與書、婆娑海水南、簸弄明月珠、及我遷宜春、意欲拂以俱、擺頭笑且言、我豈不足歟、又奚爲於北、往來以紛如、海中諸山中、幽子頗不無、相期風濤觀、已久不可渝、又嘗疑龍蝦、果誰雄、牙鬚蜂、蟻魚、鼈、蟲、瞿、瞿以狙、狙、識、一、已、忘、十、大、同、細、自、殊、欲、一、窮、究、之、時、歲、屢、謝、除、今、子、南、且、北、豈、非、亦、有、國、人、心、未、嘗、同、不、可、一、理、區、宜、各、從、所、務、未、用、相、賢、恐、

袁州の地亦た南方にあり、唯だ潮に比して、纔に善地といふべきのみ。この行、また韶州を過ぎむとす、乃ち先づ詩を其州の刺史張端公に寄せ、圖經を借りて曰く、

曲江山水聞來久、恐不知名訪倍難、願借圖經將入界、每逢佳處便開看、この行や前度に比して、聊か得意を稱すべき者あり、故を以て、途中江山の觀を爲すに意ありし者か、而してその韶州に入りしは、元和十五年の歲初にありし者の如し、故に張公に留別するの詩に曰く、

來往再逢梅柳新、別離一醉綺羅春、久欽江總文才妙、自歎虞翻骨相屯、鳴笛急吹爭落日、清歌緩送款行人、已知奏課當徵拜、那復淹留詠白蘋、

集、中張公が詩を以て相賀せしに酬みし七律あり、亦たこの時前後の作ならむと思はる。

明時遠逐事何如、返赦移官罪未除、北望詎令隨塞鴻、南遷纔免葬江魚、將經貴郡煩留官、先惠高文謝起予、暫欲繫船韶石下、上賓虞舜整冠裾、辭句の工妙ならざるを咎むる勿れ、唯だ真情の流露して抑遏すべからざるを見れば足らむ。

これより先夏四月の頃に於て、裴度は相位にあり、言はざるなきを以て皇甫鐸の黨の爲に擠せられ、河東の節度使となり、朝士賊忠の徒、大にその勢力を失ひたりしが、十月に至りて、裴度は瑣事を以て、上の怒を得、貶せられて江陵令となり、崔群は又帝の間に對し、玄宗治亂の事を言ひ、諷諫を爲せしを以て、出だされて湖南節度使となり、中外漸く鐸等に切齒するに至りぬ、韓愈は袁州に向ふ途中に於て、此等の事を聞きしなるべし、而して愈と文字の契淺からざりし柳宗元も、亦たその十一月に於て病死せり、愈が心中の悲悼煩悶、蓋し甚しき者ありしならむ、然れども、か

くの如きは猶ほ且つ言ふに足らず、愈が袁州に遷せしと略ぼ同時に憲宗は暴かに中和殿に崩じぬ、愈が袁州に移されしは、帝が最後に於けるせめてもの恩恵たるに過ぎざりき、愈たる者何ぞ痛嘆せざるを得むや、おもふ慟哭地に伏し、血涙覆の如く、地に灑きし者ありけむ、を蓋し、憲宗の崩去は、頗る曖昧にして疑ふべきものあり、史を作る者皆諱て書せず

と雖も、前に嘗て金丹を服せし爲に、數ば躁怒を發し、左右宦官、往々にして罪なく以て死する者あり、因て自ら危懼して措かず、之を弑せしは、明白なる事實なり、而して謀を下せし者は、内常侍陳弘ならむと雖も、その黨類深く之を秘し、又賊を討たず、但だ藥發せし爲といひ、外人能く明にする無し、余は史を讀んで、こゝに至るに、毎に憲宗、英明の資を以て、空しく、神佛に荒惑し、唐祚を回復すること能はざりしを、浩嘆せず、むばあらず。

韓愈が此時の衷情は、實に推度の中に在り、愈はかつて憲宗の知遇に感じ、ひたすら身を以て盡すの志ありき、帝の英主なるは、愈がしばしば稱

せしところにして、又之に違はざりき。唯だ不幸にして、扶桑影なきに非ざるも、浮雲之を蔽ふて乍ち昏く、爰蘭香なきに非ざるも、秋風先づ之を破りしのみ。滿廷の奸豎は、普く其明を掩へり、特にその末路の如き、狂暴を以て慘禍をなせし者とはいへ、韓愈たるもの豈に之を以て驟かに其主を去ることを爲さむや。否な、臣子の情として、益す之を捨つるに忍びざる者ありしならむ。而して今や憲宗は崩ぜり、少くとも人主の中に於て、最も深く愈を知りたる人は、業已に斯世を去れり。さばれ愈は憲宗の崩去の爲に、この世を捨つることを爲さざるなり。愛世の念、尙ほ愈を驅て、暗愚なる穆宗にさへ仕へしめ、白髮衰老の軀を以て、敢て危難を冒すことさへ辭せしめざりき。他なし、愈はどこまでも、唐朝その者の爲に盡さむとする志を滅せざればなり。

元和十五年正月八日、任に袁州に至れり。是に於てか、謝上表あり、又穆宗の即位を賀して、賀表一篇あり。次いて、慰國哀表、賀赦表、賀冊皇太后表、賀慶雲表などあり。而して、其年の十月に於ては、召されて京師に上りき。袁

に在ること、亦た一年に滿たず。其間傳ふべき治績なほ一あり。初め袁人男女を以て隸となし、期を過ぐるも、贖はざれば、之を没入す。愈の至るや、悉く備を計りて、没するところを贖ふを得て、之を父母に歸せし者、七百餘人。因て與に約して、その隸たるを禁じぬ。こは柳宗元の柳州に於けると其科を同うしたる者にして、仁人の功澤ともに炳焉たる者あるを知るべし。



第九章 成德軍の宣慰使

烈士暮年、壯心未だ已まず。韓愈年すでに五十を越え、餘命幾ばくもあらざらむとす。掉尾の大活動は、おもふに夙夜企圖せし者なるべし。而して今や愈に對して汲引の惠を垂れし唯一の有力者たる裴度も、崔群も、共に外に在り。其他肝膽相照したる者、一人の朝に立つを見ざるなり。城狐社鼠、小人の跋扈は、日に甚しからむとす。而かも愈は袖手して野に在り、空しく之を傍觀す。衷心の苦察すべきのみ。そも如何にして再び朝に入り、最後の思ひ出たるべき大功を建てむとするか。あはれ覺束なきは憂國家としての韓愈が當時の身の上なるかな。

穆宗は驕奢一も爲すなき天子にして、到底社稷の運を回復すべき望を囑すべきに非ざりき。唯だ幸にして、翰墨を愛するの癖あり、故を以て當代善書の譽ありし柳公權は、夏州の觀察判官より擧げられて、翰林侍書學士の清班に黜じ、弱志無能、經綸の才に至りては全く缺乏せる元稹さ

へも、帝が東宮に在りしとき、宮人その歌詩を誦せしことありとて、朝論以て鄙となせしに拘はらず、入て祠部郎中知制誥となるを得たりき。而して愈の親友たる崔群も、如何なる機會よりかは知らず、又湖南の節度使より召されて、吏部侍郎となれり。是に於てか、愈が進むべき青雲一路、漸く開かれ、群等の盡力によりて、歳の十月、召されて、國子監の祭酒となるを得たりき。

愈が前歳の春、潮州に謫せらるゝや、舟を洞庭君山の下に泊し、湘妃に戀りしことあり。神卜吉を示して、曰く、汝が志の如くならむと。果然潮を去つて、袁に即き、今また位を朝に獲て、その章綬を復すを得たり。是れに於てか、先づ張得一といふ者を選し、私錢十萬を以て、堂陛を修せしめ、斷碑を起し、樹て、文を作りて、新石に刻せしめき。その初、吾骨を瘴江に收めよといひし、孤客は恙なくて、京を歸るを得たり。途上安陸に次し、隨州周員外に寄する詩あり。曰く、

行行指漢東、暫喜笑言同。雨雪離江上、蒹葭出夢中。面猶含瘴色、眼已見華